
恋愛完全マスター

Toki.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛完全マスター

【NZコード】

N5438E

【作者名】

Toki.

【あらすじ】

有名な進学校に通っている、紺野大将。しかし高校2年生になつた彼に待つていたものは、親との無常な勝負だつた。『学年末の成績順位を去年より20位あげる。出来なかつたら、アメリカの学校で医師の勉強をしてもらう』どうしても医師になりたくない、これから離れたくない、だけど、この学校で正当な方法を使い20位以上成績をあげるなんて無理だと思つてはいる、彼がとつた行動とは？初、シリアス的内容に挑戦。…読者様に質問です。彼、大将の名前を貴方は間違えずに読みますか？『たいしょう』と読んだ貴方は

不正解
です。

#00 プロローグ（前書き）

1話以降のタイトルは、その話で重要なのか？ って想う文
章をもつてきています。
プロローグは別です。

今回、初シリアル的な話に挑戦します。
『的な』と書いているのは、シリアルといつ意味をあまり理解して
いないからです…。
そんなこんなで書いてこますが、ようしければどうぞ最終話までお
付き合いください。

『最後まで書き上げる、そして読者様に楽しんでもらいつ』との
モットーにして書いていきたいと思います。

では、『恋愛完全マスター』を堪能してくださいませー！

#00 プロローグ

「分かったよ……」

夜、親父の部屋で説教くさい話を聞き終えると、俺は小さい声で返事をした。

俺たち子供は、生まれたときから親という縄に縛られて生きている。もちろん、そうでない子もいるかもしれない。

しかし、いつの時代も結局は経済的に支えてくれる人が居なくては、生きていけない。

だから、親に縛られることが、悪いことではないことは分かっている。

生きていくためには、従わなくてはいけない。

俺も例外ではないのだ。

数秒前、某有名病院で働いている親父に、説教といつも命令を、親父自身の地位を守るために下した。

「学年末の成績順位を去年より20位あげる。出来なかつたら、アメリカの学校で医師の勉強をしてもらつ

去年の俺の成績は29位だった。つまり、上から数えて9位以内に入れということ。

アメリカの学校なんて行きたくない。やつと、親友と言えるような友達も出来たんだ。

それに、医師にもなりたくない。俺にだつてしたいことがある。絶対、親に反対されるだろうから、親友以外には言つていないが。

ちなみに俺が、こうじう命令を下されたのは、今回が初めてというわけではない。今の高校に居るのも、中学校のときに親父との賭けに負けたせい。

本当は、もっと普通の学校に行きたかったのに。

一言告げた後、俺は親父の部屋の入り口にある、大きな扉を両手で押し開けた。

30mはあると思われる廊下を一直線に進み、突き当たり近くにある階段を上ったあと、右に曲がり、10mほど歩いてやつと着く、俺の部屋に足を進ませた。

広い家なんてものは、お金がかかるだけで意味がない。

移動が面倒だし、いい事といえば、小さこころ隠れん坊が出来たことぐらいいだ。

それも、小学校低学年ほどで飽きたし、高学年からは親に勉強ばかりさせられたからな。

面倒だつたけど、あのこの俺は何でも言つことを聞くいい子だつた。

…何でも叶つ」とを聞くのは、今も変わらないが。

自分の部屋へと着くと、俺はベッドへと直進して体を預けた。

「明日は始業式か…」

そうつぶやいた後、俺の意識は遠のいていった。

「お…ちゃん。お坊ちゃん、起きてください」

ベッドの横で、俺の体を軽くゆすりながら、起きしてくれる人物はキヨ爺。小さいときから、俺をずっと見守ってくれている人物であり、俺がこの家で唯一、心を許せる人物でもある。

「お坊ちゃん、起きてください」と、キヨ爺は仕事に就けなくて、お父様に怒られてしまいまーす」

悲しそうな声をあげるキヨ爺のおかげで、俺は朝の誘惑に打ち勝てた。

「あっがとう、キヨ爺」

「はえ？ 何がでしょーか？」

「いや、気にしないでくれ。キヨ爺、おはよう

「お早、わいわいこます」

優しい微笑を俺に向けて、キ田爺は俺の部屋から出て行った。

俺は再び、朝の誘惑と戦つのを恐れ、速やかにベッドから降り、自分の部屋に設置してある、洗面所へと向かい、冷たい水で顔を洗つた。

頭がすつきりしたのか、昨日親に言われたあの言葉を思い出していた。

俺だって、反抗しようと思ったことはある。だけど、そんなことをしては、生きていけない。

結局は、経済的に親を頼らなければならぬのだ。

だから俺は、なんとかこの屈強を乗り越え、自分の道を切り開くことを決心した。

つまり、学年末の成績順位を9位以内にするということ。

9位以内なら、頑張ればいける。そう思う人もいるだろうが、俺の通っている学校は、世間にも結構名が通っている有名学校。

つまり、頭がいい奴ばかりなのだ。

その中で、50位以内に入っていることがで、誇ると悪いことなのに、あの親は俺に無理難題を押し付けてくるのだ。
どうしても、医者にしたいらしい。

よし、頑張るぞ！

そう心に誓い、俺は天にこぶしを突き上げ、俺は「」飯を食べにリビングへと向かった。

「あ、キヨ爺、学校の用意を準備しておいてくれないか？」

リビングに着いた俺は、いつものように俺が「」飯を食べる席の隣で、いつも立っているキヨ爺に声をかけた。

「わかりました」

そういうキヨ爺は、いつもどおり笑顔だった。いつも「」飯を食べにいるのに、疲れはないのだろつか？

そんなことを思いながら、「」飯を食べ終えて、洗面所へと向かう。

歯を洗い終えると、次はヘアーチェック。ワックスをつけ、いまどきのカツコイイと評されている若者の髪型・・・にするわけではない。

俺は、むしろその逆だ。

わざと寝起きのような髪型へと変え、ボサボサにする。

「ボサボサにするといひませ、今の若者とさせじ変わらない氣もするが。」

とにかく、カツコイイという表現から遠ざける努力をする。

その髪型プラス、どつかのオタクがかけてそうな、度の無い黒縁メ

ガネをかけ、制服も優等生にあわせて、乱れた服装をせず、きちんと着る。

「どうしてこんなことをするのかって？」

「…言いたくは無いが、俺は顔には結構の自信がある。

中学校時代の俺は、街を素の姿で歩いていると、2日に1回は『モデルしない?』と聞かれるほど…。

女共には、無駄にモテた。ファンクラブなんてものも出来ていたらしい。ストーカーされることなんて、日常茶飯事だ。

さすがに、刺していくとかは無かつたが。

とにかく、そんな生活が嫌で、俺はその日常から抜け出し、今の姿となつた。

奇遇なことに、今通っている高校には、中学校の知り合いがない。

今の俺と前の俺を合点させるのは、名前と住所だけ。

去年、1年間学校に居たが、ばれそつになつたことは一度も無かつた。

高校の奴らで、俺の素の姿を知っている友人といえば、高校で出来た親友ただ一人だけ。

「よし、出来た」

俺は田の前にある、壮大な鏡を見て一言呟いた。

キヨ爺が準備してくれているであろう、学校の準備を取りに今一度リビングへと戻る。

そこには親父と、母親がご飯を食べていた。

親は、俺のこの姿を見ても何も言わない。

俺なんかの事に、関心がないのだろう。

無言で鞄に手をかけて、玄関へと向かった。

「大将」

「何?」

俺は親父に呼ばれて、鞄を片手に振り向いた。

「勉強、頑張れよ」

「ひめせえよ」

そう言いたかったが、口元は出せずに俺は無言で玄関のドアを開いた。

#00 ブローグ（後書き）

…メインヒロインが出てくる配置もないですね。
申し訳ござりませ。

推敲がもつぱら苦手な盗鬼ですので、もし変な箇所があればドンドンメールでもなんでもしてあげてください。

一応、

メールアドレス net_touki_net@yahoo.co.jp

感想をたくさんいただけると、作者の励みになります。

あと、一話一話のあとがきをここに書くのは好きじゃないので、自分のブログにその話の裏話等書く予定です。
よろしければ、訪問してみてください。

<http://plaza.rakuten.co.jp/mida>

845 /

春。

そよ風に乗せられ、この時期がやつてきた。

今年も、ただ平凡に過ぎていく季節だと思つていたのに。

昨晩、ちょっとした強風は、俺に襲い掛かってきたのだ。親との勝負に負けるわけにはいかない。何度も言つが、ここから俺は離れたくないのだ。

「一席、青木 夕菜さん」

教壇に立っている俺たち2年A組の担任である女の先生が、窓側の一番前の席に座っている女の子の名前を呼んだ。

呼ばれた女の子は、聞こえるか聞こえないか、小さな声で返事をする。

これから一年間を、一緒の教室で勉強をする仲間達がいるこの教室で、俺は静かに座っていた。

学校全体の人数は他に比べたら多い。だから、一年間この学校にいたからと言つても、このクラス内でも初めて見る顔ばかりだ。

その中に、俺の親友と呼べる男が入っていたのが幸いな事だらう。

「13席 小泉 龍之介君」

「はい」

ちなみに、さつき返事したのが俺の親友と呼べる友である。

「14席 紺野…」

先生が、名前を呼ぶのを途中で止めた。

「紺野 た、たいしょう君?」

「…だいすけです」

「あ、『めんね! 紺野 大将君』

俺は控えめな声で返事をした。

俺の名前は紺野大将。^{じんの}_{だいすけ}大将と書いてダイスケと読む。大抵の人は、俺のことを最初『たいしょう』と呼ぶのだ。慣れたから、間違えられたからと言つて、どうつて事ないが。

そんなことを考へてゐるうちに、あの先生はこのクラスに居る全生徒の名前を呼び終えたようだ。

「私は、諸戸 未来^{みらい}つて言います。『みらい』と書いて『みく』と読むの。間違えられやすいぶん、私の名前は覚えられやすいのよ

そんなことを、汚れのなさそつな笑顔で言つ。

「これから、みんなに色々お世話になるけど、よろしくねー。」

数人の生徒が「よろしく～」と返しているところを見ると、この一年間なんとかこのクラスはなんとかやっていけるような気がした。

まあ、この先生だからってこともあるのだろうけど。

「ちなみに、私の担当科目は現代文だから、分からないうところがあつたら、こつでも聞きに来てくださいね！」

先生が元気よくそういうと、クラスの半分ぐらいの人が「はーい」と返事をした。

…いや、もつと簡単に言つとクラスの男子共だ。

進学校と言つても、中身は男。あんな若くて、可愛らしい先生がいるのに、興味を持たないわけがない。

かという俺も、先生に興味を持った一人である。

それは、男の性とか、そういうのではなく、担当科目に興味を持つたのだ。

俺が、成績不順の理由の大半は、現代文の点数が平均並みなのだ。

どつしても、得意になれないあの科目。

あの科目を克服しない限り、親と約束した成績には届かないだろう。

どうも、この進学校というやつは、一つの科目でも平均的な点数があつたら、上位に食い込めないようになつてゐるらしい。

だからと言つて、現代文だけを勉強していくは、他の科目で点数を落としてしまつ。

なんとか… 楽に現代文の点数を取れる方法はないものか。

そんな事を考えながら、1ヶ月と半分ぐらいの時間がたつていた。

その間には、クラスの生徒と仲良くなる機会もなく、ただ時間だけが過ぎていくだけだった。

しかし、その時期には一回田のテストがあつたのだ。俺はいつも以上に勉強をしたつもりだったのだが、点数はいつもと同じぐらい。それか、少しいいなつて感じたぐらいだ。

それにしても、今回もどうやら現代文が俺の足を引っ張つたようだ。

つまり、学年9位以内はまだまだ手に届く距離ではなかつた。

「 なあ、龍之介」

俺は最後のテスト返却時間のチャイムが鳴つたと同時に、前の席に座っている龍之介の背中をシャープペンシルでツンと突ついた。

「 ん? 」

「現代文、どうしたら点数を取れると思う?」

「…カソーング」

「お前、顔に似合わず変なこというよな」

龍之介のルックスは、一言で言つとカッコイイ。

付け加えて説明すると、整った顔をしていて、眼鏡をかけている。しかし、その眼鏡も度の入っていない眼鏡。俺と同じように、カッコイイと言われるのが嫌でかけていると言つていたが、外見は全く変わっていない。むしろ、その眼鏡のおかげで、かつてよさが上昇していることを龍之介は気づいてない。まあ、同じような感情を抱いている俺だからこそ、ここまで親しくなれたのだろう。

噂に聞くところによると、ここでの熱狂的なファンが、龍之介様を守る命なんでもを作っているらしい。

『』の漫画から引張り出してきた話なんだ。ベタすぎるだらう。

「龍之介は、頭良いからいいよな。勉強しなくても、点数取れてい るんだから」

「勉強している」

言うのを忘れていたが、龍之介はちょっとした、学校の有名人だ。と言つのも、龍之介は入学して以来、学年成績を一位以外とったことがない。そんな実績を残しているのは、創立以来龍之介だけらしい。

「その勉強の仕方を教えてほしいものだよ。俺がどつかの国に飛ばされて、奴隸同然の生活をしてもいいところのなら別だが」

「してもいい」

「おこ」

「冗談」

……言つておぐが、やつきからこつは俺の顔を一度たりとも見ようとしない。

ずっと、手に持つている本に田に向かっている。

なんだか分からぬが、難しい本といつゝとは見ただけで分かった。

だつて、英語で全部書いてあるのだから。

俺だつて、一応そこそこ成績は取つてゐるから、辞書や自分の頭を使つて読んでいけば、5分ぐらいで一ページを読み終えられる自身はある。……が、こいつときたら、一度も辞書を見ずに、そこに日本語でも書いてあるのかと思つべつりのペースで讀んでいる。

つまり、早いのだ。早すぎるのだ。

どれぐらい前だか忘れたが、「ちゃんと分かつて讀んでるの?」と、一度聞いたことがある。

「こつは俺の顔をチラッと一瞬覗いてから、本にもう一度田にやつ、

英語の文章を見ながら、スラスラと日本語で話し始めたのだ。

将来、英和訳の仕事をさせたら儲けられるだろうな、と思つた。

「 田曜日… 暇？」

次の授業開始を知らせるチャイムがあと少しで鳴るのではないか、とこつタイミングで龍之介は俺に質問をしてきた。

「 田曜日暇だけど、何かあるの？」

龍之介から、遊びの誘いが来るのは滅多にない。この機会を断つてしまつたら、あと数年はお日にかかれないのであらう場面だ。

「 …」

俺の質問には一切答えず、本を閉じて俺をじっと見ている。

「ひ、暇だよ！」

俺が少し大きめな声でそう答えると、龍之介は前を向いた。同時に授業が始まるチャイムが鳴る。

「 素の姿で来てほしい。時間と場所はまたメールをする」

そう言つた龍之介の後姿を見ながら、そつこねば、今日は金曜日だったなど心の中で呟いた。

#01 曰曜日…暇？（後書き）

貴方は、彼の名前を読めましたでしょうか？

紺野は普通に読めますが、大将は『たいしょう』と読んだ人が多い
のではないか？

大将＝だいすけ　なのでお気をつけください。

金曜日の夜、11時半。

ご飯も食べ終え、お風呂にも入り、のんびりとするこの時間に、ベッドの脇の机から、俺の好きな音楽が流れてきた。

簡単に言つと、携帯が鳴つているのだ。

俺は「はいはい」と駆きながら携帯へと手を伸ばす。

送信者の名前を見ると、『ディスプレイには小泉 龍之介と記されていました。

携帯を片手でパカッと開きメールを開くと『田羅田、16時半、トドの銅像の前』と、表示されていた。

龍之介って、メールでもこいつの単調な喋り方するんだよな。

そんな喋り方して疲れないのかな、なんて思ったのは数回のレベルじゃない。

俺は『了解』と龍之介の喋り方の真似をして、送り返してやった。

それにしても、16時半って微妙すぎるんだ。集まる時間にしては。

何があるんだろう。

そんな疑問を持ちながら、その日の夜は眠りについた。

時は立ち、俺は綺麗に晴れた空を眺めながら、駅前にあるトードの銅像の前で一人ぽつんと立っていた。

今の時刻は、16時。

実は、ベタな話なのだが、かれこれ俺は30分以上前からここにいる。つまり、集合時間の一時間前にはここにいたのだ。

「ねえねえ、お兄さん。今なにしてるの？ 暇なら私と遊ばない？」

「すみません。友達を待っているんですよ」

俺は適当に笑みを作り、化粧の濃い20代前半であろうお姉さんに言った。

ここに来て、30分ほどしか立っていないのに、俺はすでに3人のお姉さんから声をかけられている。だから、素の姿は好きじゃないんだ。

「お友達？ ジャあ、お友達と一緒にから、お姉さんと遊ぼう

」

お前が、音符をつけても可愛くねえんだよ……なんて書いてやりたいが、そんなことを言つたら面倒になるのは田代見えている。

「「めんね、友達彼女も連れてくるんだ」

「じゃあ、Wデータでいいじゃない?」

「しつこいなあ。

俺が「しつこいよ」と口に出しておいたとき、隣から聞きなれた声が俺の耳を捉えた。

「…邪魔?」

「りゅ、龍之介」

いつ来たか分からぬが、俺の隣でちょこんと立っている龍之介を見てみると、センス抜群の服を着ている。

そういえば、私服の龍之介を見るのは、これが一回目だ。

だけど、そのときは眼鏡をかけて、少し髪の毛がボサボサしていた。今はといふと、眼鏡をはずして、髪の毛をビシッと決めてきている。そんな龍之介を見るのは、これが初めてだ。

一つ言つておく。この龍之介を見ると、世界で一番カッコイイの一言で全てが片付けられそうだ。

ちなみに、龍之介が俺の素の姿を見るのはこれが二回目だ。一回目は俺が隣に立っているのに、俺とこうことに全く気づかなかつた龍之介に、腹を抱えて笑つた覚えがある。

それにしても、この場にこんなカッコイイ龍之介がやつてきたら、あのケバイトが食いついてくるに決まつている。ややこしいことに

なつそ「うだ。

「あ、お兄さんのお友達？」

ほり、食こつこてきた。

「一人ともお姉さんと遊ぼうつよー もつ一人、ものすゝじへ可愛い女の子を誘つてあげるからそー」

その女が、目をピカピカ光らせながら友達を呼ぶのであらう、携帯を手に取つたときだ。俺の近くから、罵倒がとんだ。

「女、うざこ。立ち去れ」

せつこつたのは俺じゃない。

「な、何よーー！」

「ひ・や・こつて言つているんだ。お前は日本語もわからないのか
? S h a t t H s p e a k i n E n g l i s h ?」

「う、ちょっとカッコイイからつて調子に乗つてるんじゃなこわよ
ー」

そつこいながら、携帯を片手に女はどこかへ立ち去つてしまつた。

「つゆ、龍介?

「…何?」

そう、啖呵を切つたのは龍之介だった。

「いあ、何も…」

俺は、何故か何も龍之介に聞けなかつた。

とにかく、あんな龍之介を見るのは初めてだつたし、龍之介が単語“”とこに区切らなくとも、喋ることができることにも驚いた。

驚く場所が、少し違う気がするけど、気にしないでほしい。

そして、あの罵倒を浴びせた龍之介に何を話していいのか分からな
いまま数分間、沈黙が俺達の間に流れた。

「え、今日は何かあるのか？」

俺はこの嫌な沈黙に負け、龍之介に質問をしてしまつた。

まあ、この質問は妥当だと思ひ。トドの銅像の前に俺達は揃つたと
こつのに、龍之介は動こつとはしないからだ。

「…ひとつ、言ひ

「…なに?」

「「めん」

…こつたといどうしたものか。あの龍之介が、俺に対して謝るなんて。
もしかすると、今日は何か変なものが空から降つてくるかもしれない。

い。

そう思つて、俺が上を向いたときだつた。

唐突に龍之介は「來た」と呴いた。

「な、何が？」

俺がそう聞くと、龍之介は無言で手を垂直に上げ、ある人物を指差した。

「やつほ、龍之介！ 約束のイケメン君は連れてきたのか？」

そう言つてきたのは、笑顔がとっても似合つ、いまどきのお兄さん。チラツと見ただけで判断すると、俺達よりかは年上のようだ。

「…」

今度は俺を指差す龍之介。

その笑顔が似合つお兄さんは俺のどこまで来て、手を前へと出してきた。俺はその手を取り、握手をする。

「俺は龍之介の先輩で、大山 謙平おおやま けんぺいって言つや。よろしくな

「紺野 大将です。よろしくおねがいします」

俺は失礼がないように、丁寧に頭を下げた。

「そんな堅苦しくせんでもええで！ もつと楽に行こうや」

「あ、はい」

… 関西弁だ。

龍之介の先輩つて言つていたけど、龍之介はいつたいじに住んでいたのだろう。

恭平さんは関西弁使つてゐるから、関西にいたのか？

…とにかく、謎だ。

去年、ずっと一緒に居たところに、本当は龍之介のこと全く知らないかもしけない。これは、友達として悲しいことだな。

「えじや、いくでー」

そう言つて、龍之介の先輩… 恭平さんは先頭をきつと歩き出した。

#03 動かしたことのなかつた悪知恵

俺達三人が向かつた先は、駅から少し歩いたところにあるカラオケだつた。

…どうして、カラオケなんだ？

この三人でカラオケに行って、何が面白い？

龍之介は大人しくて、カラオケとかそういうのは似合わない。かといつ俺も、カラオケなどの無理やり盛り上がる部類は苦手なのだ。

この三人で唯一盛り上がりそうなのは、恭平さんだけだろう。

…まさか、あれじやないよな？

男三人…人数的には十分可能性はあります。

昔、先輩にそそのかされて、それに行ったものの、精神的、肉体的に疲れた記憶がある。

中学生で、そういうことをするのもどうかと思うが。

「大将は、龍之介と同じ高校なん？」

カラオケの部屋に入るなり、恭平さんが質問をしてきた。

「え、あ、はい。龍之介にはいつも勉強とか色々お世話になつていまして」

「そんな敬語使わんでもええで？ 僕、困るやんか」

そういうながら、軽く微笑む恭平さん。

不覚にも、女なら恋に落ちるのではないか？ と思ってしまった。

…俺は決してホモじゃないぞ？

そんな他愛もない会話をしていると、俺達のいる部屋のドアが開くと、そこには女が一人入ってきた。

「俺の嫌な予感的中か…」

小さな声でボソッと呟くと、龍之介は俺の顔を見て小さくめんと呟いた。

いや、龍之介に謝られても困るのだが。正直、龍之介にこれは頼られたってことだよな？ それは友達として嬉しいことだ。そう、考えることにじよづ。

「恭平君やつほおー、合コンなんて久しぶりだから緊張するよ」

「一二一！」しながら、最初に入ってきた女がそう言つた。

その後ろに立っていている女は、その一二一笑つてゐる女の顔を見ながら、「うそだあ！ さつきまで寝ていたじゃない」と笑いながら言つてゐる。

「だ、黙つててよー！」

「果歩ちゃんは、毎回いつもなんやからあ」

と、恭平さんも笑つて言つていふ。

「うわら、一番に入ってきた女は果歩と書ひらしき。恭平さんとは知り合いのようだ。

俺と龍之介は、そんなハイテンションな三人についていけず、ただ椅子に座つて苦笑するしかなかつた。

その間に、果歩と、もう一人の女は隣同士で席に座る。

「あれ？ 一人なん？ もう一人はどしたんや？」

恭平さんは不思議そうにしながら、隣に座つた果歩に聞いていた。

「えつと、トイレ行つてるんだつてさ。人数がいなかつたから、無理矢理連れてきたの。初心だから、あまりいじめないであげてね~」

「いじめへんよお！ 俺は優しいからなあ」

「女の子だけにはね~」

果歩は笑いながら恭平さんと会話をしている。そんな姿を、俺と龍之介は先に頼んだジューースを飲みながら見ていた。

やつしたら、突然果歩がドアのほうを向いた。

「ん？ どうしたんや？」

「いや、未来トイレ長いなあつて思つて」

…ん？ 未来？

「やうだねえ。未来、もしかしたら、緊張してるんじゃない？」

…未来？ みく？ どつかで聞いた名前だな…。

噂をすれば影がさすとよく言つが、このときは、ああこのひとは本物だなって思った。

その会話の直後に、ドアが開いたんだから。

「「じめん、「じめんー、トイレに行列ができちゃ…」

…うん。確かに「じめんかで聞いたと思つたわけだ。

ドアから入ってきた女の言葉が途中で途切れる。それは、俺と龍之介を見たからだろう。

俺と龍之介もその女性を見て、何も発することができなかつた。

そりゃあ、言葉にもつまるわ。

「…小泉龍之介君だよね？」

だつて、ここにいるのは、俺達の担任なんだもの。

「せ…先生？」

俺よりも先に口を開いたのは龍之介だった。後に、このことを感謝しなくてはいけないなんて、今は知る由もない。

「ど、どひして、龍之介君がここにいるの！？」

未来先生の、少し大きめの声がカラオケボックス内に響いた。

「…呼ばれた」

そのあと、龍之介は口を開けようとしない。

「知り合いなの？」

恭平さんの隣に座っている、果歩が驚いた表情をしている未来に質問をする。

未来先生は「ええ…教え子よ」と、果歩の顔を見ずに返事をした。

未来の返事に、未来先生のお友達一人がケラケラと笑い始める。

その笑い声を無視するかのように、未来は机をはさんで前に立った。

「り、龍之介君、高校生が合コンなんかしちゃいけません！」

未来先生は、龍之介の机をバンッつと叩いた。その音は、先生の友達と思われる一人の笑い声を抑えるのには、十分なほどの中だ。

「す、すみません…」

龍之介は申し訳なさそうに、下を向いている。

「未来ちゃんつてやうたつけ？ええやないか。細かいこと気にしてると可愛い未来ちゃんの顔にしわが出来ちゃうで？」

「貴方も無責任な」とを言わないでください。あなたは見る限り二十歳を超えているでしょう？そんな人が、高校一年生にこんな事を…」

恭平さんの、ここを和ませるための言葉だつたのだろう。しかし、それが裏田と出てしまつたようだ。余計に、未来を怒らしたらしい。もはや最後まで言葉を言い切れていない。

「やあ、俺は21歳やし…」

拗ねたように恭平さんが言つと、未来はギラッと恭平を睨んだ。

それがおかしくて、俺は少し笑い声を漏らしてしまつた。すると、先生は俺のほうを向いてきた。

「貴方も貴方です！高校生をこんなところに連れてくるなんて非常識ですよ！」

「す、すみません…」

と、答えた。

ついで、ちょっと待て。今の今まで、未来先生の気迫に押されて全く気づかなかつたが、未来先生は、俺が先生の生徒である紺野 大将つて事に気づいていないのか？

さつきから、俺を名前で呼ぶ様子もないし、さつきの会話からすると、俺のことを高校生とする想つていらないらしい。

中学校のときから、20歳だと思われていた俺だから不思議ではないが、先生とは一ヶ月半ほど、俺の顔をどこかで見ていたはずだ。ただ影が薄くて、俺のことを知らないだけなのか、俺を知っているけど、気づかないだけなのか。

「まあ、何はともあれ、未来ちゃんはもう生徒と合コンしてもうたんや。もひ蹄めて、今日は一緒に楽しもうやー」

太陽様がいるのではないかと思つぐらじ、まぶしい笑顔を恭平は未来先生に向けた。

未来先生も諦めたのか、ゆっくりと椅子に腰を下ろす。

…ちよつと、鎌を掛けてみるか

「未来さん…って呼んどもいい感じじょうか?」

俺は不自然の無口よつこ、たゞ微笑みかけた。

「…はー」

未来先生は、俺のことを黙を見るような目で見ているが。

「龍之介は、学校ではどのよつな子なのでしょうか?」

多分、この会話を聞いている龍之介も、恭平さんにも、俺の意図は分かつていなーだろー。

「え？　だい…　つて…！」

恭平さんが、不思議に思ったのか、俺の名前を呼ぼうとしたときだつた。空氣の読める龍之介様が、恭平さんの足をぐつと踏んで止めてくれた。本当に感謝。

「龍之介君ですか？　やうですね、とても静かで、授業も真面目に聞いてくれますし、仲のいい友達といつも楽しそうに話していますね」

…楽しそうに？

細かいことこツツコツはこれないでおい」。とりあえず、龍之介が学校でいつも一緒に居るのは俺だ。と、言つことは俺のことは、ちゃんと先生の頭の中で認識しているつて事になる。

つまり先生は、俺が紺野 大将つて事に気付いていない。

…「」で、俺の今までの人生で、全くと言つていいほど働かしたことのなかつた悪知恵が働いた。

「龍之介が楽しそうに？」　それは一度でいいから見てみたいですね」

俺は、今までにないぐらいのスマイルを未来先生に放つた。

#04 歌いましょう

俺には少し自信があることがあった。

あまり、これを自慢みたいな形にはしたくないのだが、モデル級並み容姿だ。

素の姿で街に出ると、1人や2人、多い日には10人ほどに逆ナンをされた日もあった。

それほど、俺の容姿は女ウケがいいらしい。

しかも、今日はいつもほしれない髪のセットもしてきた。

いつも以上に、カッコイイと自分では思っている。

：その容姿を生かして、俺はある女を落としてしまおうと考えたのだ。

その女とは、担任の先生でもあり、俺の最も苦手な現代文のテストを作っている張本人。

俺の作戦はこうだ。

ばれないように先生の彼氏、または一番仲のいい男友達に成り上がる。そして、テスト作成中にそつと現代文のテストを覗くのだ。

ばれた時の恐怖はあるが、俺が日本に残るにはこの手しかない。一番簡単で、一番確実な方法だ。

「よつしゃー、まずは田口紹介から始めよか」

そう言つたのは、今回の同会役である、恭平さんだった。

「まあ、最初は俺からいこか。大山 恭平って言います。よろしくなあー！」

セツヒツして、両手をあげて「じつも、じつも」としている。

周りの女子と、俺は盛り上がつて拍手をした。龍之介と未来先生はいまいち盛り上がり上がれないようだ。

「じゃあ、次は龍之介なー！」

「…龍之介。高校生」

それだけを言つて、龍之介は田の前に置いてあるジュースを飲んだ。

俺は恭平さんに紹介される前に、自分の名前を言つ。

「俺の名前は、堂本 悠と言います。龍之介とはちょっととした知り合いで、今日呼ばれたんですけど、こんな美人さんと遊べて、本当に嬉しいです。今日はよろしくおねがいします」

俺はそういうと、ちよつとした意味をこめて、微笑みながら未来先生の顔をチラッと見た。

な、何よ。みたいな顔をして、こっちを見返してきただが、俺はすぐに目をそらした。

「ひたらいや、よろしくーー！」

そう叫んだのは、果歩という女の人だ。貴方には言つてないんだけどね。

恭平さんは、不思議そうな顔をしていたが、話をすつと進めてくれた。

「じゃあ次は、そつちの自己紹介をお願いね」

「私から行きます！ 柴田 犀歩^{かほ}23歳！ 今は彼氏募集してます！」

「ヒーヒヒヒ可愛らしい笑顔を、俺と龍之介に向けてくる。

「もう、果歩ったら…。私は立花^{たちばな} 美智子^{みちこ}よろしくおねがいします」

そういう、色々ありすぎて気付かなかつたが、よく見てみると、この一人結構美人と言われる部類に入るのかもしれない。

「未来。次は未来の出番だよー。」

果歩がそういうと、未来先生はため息をついて「諸戸 未来です」

とだけ言った。

「もう未来つたらあ。せつかく未来の彼氏を探しに来たのに、そんな調子じや黙田じやない！」

果歩がそういふと、未来先生は「頼んだ覚えはないけど……」と小声で答えた。

「わ、私達、ちょっとトイイレいつてくるね……」

入ってきて数分。早くも女の人たちはお手洗い相談タイムに行ってしまった。

果歩と美智子が立つて、一人で未来の腕を片手ずつ掴んだ。

「い、いたつ！ 私はさつきトイイレ行つたわよー！」

「いいのー！ 未来も行くのー！」

果歩と美智子の力に負けたのか、未来はズルズルと引きずられて行つた。

ドアの閉まる音がすると同時に、恭平さんは俺のほうへと体を向ける。

「え？ あの先生つて、大将君の高校の先生じやないんか？ なんで、あの先生は龍之介だけ怒つたんや？ どうして大将君は偽名なんか使つたん？ 高校生つてことがバレるのを恐れたからなんか？」

「いや、あの……」

俺が言葉につまつていいるのを気にせず、恭平さんは喋り続ける。

「なんなん？ 堂本 悠つて！ 誰？ ビリしてそんな嘘ついたんや！？」

俺が何も返せないと知つてか、隣に座つている龍之介が助け舟を出してくれた。

「恭平、うわわー」

龍之介の声は、静かながらも怒りがこもつていた。それは、俺が偽名を使ったからではないだろう。…たぶん。

「大将、意味があつて嘘ついた」

…さすがは天才といつべきか。俺のことは、何でも御見通しつてか？

恭平さんは、龍之介の言葉に圧倒されて、俺に質問を投げかけるのをやめた。

「恭平さん、すみません。理由は色々あるのですが…」

俺が理由を話そつとし始めたら、ドアの向い側に未来先生達の姿が見えた。

くそ…。説明したいのに。

「と、とつあえず… 今は俺のことと悠と呼んでください… お願ひします…」

俺が少し早口で喋ると、恭平さんは仕方ないなあとつぶやきながら、髪の毛をボリボリと搔いた。

「たつだいまあー！」

元気よくこの部屋に入ってきたのは、やはり果歩だった。あんなテンションショックで疲れないのだろ？

「おかえりー もう、待ちくたびれたでえー！」

恭平さんがそうこうと、隣にいる美智子も一緒に謝っていた。

未来はとこうと、さつきよりかはマシな顔になつたが、ビニカふてくされている様子がある。

「そんじゃー せつかくカラオケ来たんやし、歌おうやーーー！」

恭平さんはそういうと、カラオケボックスに置いてあるリモコンを慣れた手つきで操作し、あつという間に曲を入れてしまった。

それからどれぐらい立つただろうか、俺も数曲いれでは歌い、盛り上がる振りをした。

そして、また俺は歌う。歌っている曲数の順番で言つと、恭平さんと果歩さんが同じぐらいで、その次に美智子さん、その次に俺といつたところだらうか。

未来先生と龍之介は歌おつともしない。

「未来さん」

一曲歌い終わった俺は、さつきまで座っていた場所とは違い、未来の隣へと腰へとおろした。

「なんでしょうか?」

「カラオケはよく来られるんですか?」

俺は不自然の無いように、微笑みかける。

「…あまり行かないですね。先生といつ職柄、あまり関わることがないので」

「そうなんですかあ。未来さんの声は綺麗なのに、もつたいないですよ」

俺がそういうと、そ、そんなことない! と言いたそうな顔を見せた未来先生。その仕草が少し可愛く思えた。

まあ、俺だって男だ。可愛いと思つてしまふのは、仕方ないことだらう。

「今日、一度も歌つてないのでは? もし、よかつたら一緒に歌いましょうよ」

そして俺は、いつの間にか会得していた、女落としの笑顔を見せた。この俺の誘いを断る人はいない。

「…別に」

「じゃあ、歌いましょうー。」

俺は一瞬「コトとして、適当に曲を選んだ。

「これでいい?」

俺がそう聞くと、未来先生は小さくうなづく。

この肯定の合図は、一緒に歌う気があると受け取つていいものだろ
う。

俺はリモコンを手にして、曲を入れた。

未来先生のほうをチラシと見ると、龍之介に田が行っている。それ
もやうだらう。なんたつて教え子なんだから。

それについて、教え子と合図をよく許したもんだ。どうせ、あの
黒歩と美智子が、俺と龍之介と恭平さんの格好良さのあまり、なん
とか未来先生を言いくるめたつて所だらう。

それはそれで、俺にチャンスが回ってきたのだから、黒歩と美智子
には感謝をしなくてはいけない。

俺が曲を入力してから、数曲終わったとき、俺の入れた音楽が流れ
始めた。

「まじ、未来さんマイク持つて」

俺は、さつき歌っていた恭平さんからマイクを借りて、未来先生に

渡す。

未来先生は乗り気ではないが、なんとか歌つてくれそうな雰囲気だ。俺が入れた曲とは、ちょっと昔に流行ったバラード系の曲。俺はちよつとだけ未来先生との距離を詰めた。

未来先生は一瞬俺を見て、すぐさま歌詞が流れる画面へと目を向ける。

そして俺達は歌い始めた。

「おー！ 未来ちゃんの歌声最高やん！」

歌い終わると、拍手が沸き起る。

俺もビックリして、曲の途中で少し歌つのをやめてしまった。

だって、あまりにも未来先生の歌声がすばらしかったから。

多分、そこらの歌手じゃ、足元にも及ばないだろ。それほどの実力があった。

「未来さん…すごいじゃないですか！ とても上手かつたですよー。」

隣で座っている未来先生に言葉をかけると、少し困った顔をして未来先生は声を出した。

「お、お由比はやめてください」

「お由比じやなこですか。本当に上手だなって思つて……」

ついだ。

もともと、瓶の質はここの、とは思つてこたが、いまでもあることは思つてこなかつた。

「わんな……」

先生は、顔を真つ赤にして顔を下へと向かた。その仕草を俺は可憐いと感つてしまひ。

俺が「可愛いですよ」と叫び出した時、部屋のโทรศponが鳴つた。

それは、いの樂しげ時間を終わらせる図だつた。

#05 一緒に帰るしかなくなつちやいましたね

「んじゃ、今から飲みにでも行きますか?」

カラオケも終わり、店の前で集まる形になると、果歩が右手でちょいと飲む振りをして言った。

2時間という時間はあまりにも早すぎた。もつ一曲ぐらい、未来先生の歌声を聞きたかったものだ。

「行こかあ！」

果歩の発言につられて、恭平さんは果歩の真似をしながら呟ついた。

「そ、そんなの駄目よ……」

と、未来先生。

当たり前だろう。龍之介という未成年でもあり、学校の生徒である人物を連れて、人目につく場所にいけるわけがない。

特に飲み屋という場所なんかには。

えー！ と言つて、果歩が残念そうな顔をしているが、どうやら未来先生は譲る気が一切ないいらしい。そんなオーラをさつきからブンブン匂わしている。

「…大丈夫」

そう呟いたのは、本田一番口を開いていないと思われる龍之介だった。

「りゅ、龍之介君！」

「もう少し、遊びたい

龍之介は田線を未来先生へと向けた。俺もあの視線を幾度となく食らつたことがあるが、拒否できるような気持ちにはなれない。

「け、けど…」

あの視線を食らいながらも反発しようとする未来先生を、俺は心のそこから褒めてあげたい。

「未来さん、いいじゃないですか。龍之介には飲ませませんから」
俺も本当は未成年だけどね。

「でも…」

「先生」

龍之介の必殺視線炸裂！！

「…はあ、しょうがないわね」

先生は頭をポリッと一回搔いて、ため息をついた。

「よし！ 決まり！」

果歩がそつ言つと、みんなは歩き出した。

「龍之介君。未来は先生としてどうよ？」

果歩が龍之介の隣に座つて、龍之介に話しかけている。

「…いい先生」

今、このテーブルに届いたジュースをストローで吸いながら、龍之介はそう答えた。

「そつか！ よかつたね、未来！」

「ちょ、何聞いているの…！」

真っ赤な顔をして照れている未来先生を見ると、少しどキッとした。

俺達は、あのカラオケの後、話し合いの通り居酒屋に来ている。

お店の人も俺を高校生とは見ていないくて、普通にお酒を出してくれている。先生もまだ、俺が紺野大将っていう事には気付いてないようだ。

「そういえば、悠さんは今何歳なんですか？」

「ど、年ですか！？」

隣に座っていた美智子がいきなり話してくれる。しかも、思いもしなかつた年の話だ。

「実際、俺が今何歳ぐらいに見えているかなんて、全くわからない。下手に答えると、未来先生に怪しまれるのではないか。どうが……」
ここは一つ。

「何歳ぐらいに見えます？」

俺は美智子さんのほうに少し体を向けて、笑みを浮かべて言つてみた。

「え、えっと……」

そつ言つたきり、美智子は顔を赤くして下を向いてしまつた。

数秒たつた後、彼女はボソッと口を開く。

「二じゅ――」

「二十歳に見えますか？」

「は、はい」

それぐらいに見えるのだろう。男が女人の年齢を答えるとき、見た目より少し年を低く言うとかの思考も、今の美智子にはなさそうだし。これは参考になつた。

「正解ですよ」

俺は「ハハ」と笑って答えると、やつたーと喜んだ。

…つていうか、俺は美智子とやらと喋っている暇はないんだ。少しでも未来先生に好印象を与えなくてはいけないのだから。

俺は左に座っている未来先生に話しかけた。

「未来さん。ちゃんと飲んでいますか？」

俺が聞くと、コクツと小さく頷いた。極力話さないよっこしているのを見て取れる。学校では結構、活発的な女の人のイメージがあるの。」

「未来さんは、科目担当は何を受け持っているんですか？」

俺が質問すると、俺の顔を一瞬チラッと見て、現代文と答えた。

「現代文って、色々覚えなくちゃいけないから、大変な科目、いやないですか？ 僕は高校生のとき苦手な科目でしたね…」

俺がそうこうと、先生は田の色を変えて話し始めた。

「現代文っていうのは、とても深みのあると思うんですよ。本を読んで、日本語を学んで、それを言葉にして伝える。意思の伝達には必要となるものなのです。学んでおいて損はない。学校の授業でも、一番と言つていいほど、将来に役立つものなのですよ」

…先生の力説。この話は、この前学校でもしたのだ。こうこう話も含めて、分かりやすい授業だから、未来先生の授業は生徒にはとても人気なのだ。

かという俺は、現代文が大の苦手。別に嫌いじゃないし、先生の授業が分かりにくいとも思わない。ただ、苦手なだけなのだ。

それからしばら未来先生と会話をした。最初のころに比べては、心を開いてくれたような気がする。学校のときほどの先生ではないが。

「ねえねえ、悠さん」

右隣に座っている美智子に服の袖をちょんちょんと引っ張られた。

「な、何ですか？」

「悠さんは～、彼女いないんですかあ～？」

二へへと笑いながら俺に質問をしてくる。どうやら、美智子は酔っているようだ。ここに来てから、早2時間ほど立っている。どれぐらい飲んだのだろう？ ちなみに俺は、ジョッキを数杯飲んだだけだ。

「い、いないですよ。モテませんから。それより、美智子さん酔つているようんですけど、大丈夫ですか？」

「でんでんたいじょーぶ！ 酔つてないもん！」

…いや、普通に酔つているから。

「 わよ、恭平さん…」

俺は助けを求めるために、美智子の前に座っている恭平さんに声をかけた。

「 なんやーーー? 」

……じつやいら、彼も酔っているらしい。黒歩と無駄にベタベタしている。黒歩はとこつとく苦笑いを浮かべているが。

「 じ、じつまじょひへ。」

俺は前の席に座っている、まだほり酔い程度である黒歩に話しかけた。

「 まあ、やひやひお開きつて言ひ半もあるナビ」

「 セウですね… 明日学校だし」

俺がボソッと答えると、黒歩が俺の言葉に反応した。

「 え? 悠鶴ひひ学校に通つてこの? 」

……あ。

「 い、いやー 俺じやなくて、龍之介や未来さんですよ。特に未来さんは人に教える立場なんですか? 」

ね! ? と俺は言ひながら、未来先生のほうへと顔をむけた。

いきなり話を振られてビックリしている。

「え、ええ」

「じゃあ、今日は解散といつ」とで

俺のその言葉に肯定の意を表す3人。3人といつのは、恭平さんと美智子さんを除いた3人だ。

「未来先生は、家はどのあたりなんですか?」

俺の質問に、未来先生は少し間をおいてから答えた。

「西区よ」

西区…。俺の家と少し近いな。

「じゃあ、僕が送つていきますよ。僕は北区なので」

「わ、私は一人で大丈夫ですよー」

そう答える未来先生に言葉を俺は乗せる。

「女人のが一人じゃ危ないですよ

俺が未来先生と話していると、美智子が話しに入ってきた。

「わたしもにしづなのーー 未来も悠さんもいつしょに帰るおよ

俺は少し頭を回転させた後、はい、と答えた。

「これで一緒に帰るしかなくなっちゃいましたね」

俺は苦笑いしながら、未来先生に顔を向けた。

#05 一緒に帰るしかなくなりましたね（後書き）

ネット小説ランキング様に参加させていただきました。
もし、よろしければ投票してあげてください。（アシのみ）
よつ多くの人に見てもらいたいので、どうかよろしくおねがいしま
す。
他にお勧めのランキングサイト様があれば、教えていただけたら嬉
しいなつ…なんて（、、；A

#06 友人と思つていたのですけど

「ゆーうせーんは、かのじょとかいないんですかああ？」

帰るタクシーの中、俺は隣に座る美智子に絡まっていた。

「い、いませんよ！ 彼女とか、作った経験ないですしづ！」

「うわはよくないですよお！ ゆうさんほどかっこよかつたら、せつつたあああいもてもてなんだからああ…」

駄目だ。この人はもう何を言つているか分からぬ。

美智子を挟んで向こう側に座つている未来先生さえも苦笑している。

「こつもこんな感じなんですか？」

俺は苦笑いをしながら未来先生に質問する。

「ええ、この子お酒に弱いのにドンドン飲むんですよ

と笑いながら言つてくれた。しかも、今日初めて俺の顔を見て話してくれた。

「あ、そなんですかあ…」

面食らつてしまつた。ゲーム対象にこんな事を言つるのは駄目なのかもしれない。だけど、俺の心は不覚にも思つてしまつた。

その笑顔、とてもなく可愛こと。

そのせいか、そうですか、の続きを言葉が見つからない。

「え、えっと?」

俺がずっと未来先生のほうを見ながら、口をパクパクしていたからなのだろうか。先生は少し笑みを浮かべながら俺に言葉を投げかけてきた。

「あ、い、いや、なんでもないですよ。そ、それにしても、今日は楽しかったですね」

俺は未来先生から目を逸らす。

「…はい」

この話題には触れてはいけなかつたのだろうか。先生の返事に少し間があつた。

「あ、その…未来さんは龍介と一緒にだつたから、楽しくなかつたですね…」

俺が落ち込むように言つと、先生は慌てて訂正の言葉をかけた。

「えー? あ、そういうじやなくて…た、楽しかつたですよ?」

焦つて言つている彼女の言葉を、今は誰が信じるだろうか。俺に不快な思いをさせないよつこと、必死になつていてる未来先生が面白く見えた。

「くく…」

思わず笑みがこぼれてしまつた。

「わ、笑わなくとも…」

「す、すみません…。未来ちゃんって最初見たときは、ちょっと怖い人かなつて思つたんですよ」

「人当たりがよくないつてよく言われます…」

「けど、しつかりした人だなつて思いました」

俺はニコッと笑つて、言葉を投げかけた。

「…く？」

未来先生は、思つても見なかつた言葉に、どう反応していいのか迷つてゐるようだ。

「普通なら、生徒が居てもその場の雰囲気で流されてしまつと思つのですよ。だけど、未来さんは自分の言葉を守るうと、お友達とも喧嘩していた。…そんなところが、素晴らしい人だなつて思つて」

うわ、少し恥ずかしいことを言つてしまつた…。

俺は頭をぽりぽりと搔く仕草をする。

「あ、ありがとうございます…」

暗くて未来先生の顔ははっきり見えないが、多分赤くしているのだ
ら、縮こまつてトを向いてしまっている。

そんな話をしているうちに、美智子の家の前までやつてきた。

「未来さんの家は、ここから近いんですね？」

タクシーを降りる少し前、俺は未来先生に質問をした。

「ええ、そこからなら歩いて数十分です」

「じゃあ、美智子さんの家からは歩いて帰りますか。酔い覚ましに
でも」

俺は笑いながらそう言つと、未来先生は少し悩んだ後、そうですね。
と肯定の返事をくれた。

ここまでの金額を俺は払つた。未来先生は遠慮をしてお金を出そ
としていたが、そこは俺がなんとか言いぐるめて、男らしさをアピ
ール。

「ほり、美智子… 家着いたわよ」

「ん~…」

俺達が相手にしなかつたせいなのか、美智子は熟睡していた。

「起きる気配、全くないですね…」

さて、どうしようか。せっぱつじりは、男として運んであげるべきなのだ。

「俺が運びますよ

そつぱつて、美智子に背中を向け、腕を取り、そして両肩へ。その行動をすばやく行った。

「す、すみません…」

そつぱつ葉を漏らしたのは美智子ではない。未来先生だ。

「いえいえ、どうして謝るんですか

「だつて、私の友達だし…」

俺達はエレベータの前までやってきた。

美智子の家は、普通のマンション。未来先生に聞くといふによると、4階りしこ。

エレベータが俺達の前までやってきて、ドアが開く。俺達は足を進め乗り込んだ。

「よこしょ

俺はおっさんくさい声をあげて、美智子を背負いなおす。さつきから、女人特有のものがあたっているが、俺は心の中で気にしない、気にしないとつぶやいていた。

ブーンと音を鳴らし、Hレベータは上昇していく。その途中、俺と未来先生は喋ることはなかった。

Hレベータが甲高い音を鳴らし、その場に停止した。ドアが開くと、未来先生がさきに歩き出す。

俺はそれについていく感じ。

少し歩くと未来先生は、とあるドアの前でピタッと止まり、美智子の名前を呼んだ。

「ん~…」

起きているのか、起きていないのかは分からないが、美智子は小さな声で返事をした。

「ま~り、 美智子。 鍵出して 鍵

美智子はその言葉には無反応。どうやら起きていないうつだ。紛らわしい人だな、全く。

未来先生はため息をつき、美智子の鞄を漁つて部屋の鍵を探し出した。

先生はその鍵を使って扉を開き、俺を招き入れた。

俺は靴を脱いで、部屋に上がりこむと、美智子をベッドへと寝かしに向かつた。

「わ~い~い~ん~」

寝ていると思っていた彼女に俺はぐっと引っ張られ、美智子に覆いかぶさるような形になつてベッドへと倒れた。

「じゃ、何やつているんですか！」

俺は少し声を張り上げて、その場から逃げ出す。しかし、俺が声を張り上げた言葉は、「うわあ！」「だつたのだ。

つまり、何やつているといったのは俺ではなくて、俺の後ろに立つていて……未来先生だった。

「い、いや！ 違います！ ただ、俺は引っ張られて、バランスを崩してですね……」

あの状況を、瞬間に見た人なら、誰もが俺が美智子を襲っているように見えるだろう。

俺は振り返って、未来先生のほうを向く。

「……」

「……」

「…ふつ」

最初に笑ったのは未来先生だった。

「本当ですかー！？」

「分かつていますつて。悠さんがそんな人じゃないって事ぐらい、今日の会話で分かりましたから」

今日、初めて俺の名前を呼んだ未来先生。何故だか…俺の心はどこかで喜んでいた。

恋とか、愛とか、そういうのではなく、彼女との距離をゲームとして縮められたことを。

俺は一足先に部屋の外を出て、未来先生を待った。

数分後、未来先生は部屋の鍵を持つて外に出てきた。そして、部屋の鍵をガチャッと閉め、ポストへと鍵を放り込む。

「そんな物騒なことして大丈夫ですか？」

ポストに入っている鍵に気付かず、部屋を出たらどうするつもりなのだろうか。

「大丈夫、部屋の上にメモ書きを残してきたから」

俺の心の言葉を察知したかのように、未来先生は笑つて言った。

それから数分間、今日のことを少し話して、未来先生の家に向かう。

「そついえば、俺が美智子さんを運ぶときに、先生は俺に謝りましたよね。私の友達だから…って」

俺は何の前振りもなく、その話を振った。

「は、はあ

「俺は……もう未来さん達のことを友人と思っていたのですけどね」

俺は悲しそうな顔を無意識に作ってそう言っていた。

そう……無意識に。

「そうですね

未来先生は笑つてそう言つてくれた。

#07 イケメンが台無しやで

俺は今まで一人で生きてきた。

友達という友達も出来ず、地位と名誉のことだけを考えると言わんばかりの、勉強の量を毎日こなす。

中学校のころまでは、トップの成績をとっていた。

周りの男子からは、勉強のサイボーグなどといわれてきた。

女からはカッコイイといわれ、毎日知らない女からは話かけられていたものだ。

うぞつたい。

近寄つてくるな。

話しかけるな。

関わるんじゃない！！

うせえんだよ！――

ガバッ！！

俺は、ベッドから飛び起きた。

「い、嫌な夢を見た」

昔は一人で生きてきた俺に、今は龍之介といつ親友が出来た。

龍之介を一番に考えて行動をしたい。ホモとかそういうのではないぞ。ただ、素晴らしい友人に出会えたなって心のそこから思っているのだ。

そして、昨日。

俺は恭平さんに会った。

そして、あまり好きじゃなかつた合コンに無理やり参加させられた。

けど、昨日の楽しかつた温もり、人間関係を味わってしまった。

「…何考えてんだよ、俺つて」

俺はベッドから降りて、制服へと手を伸ばす。

「お坊ちゃん」

トントンといつ音と共に、ドアの向こうから聞こえてきたのは、キヨ爺の声だった。

「開いているぞ」

俺がそういうと、ドアの開く音が聞こえる。

「今日は、早いお皿覚めですね」

キヨ爺が俺のほうに近づいてきて、そう言つた。

「嫌な夢でも見たから…かな」

俺は苦笑いを作りながら、制服を着替え終えた。

キヨ爺と少し話をして、階段を下りていく。

いつものように、髪の毛をボサボサにセッティングして、眼鏡をかける。

鏡を見ると、昨日の俺は消え去っていた。

今の俺は、紺野 大将だ。

「よしぃー。」

氣合を入れて、俺は振り返る。リビングへと足を進めた。

ドアを開けて、鞄を取りに行く。そのとき、一瞬だけ親父と目が合つた。

何か言われる。直感的に、そう感じた。

「大将」

ほら、來た。

「お前、昨日の夜は何処に行つていたんだ?」

「友達と遊び」…

「遊んでいる暇があるとは、よっぽど余裕なんだな」

言い終わった後に、鼻で笑う親父。その姿を、俺の母親は見て見ぬ振りをしている。

何もいわず、俺はリビングを出て、玄関へと向かった。

外の世界へと旅立つ。ギュッと少し大きいドアを押し開けて、学校へと向かった。

「龍之介え」

俺は今、机の上に上半身だけぐつたりと寝かしていた。

「何?」

龍之介は後ろを向きながらも、本をずっと読んでいる。

「恭平さんに悪いことしたかな?」

昨日のことと、結局俺は恭平さんに話していない。何故俺が『堂本悠』と名乗ったのか。

「別に」

「やうかなあ…。また機会あつたひ、謝つておこてくれない?」

少しだけ顔を上げ、俺は龍之介の顔を見た。

「今日」

「ん?」

本をバンと閉じ、俺の顔をじっと見てきた。

「な、何?」

俺は小さく笑いつぶに、質問をする。

「今日、会つ」

…それは、恭平さんと会つてこつじなのか?

俺が悩んでいると、龍之介は再び口を開いた。

「暇?」

一応、ヒマの『マ』の字の部分の音が上がっていたから、質問といつことなのだね。

「昨日、サボった分を勉強しなきゃいけないんだよね」

「やう…」

いつもは無表情な龍之介の顔が少し寂しそうにするよつて見えた。

「い、いや！ やっぱり暇だ！」

龍之介はどういち？ と思つのかもしれないが、龍之介のあんな顔を見たら断るわけにはいかなかつた。

最悪なタイミングでチャイムが鳴り、龍之介は前を向いてしまつた。次の休み時間は、その話をすることがなく、時間だけがすぎ、再び授業が始まる。

そして、次の休み時間もその話は出なかつた。

質問したい気持ちを抑えて、龍之介の言葉を待つてみるが、一向に出てくる気配がない。

待ち続けて半日、結局放課後になつてしまつた。

「ついてきて

一田の終わりを示す音がなると同時に、龍之介は椅子から立ち、俺に向かつて言つた。

「ほへ？」

あまりにも予想外の言葉。俺の口から出たものは、意味不明な言葉だった。

「……」

じいいいいつと、俺の顔を見ている。

その視線に急かされるかのよつこ、俺は急ピッチで帰る仕度を済ませた。

仕度を済ませると、龍之介は無言で歩き始めた。

どこへ向かってるのか。何をするのか。そのような話は一切しない。

それ以前に、俺達は帰り始めて數十分話しさえしていない。

「着いた」

龍之介の言葉に反応し、俺は足を止める。

「…小泉？」

俺の目の前にある家の門を見ると、小泉と記入されていた。

「つゆ、龍之介の家？」

俺が質問すると、コクンと頭をさげる龍之介。

新学校だから、ボンボンかいつぱい居るとせ思っていた。俺みたいな医者の子供とかが多いと。

だけど、これはスケールが違う。

この家は…違う。

「お父さん……？」

俺は無意識で、龍之介に質問をしていた。

「政治家」

小泉つて書つ政治家をどこかで聞いた気がする。

龍之介が門の前に立つと、自動で大きな門が開いた。こんな、テレビや漫画でしか見たことがない。

無言で歩き始める龍之介の後ろを、俺は小さくなりながら歩いた。家の庭に居る執事みたいな人を呼んで、龍之介はなにか話しているようだ。

龍之介が言い終わったのか、執事は頭を少し下げ、その場から居なくなる。

「行こう」

俺がその光景に見とれていることに気付いたのか、龍之介は俺に声をかけた。

1分ほど歩いて、龍之介の家の玄関らしきものが見えてきた。
どれだけ豪華なんだよ。

ドアの横に立っている執事にドアを開けさせ、龍之介と俺は家の中

へと入っていった。

真正面にある階段を上る。

ビーナスでは靴を脱がなくていいようだ。

2階まで上がり、少し歩いたところで龍之介は立ち止まり、その辺にあるドアを開けた。

「……」

ドアの中は…

「普通……」

なんと、普通だった。

豪華なベッドや、家具があると思ったのだが、いたつて普通。俺の家とさほど変わりはない。

部屋に入ると、龍之介は適当に座つてと喫葉を俺に告げた。

その数秒後、部屋のドアがガチャッと開き、俺の見覚えのある人が入ってきた。

「龍之介様、飲み物を持ってまいりました

お盆を片手に、彼はドアを閉める。

そして、龍之介の部屋にあるテーブルにお盆を置いた。

「龍之介の友達なんか？」

さつきの敬語はどこへいったのだろうか。喋り方が関西弁に戻っていた。

そう、彼は…

「俺は大山 恭平って言つんや。龍之介の執事をやらしてもらつてる。お友達は、なんていう名前なん？ 龍之介が友達連れてくるなんて珍しいからなあ」

どうやら、俺の変装に彼は気付いていないらしい。眼鏡と、髪の毛をいじつただけで、ここまで分からなくなるのだろうか？

「…紺野 大将です」

俺がぼそっと返事をすると、恭平さんが笑い出した。

「あははは！ 龍之介の友達と同じ名前やんか！ 大将つていう名前の人と、龍之介は仲がいいんやなあ」

俺も龍之介もあきれていた。

そんなことあるかい！ 関西弁でツツコミをしたかった。

だけど、俺はあえて冷静に対処する。

「…同一人物です。昨日の紺野大将と」

俺がそうこうつと、やつと理解したのか、恭平さんは笑つのをやめた。

「…く？」

不意に俺に近づき、俺のボサボサな髪の毛をかきあげる。

「ホンマや…」

ビックリした表情を見せる恭平さん。

「ビックリや…」

「俺」ヤビツクリしましたよ。まさか、恭平さんが龍之介の執事なんて

入ってきたときは敬語だったのは多分、龍之介とタメ語を話しているところを、外から見られると彼の立場上よくないのだろう。

彼は驚いた表情を隠せないまま、口を今一度開いた。

「大将…イケメンが台無しやで…」

#08 俺、先生を騙すつもつだから

「恭平さん」

俺は、未だビックリしている恭平さんの顔をじっと見て、真面目に聞こえるように少し低めの声で彼の名前を呼んだ。

「な、なんや…？」

「昨日、俺が偽名使ったのは覚えてますか？」

俺の質問を聞いてから、少し間をあけて「覚えたる」と声を返してみた。

「実は、俺…最悪な男なんです」

俺のこの言葉で、恭平さんの驚きも収まつたのだろう。彼もまた、真剣な顔で俺と向き合ってくれた。

「なんだや？」

「俺、先生を騙すつもりだから」

俺のこの言葉では、意味が分からなかつたのだらう。待て待てといながら、俺の肩をギュッと握ってきた。

「状況を把握できない」

そう言つと、恭平さんは俺の肩を握つた手を戻し、再び座りなおす。

「俺、学年末の成績が上位9位以内に入らないと、外国に飛ばされて医者の勉強をしなきゃいけないんです。あの頑固親父は、本当にそれを実行してしまったほどで…。そのためには、俺の苦手な科目を克服しなくちゃいけないんですよ。普通の勉強じゃ、絶対に9位以内は無理なんです。近道：ゲームで例えると、裏技しかもう道は残つていません。せっかく、龍之介と友達になれたのに…外国になんか行きたくない」

「…話は分かる。やけど、今年度もまだ始まって一ヶ月半やないか。コソコソ勉強すれば、9位以内なんて無理な話やないやろ？ 大将を見る限り、頭悪そうに見えへんし、去年は29位ぐらいなんとかやうんか？」

「29位…すばり的中です。貴方はどれだけ、細かい数字を当ててくるのですか。

「…出来たら、じれなことしませんよ」

俺は苦笑いをしながら、恭平に言葉を投げ返す。

「それでも…」

恭平さんは複雑のようだ。果歩のお友達が、これから騙されようとしていること。大事なご主人様の龍之介の友達が、これから騙そうとしていること。

「すみません。昨日急に思いついたので」

俺は深々と頭を下げる。

「ちよ、頭なんか下げるなつて！ 仮にも龍之介の友達や。そんな」としたら、使用人としての立場がなくなつてしまつやんか」

優しく微笑みかけてくれる恭平に、少し甘えそうになつた。俺の周りには、そういう笑顔をくれる人は、数少ないから…。

「…分かつた」

恭平さんは俺の目をしっかりと見て、微笑んだ。

「ありがとうござります」

「黒歩ちゃんには、わへん。やけど、大将もそんなことしたら未來ちゃんが傷つくつて分かつてるやん。肝に銘じておくんやな」

「…はー」

俺がそう告げると、恭平はお盆だけを持つて、立ち上がった。

「あまりここに腰留めすると、怒られてしまうからな。俺はおいたまするわ！ ほな、また！」

恭平さんは、左手をヒラヒラと振つて、部屋から出て行つた。

「とつあえず、恭平さんの口止めは出来た…かな？」

「…大将、勉強教えてあげる」

龍之介の素直な意思。少しでも、頑張つてほしこと思つ心。そんな

気持ちを受け止めながら、俺は龍之介のほほに顔を向けた。

「…ありがとう」

そういう俺の言葉は、少し震えていた。

「もう、こんな時間が」

時計を見ると、20時を回っていた。

俺の親は俺に無関心だから、どれだけ遅くなつても何も言われないのだ。直接言つてくれるのは、キヨ爺だけ。

昨日、だつて、俺は11時過ぎまで未来先生と一緒に居た。

未来先生を家まで送つていき、キヨ爺に向かいに来てほしいと連絡をいれた。

家に着いても親父等は「おかえり」とも何も言わない。車に乗つているときに、キヨ爺から軽い説教を受けただけだ。

その説教が、俺にとってほどだけ嬉しかったことか。

「教えてくれてありがとう」と俺は言つて、龍之介の家を後にする。

龍之介は首を横に振りながら、いつでも教えるからと、言つてくれ

た。

涙がこぼれたかは分からない。俺は「さよなら」ただけ言つて、龍之介に背を向けた。

「キラ締…」

龍之介宅から帰る車の中。俺は、運転席に座つてこのキラ締に話しかけた。

「何でいじめこまじょうか?..

…」JのJとKのK締にはいえない。

こんな計画を聞かせたら、悲しませることになるかもしれない。

「…いや、何もないよ」

俺は後部座席の窓から、かけた月を眺めていた。

今後の、計画を考えながら。

土曜日

とうとうJのJが来た。

今俺は、とあるマンションの近辺にいる。

電柱に隠れながら……など、ベタな事はしていない。

そのマンションの向かいにある、カフュで監視をしながら、ゆったりとしている最中だ。

「ねえ、お兄さん…」

…前回撤回。ゆつたりとはしていない。

俺は、この女の声を無視することに決めた。

「どうしたの？ 何かあったの？ もしかして、彼女に振られたとか…？」

なんの許可もなく、俺にいきなり話しかけてきた女は、前の椅子に腰掛けた。

「…なんでしようか？」

俺は冷たい声で、そつと放った。

座らせてしまったのだから、無視をし続けることは無理だわ。

「慰めてあげようと思つて」

一口つと笑う俺の前に座つてこむ女は、どちらかと云つて可愛い部類に入ると思つ。

だけど、俺の好みじゃない。というか、女なんて大ッツ嫌いだ！！

「彼女に振られたわけでもないし、慰めてもらひよつてな事はひとつもありません」

俺がそういうと彼女は、あははと小さく声に出して笑つた。

本当にうざつたい。

どうかにいってくれ。

ねえ、遊ばない？

彼女は笑うのがひと段落終わつたのだろう。俺の顔を見てそういう
た。

「結構です」

俺は席を立つと、俺が監視していたマンションから、一人の女人の人
が出てきた。

グットタイミング！！

俺は心中ガツツポーズをし、その場から離れた。

『...ル・ル・ル』

女が何か言つてゐるが気にならない。

「携帯、忘れているよ」

…」
寧に教えてくれたようだ。

俺は数歩戻って、女の前に行き、「ありがとう」と呟いて、その場から今度こそ居なくなつた。

俺が監視していた人物は、一人で道を歩いていた。

買い物袋のような物を持っているところを見ると、スーパーにでも行くのか？

俺が監視している人物との距離は約30mといったところだろう。隠れたりはしていないが、これは立派なストーカーといえる行動ではないのだろうか。

「何やつているんだ俺は…」

少し情けなくなつて、俺は顔を空に向けた。

それから歩くこと數十分。俺は少し見覚えのある場所に来ていた。

…駅前のデパート。

土曜日ということもあって少し混雑している。

ドン！

俺は、入り口付近で成人男性とぶつかった。結構強めに。

「すみません……」

そして今一度監視人物のほうへと目を向ける……が、少し目を放した隙に、監視人物を見失ったようだ。

俺は周りをぐるぐると見渡す。

軽く走つたりして、ようやく見つかることが出来た。

焦らないでくれ……諸戸未来。

#08 俺、先生を騙すつもつだから（後書き）

感想等いただけると、非常に作者は元気が出ます。
よろしくおねがいします。

#09 心臓に悪いです！

俺がストーカー紛いな事をしながら、付けていた人物とは未来先生だ。

これは全て計画のため。

とりあえず、少しでも偶然を装つて運命とやらに結び付けなくてはいけない。女性は運命的な物に憧れるところ。

俺はあの計画を思いついてから、本屋さんに行つて『恋愛完全マスター』という本を買ったのだ。そこには、色々と恋愛について書き込まれている。女人人が惚れる仕草とか、ドキッとする言葉など、色々と書かれていた。

一通り全て読んでみた。分かったことといえば、女心は難しいということだけ。一応、それなりの内容は頭に入っているから、困りはないけど。

前方に見える未来先生を俺は見つめていた。

どうしたら、偶然を装えるのだろうか。とりあえず、チャンスが来るまで、見つからないようにしなくては。

そして、俺は見つからないように距離をとりながら、未来先生の後ろを再びつけた。

最初は服屋、そのあとは化粧日売り場と、俺が居ては明らかに不自然なところばかり回っていた。

かれこれ1時間、未来先生の後ろをつけているが、あの様子だと全く俺に気付いてないみたい。

そろそろ仕掛けないと、未来先生が帰ってしまうかもしない…。でも、無茶なタイミングで出て行つたら、かえつて怪しまれるかもしない。

俺があれこれ考へていると、彼女は食品売り場に入つていつた。

これだ！ ここなら、俺がいてもそんな不自然ではないし、色々と理由もつけられる。

俺はショッピング用のかごを手に取り、カップラーメンを3個ぶち込んだ。

「あれ、未来さん？」

冷静を装い、未来先生に近づき話しかけた。

「は、はい？」

ジーと俺の顔を見ている。もしかして、顔に何かついているのか！？ なんてベタな事を思つたけど、未来先生の様子だとそうじゃないらしい。しかも、そんなに見られると恥ずかしすぎて、目をそらしたくなるんですけど。

もしかして、未来さんの姉妹か、双子か？

俺は不安になりながらも、目の前にいる人に質問をした。

「未来…そこですよね？」

「…もうですけど」

どうやら未来先生らしい。

何なのだ。未来先生なら、俺を認識して居るはず。なのに、なぜ何も話してくれないんだ？

そんな俺の疑問を、ふつ飛ばすような言葉が俺に降りかかってきた。

「…ど、どうひきまでですか？」

…おじおじ。ちょっと待ってくれ。今日同じ前と同じ服装で来ているし、間違えようがないだろう。それに、自惚れているわけではないが、容姿だけはそこの男には負けないものを持っていると思う。カツコイイ人という感じで、俺のことを覚えているのが普通なのだ。

…なのに、この女はなんだ。

一週間前に会った俺のことを「どうひきまでですか？」で済ますのか？ モデル級の容姿を持っている俺に。こんな屈辱は初めてだ。

「ほ、ほら、堂本 悠ですよ。一週間前に、果歩さん達と一緒に遊んだじゃないですか」

プライドを傷つけられた俺は、苦笑いになりながら質問に

答える。

「…あー。」

すると未来先生は、今思い出したのか、手をポンと叩いた。俺つて、彼女にとつて一週間で忘れられるような存在なのだろうか。

「ここんちは。今日はどうしてここに？」

未来先生は、わざとよつと歩近づいてニコラッと微笑みをくれた。

「ちよつと食料の調達に」

俺はポリポリと頭をかいて、持つているかごを少し隠し、恥ずかしそうな様子を見せる。そうすることで、俺の持つているかごに何が入っているか気にさせるのだ。

そして、かごに入っているカツチラーメンを見せることにより、俺の食生活を少し見せる。

『恋愛完全マスター』によると、女人は栄養が偏つてゐる食生活をしている親しい男の人には、料理をしたくなる傾向があるらしい。俺は数分前の会話で、未来先生は俺のことを親しいどころか、赤の他人だと思っているらしい。覚えてもらつていらないなんて、本当にショックだった。

「そんなんご飯ばかり食べているんですか？」

未来先生は、俺の誘導にどつぶりとつかり、俺のかごを見て心配し

たらしい。

心優しい未来先生には悪いが、俺は毎日家政婦に栄養満天のご飯を食べさせてもらつてゐる。

「やうひなんですよ」

俺は、あはは…と軽く笑いながら、情けなさそうにした。

「…大変ですねえ」

「そ…！」

そ、それだけですか！　なんて叫びそうになつたつて。

「どうしました？」

俺の変な叫びに、彼女は疑問を抱いたのだろう。

「いえ、なんでも…」

そのあと、会話が続かない。こんなところで、つまづいてはいけないんだ。今度は未来先生の記憶に残るような人にならないと。

「み、未来先生は、この後は夕飯のお買い物ですか？」

俺の質問に、彼女は首を「クン」と曲げる。

「お供しますよ」

何が、お供しますよ、だ。自分で言つて吐き飯がした。

「は、はい」

未来先生も困っているみたいだし、もつ最悪だ…。

俺は未来先生が持つていてるかごを持つてあげ、その中に俺のカツップラーメン3つを放り込んだ。これはかごが一つあると不便という理由だからで、決しておごつてもらおうなんて考えていない。そんなことをしたら嫌われてしまうからな。

「あ、ありがとうございます…」

俺の行動に、未来先生は顔を赤くしながらさういった。紳士を装い、俺は『いえいえ』と答えておく。

…少し、後悔した。

いや、大分後悔した。

「…、こんなに食べるんですか？」

俺の質問に、未来先生は顔を再び真っ赤にする。

だって、俺が持つている食品の量は、半端じゃないのだ。今、俺の手にはかご一つぱいになつた食品を抱えている。推定、20キロぐらいだらう。

「い、一週間分だから…」

それでも、この量は多すぎないか？ 女の人が一人で持てる量じゃない。

「そ、それに…悠さんが居てくれたから…」

だから、いつも以上に買つてしまつたわけですね。まあ、これは頼られて『いる』ことだし、さつきまでしていた悪い気も、その言葉でなくなつた。

というわけで、俺は今堂々と未来先生の家へと向かつている。この量を未来先生一人に持たせて帰るというのは、男として最低な行動と思つたからだ。

「それにしても、今日は駅前のデパートに未来先生がいてビックリしましたよ。毎週通つているんですね？」

「ええ、土曜日に予定がない場合は大抵行きますね」

ちなみに未来先生は俺が持ちきれなかつた商品を片手に歩いている。

「俺も結構行くんですよ。未来さんみたいな可愛い人がいたのに、気付けなかつたとか少し人生を存した気分です」

なんて、臭いことを言つてみた。『恋愛完全マスター』によると、男のサラッと言つ口マンチックな言葉に惹かれるらしい。引かれる…と読み間違えてない事を祈るつ。

その言葉に対し、未来先生はこうい...
「へ？ 何か言いました？」

聞いていなかつたらしい。

「い、いや…」

あんな臭いセリフを一度もいえるかつて。

「本当ですかあ？」

未来先生はいきなり足を止めて、俺の目をじっと見つめてきた。

待て、これはまずい。こんな未来先生…

「か、可愛いな… つて」

あ、声に出でしまつた。

彼女は頭からボンツつと効果音が出そつたほど顔を赤くして、俺の腰をバシッと叩いてきた。

「いてつー！」

「じょ、〔冗談はやめてくださいー 心臓に悪いですー」

そつぽを向いて先を歩く未来先生は、なんだか本当に可愛かつた。

#09 心臓に悪いです！（後編）

本当にシリアルスなのか、よく分からなくなつてきました。
ですが、お付き合いいただけると嬉しいです。
よろしくおねがいします。

#1-0 僕は自惚れていた

「やつなんですよー！」

俺は今、未来先生の家に上がっている。

この前、未来先生を送りに行つたときは、マンションの前で解散だつたため、部屋の中を見ることは出来なかつた。

しかし、今回は荷物の件もあつて、自然にターゲットの家にあがれたのだ。これは大きな一歩だと思つてもいいだらう。

「やっぱ綺麗にしているんですね……」

未来先生の家は、2LDKのよつだ。布団やワードローブが見当たらない点から、俺が今居る部屋とは別のところにあるのだらう。

「あまり、ジロジロ見ないでくださいねえ

「す、すみません」

ちなみに今、未来先生はお茶を入れるために、お湯を沸かしてくれている。それらの行動を見る限り、ある程度の時間はここに居られるらしい。

そういうえば、あの本に異性を部屋に招き入れるということは、その異性に対して好感を持っているといえるだらう。なんて事が書いてあつた気がする。

未来先生は、今日の一件でどこか少し抜けていることが分かつた。多分、俺を家に入れたことさえ、好感どうこうの話ではなく、なんとなく流れで氣で…的な感じだろう。「この人に、あの本に書いてあることが通じるのか、とても不安になつてきました。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

未来先生は、今季節に適した氷が入った冷たいお茶を運んで来てくれた。俺はお礼を言いつとその場に座り、先生自身も少し離れたところに腰を下ろした。

「手伝ひてもらつて、ありがとうございます」

「いえいえ、当たり前ですよ」

俺は照れながらもそう返事をした。御礼といわんばかりか、お菓子が大量に俺の前へと置かれた。

「召し上がってください」

未来先生はニコニと微笑む。俺は、ありがとうございますと言いつて、煎餅をひとつ手に取つた。

袋を開け、俺はボリボリと音を立てながら食べる。ちょっと不謹慎かな、なんてこと思つたけど、未来先生もボリボリ食べているのだ。俺達は何も話すことなくテレビへと目を向けていた。

動物の私生活を見ながらも、クイズをするという番組を俺達は見入

つていて。…あまりにも無言すぎて、いい雰囲気とかそういうのが全くないじゃないか。せっかく部屋に上がりこめたのに、これじゃあ猫に小判だ。意味があつていいかは知らないが。さすが俺、現代文苦手なことだけはある。

「未来さん」

「はい？」

「未来さんは、普段休日は何をされているんですか？」

彼女は少し悩んだ表情を見せて、俺のほうを覗き込んだ。

「…興味あります？」

「ほえ？」

唐突すぎる質問に、思わず声が裏返ってしまったではないか。休日は何していますか、といつ質問に、興味あります？ と答えてきた女は初めてだ。

「いえ、その…」

「悠さんは何をしているんですか？」

おいおい、質問しているのはこっちだぞ。なんて思ったけど、ここでそんな事を言つたら、『なんて心の狭い人なの！』とか思われそうだからな。

「俺は散歩に出かけたり、友達と遊びに行つたりしていきますね」

「私は、大抵家でのんびりしているか、果歩たちに誘われて服を買
いに行つたりするだけですよ」

あはは、と笑いながら、やつと俺の質問に答えてくれた。

「果歩さんたちと、仲がいいんですね」

「果歩とは高校のときからの友人なんですよ。同じ部活に所属して
いて」

「仲のいいお友達を持つと、幸せですね…」

俺のこの言葉は、心からこぼれた言葉だった。無意識だった。本当に…幸せだった。俺にも龍之介が居るから。

「はい」

未来先生は、俺の悲しそうな顔に気付いたのか、優しく答えてくれ
た。

それからテレビを見たり、お話をしたりしていた俺は、さすがに入
り浸りすぎたようだ。外はもう茜色に染まっていた。

しかし、ここで終わらせてしまつたら、豚に真珠だ。意味はあって
いるが知らないが。このネタ一回目なのに、全くうけていないのは
どうこいつことなのだろうか。

少しでも、仲を深めたい俺はある考えが思いついた。

「今日の……」

俺は意を決して、言葉を放つ。

「晩御飯は、何か予定でも？」

「……」

これから俺に誘われると気付いたのだろう。少しだけ先生は下を向いた。

「どうですか？ 今日は俺と一緒に晩ご飯でも」

爽やか笑顔で質問した後、少し無言が続く。「こんな誘いをしたことない俺にとっては、その沈黙は耐えられなかった。

「駄目……ですか？」

俺のこの言葉で、完全に未来先生は下を向いてしまった。

「何で私なんですか？」

「……く？」

またもや意味不明の質問が飛んできた。「ご飯に誘っただけなのに」「何で私なんですか？」と質問してくる。正直言つ。彼女の言動は意味不明だ。

「何でつて……」

それにしても、いつこう場合はどうしたらいこのだらつか。経験のない俺にせりあつぱりわからない。

「美智子とか、誘えばいこじやなこですか…」

「……」

「あ、すみません。そういうもじじゃ…」

そういうもじじゃないなら、どういうもじもつだ。

この、俺の誘いを断るのか？

「すみません。無理に誘つてしまつたみたいで」

「……」

何も返事をしない未来先生に、俺は苛立ちを感じた。もひ、わけわかんねえ。

「また…今度行きましょうね」

怒りを表に出わなこよつて、一ノ口ツと笑うことが出来た、と思つた。

「は…はー」

未来先生のその言葉を聞くと、俺はスッヒ立ち上がり玄関へと向かつた。

外に出ると、生暖かい風が俺に吹きかけてきた。

心に響く。今まで、こんなことはなかった。

女なんて、俺の思い通りに。

そう、心のどこかで思っていたと思ひ。

俺は自惚れていた。

だけど、このままじゃ終われない。ここまでのかつが水の泡だ。

茜色だった空が、暗闇の世界へと姿を変えたとき、俺は携帯を手に持つた。

誰も人が通っていない道を歩きながら、俺は電話をかける。

「…お願いがあつます」

いつあるしかないと思つた。

#1-1 心が動くとき

「…理由はよくわかった」

電話越しに聞こえてくる声は、恭平さんのものだ。

「迷惑ばかりかけてすみません…」

この対応を見る限り、恭平さんは俺の作戦に協力してくれるようだ。

「俺も、果歩ちゃんに会いたいしな…！」

そつちが狙いですか。

「果歩ちゃんとの仲を取り持つてくれるなら、考えてやつてもいいけど？」

「へ？ それはもちろん…」

あんなに意氣投合している果歩と恭平さんを、これ以上どうやって仲を取り持つか、聞きたいぐらいだが。ここは肯定の返事をしておいて、失敗ではなかつただろう。

「別に、お前に協力とかしてないんやでな」

もし俺がバレてしまい、この作戦に恭平さんが関わっていたということが分かつてしまえば、果歩と恭平さんの関係は終わってしまうに違いない。

「あらがとうござまわ…」

俺は恭平さんの優しさに触れ、声が震えてしまった。

家に帰ると、未来先生から受けた傷のことを忘れるために、勉強に明け暮れた。ご飯はキヨ爺に持ってきてもらい、英語の教科書と参考書を眺めてくる。すると、携帯がピリリと鳴り出した。

「…ん?」

携帯を手にとった俺は田を疑つた。

『明日、17時に駅前集合。果歩ちゃんや、未来ちゃんも誘つたから、遅刻したら俺がパンチをくらわすでえ！…』

と書かれたメールがきたのだ。

…恭平さん、行動早すぎるのでしょ。電話だって、1時間前ぐらいにしたばっかりだ。

送信者リストを見ると、龍之介のアドレスも一緒に書かれていたので、龍之介もその行事に行くのだろう。

感謝と了解のメールを書いて送信し、俺は携帯を閉じた。

「明日か…」

今日、あんなことがあつたから、明日未来先生に会つのは少し気まずい気がする。だけど、そんなことを言つていてる時間も残されていないのが事実だ。次のテストまで、あと数週間といったところだし。

俺は教科書を閉じて、机の中に閉まつてある『恋愛完全マスター』を取り出し、ベッドの上で寝転びながら読み始めた。

「…女の子は押しに弱いと」

時には引く」とも大事だが、押す」としなければ引く」とは無意味に終わる、ということらしい。

とつあえず、何を押すのだ？　何を引くのだ？

俺はそのページの隅っこにある例に目を向けた。

「お前の事、好きだよ」

「君…？」

「次の日～

「お前の事、好きだよ」

「…そ、そういうからかうの～」

「本気なんだー！」

「次の日～

「大好きなんだよー！」

「何回僵つてやーー。」

「お前が、俺のijtjを分かつてやれるまでに決まってこんだい」

「わい…嫌なの」

「次の日~

「…」

「5日後~

「…な、なんで、最近かまつてくれないの?」

「嫌つて言われたから、見守るだけにしようかなって。好きだから
や」

「わい、ここんだよ…」

「え?」

「私も、あなたの」とが…。」

と、なるじー。

とひつもなく長く『例』だったが『氣にしない』でやれ。『わいせり、』

うこうやつ取りが「押し」「引く」とこいつこ。違ひ意味の、引くでないことを願おつ。

「あああー… 日本語つて難しい…」

俺が少し大きい声を出したせいか、キヨ爺が慌てて部屋に入ってきた。

「どうしました!?

「え、いや…なんでもないよ」

俺は右手に持つて居る本を、キヨ爺にばれないようベッドの中に入れた。正直、こんな本を読んでいるなんて、キヨ爺には知られたくない。

「やつありましたか。ノックも無しで、部屋に入つて申し訳ございません」

キヨ爺はお辞儀を俺にして、ドアへと手を回した。

俺は無意識にキヨ爺を呼び止めていた。

「キヨ爺…」

「はー、どうなされました?」

「…キヨ爺は、恋をしたことがある?」

いきなりの俺の質問に、キヨ爺は目を丸くした。まあ、やつこう反

応するだらうな。今までの俺を見てきた人なら。

「そりゃ、私もこれだけ年を取つてますと、恋をしたことはありますが…」

「難しいものなのかな？」

「難しいというより、心の問題ですからね。自分で素直になれるか、なれないかの違いだと思いますよ」

キヨ爺は俺に笑みを向けた。じつや、キヨ爺は俺が誰かに恋していると勘違いしているようだ。

「…恋をするとしたら、どんなとやへ…」

「心が動くとや…ですかね？」

「心が動くとや…」

俺はキヨ爺が発した言葉を、口に出して繰り返した。

心が動くときと、どのような感じなのだろうか。俺は、今まで恋をしたことないし、しょとも思つたことがない。

「俺には、まだ早そうだな」

笑いながらそういうと、キヨ爺は優しい声で、そんなことあつませんよ。と、優しく笑みをくれた。

「恋は、突如やってくるものです。気付いたときには、もう心は動

かされてこるものですよ」

それから數十分、キヨ爺の昔話を聞かされたが、あまり覚えていない。

ベッドの中に、本を隠したまま俺は目を閉じて、夢の世界へと旅立つた。

「ふあ・・・！」

俺は朝の光を向かえるために、カーテンをガラツと開いた。

時計を見る限り、今の時間は朝の9時。遅くもなく、早くもない時間帯だ。

予定としては、15時まで勉強をして、それから身なりを整え、駅前の集合場所へと向かうつもりだ。

このまま、先生との恋愛ゲームに力を入れすぎて、他の科目がグダグダになってしまったら、元もこどうもないからね。

俺は机に向かい、参考書を開いた。

「4×…」

ボソボソと公式を呟きながら、シャープペンシルを持っていると、携帯からすさまじい音量で音楽が流れ始めた。

「もう15時か」

俺は鳴つている携帯を止め、ポケットに入れた。そのまま、洗面所へと向かう。学校へと行く髪型、服装ではなく、世間一般でカッコイイと言われるような容姿作りにした。この前は、何がなんだか分からず出かけたため、特にカッコ良くしたつもりはなかつたのだが、今回は話が別なのだ。最初からターゲットに会うために、恋に落とすために出かける。それなりの身なりは必要なのだ。

じっくり時間をかけ、30分程度で済まし、荷物の確認、そして軽く体臭を消すためにあると思われるスプレーを体にかけた。まあ、実際のところ、臭いといわれたことなんて記憶にないけど。

準備が終わると、キヨ爺に一言かけて家を出た。

「お待たせっ……」

俺が駅前に着いたときには、恭平さん以外全員がいた。つまり、女性3人と龍之介。…一人で心細かったらうな。

「遅いですよお！」

一番に話しかけてきたのは、意外にも美智子だった。どこか大人しそうなイメージがあつたために、少しビックリしてしまう。

それよりも、今日は未来先生がこの前の合コンのときの雰囲気になつていいのだ。機嫌が悪いというか、なんというか。俺と二人でいたときは、そんなことなかつたのに。

「未来さん？」

俺が話しかけると、未来先生はビクッと動いて一步引いた。

「は、はい？」

顔を引きつらせながら返事をする彼女を見ると、じつや「ひ」の前の事を気にしているようだ。そつやもつ、腹が煮え返るほどムカつちはしたが。

「…元気無いようですが、じつしたんですか？」

「緊張しているのよー。」

俺の言葉に反応したのは、未来先生ではなかった。

「果歩！ 果歩が龍之介君は来ないから安心してって言ったから来たのに…」

「「めん、「めん…」

軽く悪いながら未来先生に謝っている果歩は謝る氣はなさそうだ。未来先生は頬を軽く膨らませている。

それよりも、俺の読みは間違えていたようだ。未来先生はこの前のことなんか気にしていないみたい。

俺がそんな事を考えていると、未来先生は俺の顔をじっと見てきた。

「な、何ですか？」

俺が引きつる顔を抑えながら、未来先生に聞いてみると小さい声で「その…」の前は、本当に「めんなさい…」と謝ってきた。

前言撤回。やつぱり気についていたみたいだ。本当に、この人はよく分からぬ。もう少し…知つてみたいな。

そんな事を思いながら、俺は「今度は嫌がらないでくださいね」と意地悪っぽく言つてやつた。

#1-1 心が動くとき（後書き）

本当にシリアスなのか？と問われたら、100%そうとは言
い切れません。申し訳ないです。

しかし、楽しんでもらえるように、作者は頑張って執筆したいと思
うので、どうかよろしくおねがいします。

#1-2 付き合ひちやいます？

結局、全員が揃つたのは17時10分だった。

そう、恭平さんが遅刻してきたのだ。龍之介と同じ家から出発しているはずなのに、あの人だけ遅刻するとはどうしたことなのか知りたい。

「ほんまじめんつてー！」

両手を合わせて必死に謝る恭平さんを見ると、なんだか執事の面影が見られない。本当にあの時龍之介の家にいた人なのだろうか、と疑問に思つてしまつぽぢに。

「恭平君！ 今度から遅れてくるときは連絡をいれることー 分かったー？」

果歩は怒り気味な声で、恭平に言い放つた。

「ほんまじめん」

真剣に謝る恭平を見てなのか、どうなのかは分からないが、果歩は小さな声で「けど、何事もなくてよかつた…」と呟いた。

「え？ 心配してくれたん！？ めっちゃ嬉しいんやけどー 遅刻もしてみるもんやなあ」

えへへと嬉しそうに笑いながら、恭平さんは頭を擣いていた。

「べ、別にー 恭平君の」となんて言つてないじゃんー 鷹鹿つー。

そっぽを向いて一人先頭を歩く黒歩の隣に、恭平さんはぴたりと
ついた。

そういえば、こんな光景を本の中で見た気がするんだ。えっと、なん
だっけ。シンドロ? シン... でれ?

そりだ。シンデレだ。

男は、シンデレに弱い人が多いこと聞いたが、恭平さんもその一人の
よしだ。

「仲がいいですね...」

いつの間にか俺の隣に居た美智子が言つた。

「もうですね...」

「私も... ラブラブしたいなあ」

あれをラブラブといつのだりつか? なんて疑問を持つたが、そこ
は特に気にしない。

「彼氏ちゃんとラブラブすればいいじゃないですか」

「あれ、言つてこませんでしたっけ? 私も今フリーなんですよお

そんな満面の笑みで話す「とじやないと思つただけどなあ...」。

「…確か、悠さんもフリーでしたよね？」

「えりひですねえ」

まあ、狙っている人ならいるけどね。

「じゃあ、その…付き合つちやこます?」

…は?

この女は、今なんと言つた? 付き合つ? 待て待て、俺が狙っているのは、未来先生であつて、美智子じゃないんだけど。

「……」

あまりにも予想外の言葉すぎて、返す言葉も見つからない。

「じょ、[冗談ですよー。」

「で、ですよねー?」

あはは、と笑いながら誤魔化すも、あの言い方は結構本気だったのだろう。とりあえず、告白される」とだけは免れなければ。

美智子に告白されても、俺の答えはNOなのだ。つまり、振るつて事。そうなれば、美智子の友人である未来先生とも会いにくい。遊べる確率が減るのは勘弁だからな。

とりあえず、近づかなければOKだ。

俺はひょっと赤べースを落として、龍之介の隣についた。

「…元気?」

美智子から逃れるためにここに来たため、話す内容が全く思い浮かばない。

「元気」

龍之介も即答しているし…

「その…これから何処に行くんだろうなあ」

「分からぬ」

17時という中途半端な集合時間にした理由は、これからこの前回様カラオケに行くか、飲みに行くかの一択だろう。

高校生でもあるまいし、ゲームセンターなんかに行くわけ…

「よつしゃー 飯の前にゲームセンターで汗流していくで…」

…あるみたいだ。

「おー！ ゲームセンターとか久しぶり！」

果歩もノリノリだし…。

そして、俺達はゲームセンターに着き、初めに、UFOキャッチャーがある場所へと皆で足を運んだ。

「かわいい…」

俺のそばで、未来先生の物欲しそうな小さな声がした。

未来先生の目線を追つてみると、なんだかリラックスしそうなクマの人形がそこにあった。どうやら、この人形がほしいらしい。

「ベタだけど挑戦してみるか。

「おい、悠、置いてくでえ！」

「あ、先に行つていってくださいー！」

そういうと、みんなは奥に歩いていった。このゲームセンターは街の中で一番大きいゲームセンターらしい。まあ、滅多なことがない限り、俺のこの恥ずかしい挑戦に気付きはしないだろう。

そして俺はお金をJFOキャッチャーに200円を入れた。

「悠、今どこやねん？」

挑戦する」と10分。恭平さんから電話がかかってきた。

「あ、すみません。道に迷っちゃいました」

まあ、こんな所で道に迷うわけがないが。この変な人形を手に入れるために1000円以上使ってしまつただけなのだ。

「今、プリクラのところにあるから、あと1分以内に来いよ」
恭平さんはそれだけ言つと、携帯をブチッと切つた。まあ、今日のセッティングは恭平さんがしてくれたんだから、これ以上迷惑をかけるわけにはいかないよな。

俺はそう思い、携帯をポケットにしまつて、プリクラ機のある場所へと小走りした。

「悠！ 遅い！ チャウねん！」

「す、すみません！」

気持ちが焦りすぎたのか、なんと道に迷つてしまつた。道に迷うわけがない、とか言つていた自分が恥ずかしい。

結局5分ほどかけて、目的地につけた。

「ほりほり、皆待つてるから、早くここや」

「は、はあ…」

俺はため息のような返事をして、皆が待つ場所へと歩み寄つた。

まあ、当然の」と、女子からは罵声のようなものを浴びせられた。

「ちょ、俺も撮るんですか！？」

会話の流れで、今からプリクラを撮るという話になつた。というか、俺が来る前から撮るつもりだったらしい。ただの分かりやすい集合場所ではなかつたようだ。

「けど……」

「ま、ついさいなあ。遅れて来たんやから、口答えなんかすんな！」

「恭平が言つたな！」

そういうのは、果歩。いつの間にか呼び捨てで読んでいるようだ。

「まあ、悠君恥ずかしがらずにおいで」

果歩の言葉に、俺は何も出来ず、ただ肯定の返事をした。

ここで断つてしまつたら、ただの空気が読めない遅刻の男だ。とりあえず、俺はプリクラ機に入った。

6人という数は少し多かったのか、少し窮屈に感じる……。

俺は軽く微笑み、人生初のプリクラを撮つた。

今、プリクラ機の傍にある落書きコーナーのような場所で、美智子と果歩はプリクラを加工していた。この作業は男子達には任せられ

ないようだ。

美智子と果歩の後ろで、軽く微笑みながらその作業を見ている未来先生の肩をちょんちょんと叩いた。

未来先生は頭にはてなを浮かべながら、俺の顔をじっと見てくる。

「な、何でしょう？」

「これ、プレゼントしますよ」

俺はさつき10分かけて取つたクマの人形を未来先生の前へと突き出す。

「…へ？」

その人形をみた瞬間、未来先生は驚きでいっぽいの顔で俺の目を見てきた。

「い、いいです！」

そう言って、未来先生は人形を俺に押し戻してきた。

「貰つてもらえませんかね？　俺がこんな可愛い人形を持つていたら、笑われるでしょう？」

俺は二ヶコリ笑つて、もう一度人形を未来先生に突き出す。

「…あ、ありがとうございます」

俺から人形を受け取ると、ニッコリと笑いながら。人形をもふもふと触っている。

女の人は、さり気ないプレゼントに弱い。って、本に書いてあつたが、それは本当のようだ。

「大事にしてくださいね」

俺が未来先生の持っている人形をつつつきながらそういうと、彼女は大きくうなずいた。

#1-2 付せぬひなやこまか? (後書き)

感想等いただいたら、とても嬉しいです。

#1-3 …それ、本当なの?

「未来、その人形可愛いねえ」

プリクラをみんなに配っている美智子は、未来先生の持っている、俺があげた人形に気付いたようだ。どうして、女ってもんはあんなに人形が好きなのだろうか。

「え、えっと…」

返答に困っている未来先生はあたふたしている。『こんな可愛い人形を持つていたら、笑われるでしょう?』と言った俺に気を使つてくれているみたいだ。本当に優しいんだから。

「つ、次はなにするの?」

話をそらすために、未来先生が果歩に話をふった。美智子はその姿を睨み付けるように見ている。

…睨み付けるように?

「み、美智子さん」

俺が話しかけると、美智子はつづむいてしまった。

「…大丈夫ですか?」

何故、俺は話しかけたのだろう。

「わた……」「ああ……と……」

「はい?」

何故、俺は名前を呼んでしまったのだろう。

「私にも人形をとつて……」

「み、ちひ……さん?」

……何故、俺はこんなことに気付かなかつたのだろう。

「「「、「めんなさい」…お手洗い行つてきます」

彼女の声は、泣いているかのように震えていた。

「美智子……」

小走りでトイレのあるほうへ行つた美智子を、未来先生と果歩は走つて追いかけていった。

「悠、なにしたんや?」

状況が飲み込めていないのか、不思議そうな声で俺のそばによつてきた恭平さん。

「え、さあ?」

俺は分からぬ振りをして、恭平さんと話を始めた。龍之介は、俺の隣でずっと俺の顔を覗いている。気付いているのだろう。俺が、

美智子に酷いことをしたということを。

彼女の気持ちに気付きながらも、彼女の前で未来先生に人形をあげてしまった。『嫉妬心』という言葉が、恋愛完全マスターに書いてあつた気がする。好きな人が、自分以外の異性と仲良くしているのを見ると、生まれる感情らしい。

どうやら、美智子はその感情を抱いてしまったようだ。未来先生に 対して。

…待てよ。

昨日、未来先生が俺の誘いを断つたのも、美智子に悪いといつ気持ちがあつたからではないのか？ 未来先生は美智子の気持ちを知っていたのではないか？

…最悪だ。少し考えれば、この状況を逃れられたではないか。

美智子にもっと冷たく当たつておけば。

美智子に居ないとこで人形をあげれば。

…それでも、俺は人間のクズなのかもしれない。

俺は美智子に、悪いといつ気持ちを一切抱いていない。むしろ、未来先生に会いにくくなるのではないか、という考えばかり、頭に浮かんでくる。

「大将」

色々考へていい俺の思考を止めたのは、龍之介の声だった。

「戻つてくる」

龍之介はやつことじと、少し離れた場所に居る未来先生たちをチラシと見た。

…美智子も居る。

「今日は、お隠れでもいいかな？」

果歩は、戻つてくると同時に、俺達にやつ言い放つた。少し冷たい声で。

「ああ」

状況が把握できていない恭平さんも、この空氣に気付いたのか、即答をした。

果歩は俺に近づいてくると、耳元で小さく一言つぶやいた。

Jの後、駅前の公園で待つているから。

俺は、驚きのあまり果歩に視線をむけた。しかし、彼女はすでに恭平の元へと行っていた。

…どうして、こんなこと…。

俺の計画は、徐々に歯車が狂い始めていた。

「…やつま、悠君」

俺が公園へ行くと、果歩は一人で待っていた。この公園は、市内でも結構広いと有名な公園だ。中央には池があつたりもある。

「他の人はどうしたんですか？」

「美智子は、未来が送つて行つたよ」

そういうと、果歩は歩き始めた。

さて、どうしようつかのか。ここに呼ばれた理由はなんとなく分かってこる。このタイミングは、美智子のこと以外ありえないだろう。困ったものだ。

無言で歩いていた果歩は、ベンチの前に行くと足を止め、そこで腰を下ろした。俺はその隣へ座る。

「美智子のことなんだけど」

やつぱりか。

「美智子はね、悠君の事好きなのよ」

知つてこるよ。

「それで……悠君、未来に人形をあげていたでしょ？~」

「はい」

「……私達ね、高校のときからの友達なのよ」

それがどうした？

「『こんなこと言いたくないんだけどね、こんなくだらない事で、未来と美智子の友情関係を壊したくないの』

「…はい」

「ねえ、悠君。美智子のこと、どう思つている？」

黒歩のその質問に、俺は口を閉じてしまった。美智子のことなんて、今までそんなに考えたこともないし、未来先生のお友達と認識している程度だ。そりや、少しばかり話していく楽しいし、面白い。だからと言つて、どう思つているといわれても困るわけだ。

ここでは『未来さんのお友達』なんて答えてみる。俺が、未来先生狙いつてことが、もうバレになつてしまつ。そうなつたら、余計2人の関係は崩れてしまうだろう。

……だから、どうした。俺にとつて、2人の関係はどうでもいいことではないのか？ いや、待て。そんなことじや、さつきの一の舞だ。一般的に考えて、未来先生は俺に全く恋愛感情を抱いているようには見えない。そんな状況で、俺の印象を悪くしてみる。それこそ、俺の計画は完璧に狂つてしまつ。

…もう、大分狂っているが。

「美智子さんは…優しい人だと…」

「そうこうことを、聞いているんじゃないの」

俺の言葉を遮った果歩の顔を見ると、真剣そのものだ。そりやそうだ。友達が俺によつて傷ついたのだから。

「好きか、どうか聞いているの」

…ストレートだな。そんな質問されても困るじゃないか。

俺が口を閉じていると、美智子はひとつ小さなため息をついて、再び質問をしてきた。今度は、さつきと違う、もつと…俺が答えられない質問を。

「じゃあ、質問をかえる。悠君…好きな人は居るの?」

「好きな…人?」

「…」

このまま黙っていたら、いふと言つて居たのと同じことになつてしまつ。だからといつて否定も出来ない。俺は未来先生を狙っているのだから。ここで『いません』なんていつてしまえば、この状況的に果歩は俺に、美智子のことを考えぼしこと言つだらう。

「…る」

考えた挙句、俺が出した答えは「」の言葉だった。

「… そり」

俺のその返答に、悲しそうな顔を見せた。

「那人とは、もう付き合つてこるの？」

「いえ、俺に彼女なんかできませんよ」

あはは、と軽く笑つて誤魔化す。

「もしかして、未来が好きなの…？」

「え？」

ある意味、確信をつかれた俺の顔は、どんなふつになつてゐるだろう。まさか、そんな質問が来るとは思つてもいなかつた。予想外すぎて、頭の中が真つ白だ。

「…それ、本当なの？」

俺と果歩は驚きのあまり、目を見開いてしまつた。それもそうだろう。俺達の目の前には、「」には居てはならない人がいたのだから。

「美智子つー」

遠くのほうから、未来先生の声が聞こえた。

…本当に最悪だ。

こんな状況つてありかよ。

俺と果歩の目の前には、涙がまだ止まっていない美智子の姿があつた。

#1-4 まだ、諦めは早い

「さうなの……？」悠君

なんといつ修羅場だよ、これ。こんな場面、画面でもドライマックスでも、そうさう見られるものじゃない。

田の前に、俺のこと好きと言つてくる女。

その後ろには、俺の狙っている女。

俺の隣には、その二人の友人。

…本当に、どんな修羅場だよ。

「えつと…」

さて、さうする俺。正直、今はパニックになつて頭の中が真っ白だ。何も思いつかない。

「やの…」

「さうなの…」

「さうなの？」

美智子の田は、しっかりと俺を捉えていた。

幸いなことに、未来先生は俺達の会話を聞いていなかつた。だから、

未来先生は今、何がなんだか分かっていないだらつ。

…まあ、その状況も時間の問題だが。

「美智子？」

未来先生は、不思議そつな声で美智子の名前を呼んだ。その言葉に、美智子は反応をしない。

「果歩…？」

美智子が答えなかつたからか、未来先生の質問の先は俺の隣に座つている果歩に向けられた。

「えつと…その…」

“えつやら、果歩も俺同様パニッシュに陥つているようだ。

「何の話をしているんですか？」

最後に、未来先生の言葉は俺に投げかけられた。とつあえず、返答をしておこう。

「……」

しかし、無理だつた。今の俺に、何を答えるといつのだ？ 未来さん狙つていたこととがばれました、か？ 美智子さんをふつてしましました、か？

「えつと…」

俺が言葉につまらせていると、美智子がせつめうと口に呟いていた。

「今、悠君に未来の事が好きか。って、聞いているの」

「え？」

いきなりのことじで、未来先生もビックリしているようだ。

「…未来が好きなんでしょう？」

美智子は言葉をとめない。

「そんなこと急に聞かれても…」

そう答えるしかなかつた。『そつ』とも『違つ』とも答えられないのだから。

今まで以上の重苦しい空氣が、周辺を漂つた。その空氣を消し去つたのは、未来先生の声だった。

「そんなわけないよ」

「え？」

突然の未来先生の言葉に、美智子も果歩もビックリした顔を見せる。

「…ですね？」

「そ、そうです」

未来先生の圧倒的な雰囲気に押されて俺は答えてしまった。認めてしまった。

未来先生のこと好きじゃないこといつことを。

「…本当なの?」

そう言つたのは果歩。

「…ああ」

そう答えるのが精一杯だった。敬語さえ使つ余裕もない。

「…ほら、一人とも帰ろ!よ」

未来先生の言葉で、果歩はベンチから立ち上がり、美智子は俺に背を向けて歩き出した。

俺は一人、公園のベンチに残されていった。寂しかった。何かが足りなかつた。

「あ~…」

誰にも聞かれない程度の声を漏らした。

「失敗したなあ…」

今ならよく考えられる。あの状況は100%、俺が未来先生を好き

だと言つてゐるのも同じなのだらう。

そして、俺は未来先生に『好きじゃない』といつて言葉を無理やり迫られた。そうせざる終えなかつた。

とりあえず、これだけはいえる。俺は振られた。未来先生にあつさりと振られた。

涙が一粒、俺の目から零れ落ちた。これは、振られたことによつてじゃない。失敗したからだ。だけど、心のどこかが痛んだ。

奥底の、どこかが。

無理やり足を立たせ、俺は自分の家へと帰ることが出来た。キヨ爺などに話しかけられるが、軽く返事をして俺は自分の部屋へと向かつた。

「どうしようか…」

俺がベッドに倒れこむと、ドシッと音を立てて沈む。まさに俺の心のようだ。

「…転校」

最悪な展開が見えてきた。やよひならしなくちゃいけないのかな。俺の唯一の親友である龍之介と、その執事である俺の悪事に付き合つてくれた恭平さんとも。

そして、未来先生とも。

「嫌だなあ……」

俺は、大きなため息をついた。ため息をつくと、幸せが逃げるとかいうけれど、今の俺には関係ない。幸せなど、持ち合わせていないのだから。

「お坊ちゃん」

声に反応して、俺はドアに視線を向けた。ビーナス、ドアの向こう側にキヨ爺がいるようだ。

「入つてもよろしくでしようか?」

「いいよ」

「何があつましたか?」

俺は何も考えず、返答をする。今口一日、色々と考えすぎた。

キヨ爺は、心配してくれたのだろう。俺がいつもと違うから。だけど俺は何も答えられない。

「…まだ、諦めるには早いと思います」

「キヨ爺に、何が分かるの?」

確信を疲れた俺は、キヨ爺に冷たい言葉を返してしまった。

「いえ、何も分かりません。人は結局、全てを分かり合ひ」とが出来ないのですから」

「……」

「だけれど、」れだけは言えます。お坊ちやま、諦めないでください」
その言葉に続きに、キヨ爺は『最近のお坊ちやまは楽しさついに見えました』といったのだ。

「楽しさついへ。」

「はい」

小さじときから俺を見てきたキヨ爺だ。俺が楽しそうに見えたのは本当なのだろう。よく考えてみると、この一週間は楽しかった。恭平さんとも出会つたし、未来先生とも出会つた。果歩や、美智子とも。

楽しかったか？ と聞かれると、そりやもう、楽しかったのだろ？
だけど、その樂しい時間も、もつ終わりなのかもしれない。

「お坊ちやま」

「何？」

「携帯が、鳴つております」

机に置きっぱなしにしていた携帯が、チカチカと光りながら、ブー

ブーと振動音が鳴り響いていた。

未来先生かもしない。

なぜか俺はそう思い、携帯の元へと近寄った。

携帯をあけ、通話ボタンを押す。

「もしもし…」

俺がそう言葉を発すると、キヨ爺は頭を一度下げ、部屋から静かに出て行った。

携帯から聞こえてくる声は、俺が今一番聞きたかった人の声だらう。

そう言つていいと思う。

「未来さん…」

そして、俺が一番聞くことを恐れていた声でもあった。

言葉が矛盾しているが、これで正解なのだ。間違つてはいない。

「悠さん…私」

俺の心は、一瞬にして決まった。諦めないと。そして…

「未来さん、今から会えませんか？」

あの言葉をぶつけようと。俺の計画の最大なる場面を迎えるとこ

ていた。

#1-5 だけど、Iリは現実の世界

「え……？」

俺のいきなりの質問に、未来先生は困惑しているようだった。

「未来さんの家の近くまで行くんで…」

Iリは呟いてはいけない。そう、本能が眩いでいた。

「今から……じゃないと駄目ですか？」

「できれば、今がいいんですか？」

その言葉から数秒間未来先生は考案したのだろう。声が聞こえてこない。

「…わかりました」

悩んだ挙句、未来先生が出した答えは、YESだった。俺は少々く拳を握り締めて、ガツッポーズをする。

「じゃあ、マンション前に着いたら連絡しますので」

俺はそのまま、携帯から耳を離し、通話を終了した。

これから俺は、今までに経験がないことをする。言つておくが、かなり不安だ。こんな気持ちは、やつやつ味わえるものじゃない。

とつあえず、俺は服を整え、あるものに手を伸ばした。

『恋愛完全マスター』

最近は、この本に頼りっぱなしだ。多分、これからも頼るのだろう。恋愛経験が無に等しい俺にとっては、この本が未来先生を攻略する本なのだ。

「えっと…」

俺は、指で文字を追いながら、ある文章に目を通した。

「未来さん…」

俺はあれから家を出て、キヨ爺に頼んで未来先生宅の近くまで乗せていつてもらった。キヨ爺は人生経験からなのか、俺に対して一切質問をしてこなかった。

普通に考えて、俺がこんな時間に外出するなんて、今までになかったことだ。もう夜9時ごろなのだから、使用人としては心配してもいい時間なはずなのに。

「ひんばんは

そう声を出したのは、俺の目の前に立っている未来先生だった。格好は、今日の昼となんら変わっていない。

「」こんな時間に、申し訳ございません」

「いえいえ」

何を伝えるかは考えてきた。しかし、それまでに何を話そつなど、考えていなかつた。そこまで頭が回らなかつたと言つたほうがいいだろう。

「えつと…」

そのせいで、言葉がつまつてしまつ。

「美智子は…今、私の家でゆくつしてこます」

…美智子の「」ことが聞きたかったわけではない。いや、少しは聞きたかつたが。

「すいません…」

俺は、なんだか申し訳ない気持ちになつた。美智子に対してもはなく、未来先生に対して。

「公園…行きますか」

そう提案したのは、未来先生のほうだった。俺は首を縦に振る。

「近くに、桜が綺麗に見える公園があるんですよ。今はもう夏なので、桜は咲いていませんが」

そう言って、未来先生は笑みを浮かべる。

「桜…見たかったです」

「来年は…」

そこで言葉をとめてしまった未来先生。来年は一緒に居れるか分からぬ、という意味だろう。

そのまま、俺達二人の会話は途切れた。ただ、公園に向かって歩くだけ。

これから、俺の伝える言葉をどう受け取るのだろうか。

そんなことを考えながら、俺は未来先生の後姿を眺めていた。

「…夜風が涼しいですね」

公園内にあるベンチの前まで行くと、未来先生は腰を下ろした。俺はその隣に座ることが出来ず、未来先生の前方で立つたままでいる。

「座らないんですか？」

「…じゃあ、遠慮せず」

俺はゆっくりと近づいていき、隣に腰掛けた。

しかし、俺も未来先生も口を開こうとはせず、沈黙の時間が流れた。何か話さなくては、何か…。

「学校は、楽しいですか？」

何を聞いているんだ、俺は。そんなことを聞いても、何も面白くないだろ？。

「…生徒達が、とっても可愛いです」

「未来さんはきっと、いい先生なんでしょうね」

俺は、意味も無く話を長引かせようと必死だ。いや、意味はある。この心臓の高鳴りが、さつきから全く収まらないのだ。

「いえ、そんなことは……」

何故俺は…

こんなにも感情が高ぶっている?

こんなにも動悸が激しいのだ?

こんなにも緊張をしてくるのだろう…?

「あの…」

俺が、言葉を発しようとしたときだった。未来先生が、少し大きめな声で話し始めた。

「美智子は、悠さんのことを好きって言っていました」

「……」

「なぜ、振ったんですか？　なぜ傷つけたんですか？」

振った？　俺が？　まだ、直接的に振ったわけではないだろう？
まあ、あの状況では、振ったと言つても間違いではなさそうだが。

「……」

言葉が出てこない。言い訳するために必要な、『それは…』の言葉
が出てこない。それも言えれば、あとは俺の口が勝手に動いてくれ
るの。」

「…好きだったんですよ？」

今、未来先生の顔は、人一倍悲しい顔をした。今までに見たことが
ない顔だっただけに、俺は驚いてしまった。自分が振られたわけで
もないのに、今にも泣きそうな顔をしている。

「俺は…」

「未来さんのこと…」

思い出せ。あの本に書いてあつたことを。

『古畠さんとおは、夜景の綺麗な場所がいい

…おつけ。夜景はばつちつだ。

『告白文句は、ストレートで。手紙よりも電話、電話よりも直接言つたほうが、気持ちが伝わりやすい』

告白。

俺は今ここで、人生初の告白をするのだ。

「未来さんのことが、好きなんです」

俺はベンチから立ちあがり、未来先生を見つめた。予想通り、未来先生は驚きを隠せない表情をしている。

言つた！ よく言つたぞ俺！

「なんで…」

未来先生が言葉をぽろつとこぼした。

「私なの…？」

俺の言葉に、さつき俺に見せたあの悲しい表情を再び見せた。

どうして、そんな表情をする？ お前は今俺に告白それでいるんだぞ？

そして、未来先生の目からは涙がこぼれていた…。

「未来さんは、俺のことどう思っていますか？」

俺の真剣なまなざしに気付いたのか、未来先生は涙をこらえながら

答えてくれた。

「どう思つていろつて…」

考えたこともないのだから、答えられるわけがないのだろう。昨日まで俺の存在を忘れていたのだから。

「…嫌いですか？」

「嫌い…じゃ…」

そう言つう未来先生の涙を俺の目はしっかりと捉えた。未来先生も俺の顔をその泣いている目でしっかりと捕らえている。

「本当のことを見つと、付き合いたいと思つています」

俺を見つめる先生の瞳に、飲み込まれるよつて俺は言葉を放つた。ここが、俺の計画の中で最大の場面だろう。

ゲームでは失敗すれば、コンテニューが出来る。だけど、ここは現実の世界。

行くところまでいってしまった。

もう、後戻りは出来ない。

「俺は貴方が大好きなんです」

俺は自然に腕が伸びて、涙が溢れこぼれている未来先生の体を包んだ。

「好きなんだ…」

気付けば、言葉が止まらなくなっていた。

#1-5 だけど、いじむ現実の世界（後書き）

あとがきは、僕自身のblog書いております。
よろしければ、のぞいてやつてください。

HP http://plaza.rakuten.co.jp/
mlq84s/
(HOMEからもいけます)

そして、感想をください…。

#1-6 僕…好きだから！

未来先生を抱きしめて、もうじれぐらに経つただろうか？ 10分
？ いや、現実では1分も経っていないのだろう。

「悠…さん」

「あ、すいません！」

俺は未来先生から手を離し、少し離れた。

あの状況とはいえ、なんで未来先生にあんなことをしたんだ？ 無意識だった。気付けば未来先生を抱きしめていて、気付けばあの言葉を放っていた。

俺のこの行動で、二人の間は妙に嫌な雰囲気が流れている。

「その…すいません」

「い、いえ…」

未来先生も驚いているのだらう。ずっと俯いたままだつた。

「未来さんは、俺のこと有何とも思っていないことは知っています。だから、こんな事を言つてしまつて…」

「……」

黙りきつていいる未来先生の顔をチラッと一瞬見て、俺は未来先生に

背を向けた。

「昨日だって、一週間前に会った俺のことを、覚えてくれていませんでしたもんね」

そうだ。俺は、未来先生の興味すら引かない男だったのだ。

「そ、それは！」

仕方がない。この際、未来先生は諦めるしかない……。そして、もう一度死に物狂いで勉強をしてみよう。

… もう、考えたのに、この女ときたら。

「お、覚えてない振りをしたんですよー。」

… は？

「お、覚えて…え？ どういひこと」

少し待つてくれ、理解する時間をくれ。つまり、未来先生は昨日、俺と気付いてはいたが、ジョークのつもりで、あんな馬鹿な演技っぽいことをしていたというのか？

「す、すいません！」

「い、いえ…」

完全にペースを乱されている。何なのだ、この女は。

「何で、そんなことを？」

「これが、正しい質問だろ？」

「それは、美智子が悠さんの事を……」

好きだつて言ったからか？ それでも、そんなことをする必要がないだろ。

「私だつて、悠さんのこと……」

そこまで言つて、未来先生は自分で口を手で押さえた。

「え？ 僕の……！」と？

そ、その続きは…？ 何を言おうとした…？

俺は気持ちを抑えることが出来なかつた。

「もしかして、僕のこと…」

まさか。まさか。まさか。

まさか…！

「好き…なんですか？」

こんなことを聞く奴は、この世で俺ぐらいなのだろ。だからと言つて、俺のこの口も止まる様子を見せない。なんせ、100%無理だと思っていたゲームを、クリアできそうなのだから。

「ち、ちがいます…」

俺のその問いかに、力なく答える未来先生。

もしかして、未来先生は美智子が俺のことを好きだと知っていて、自分は引いたというのか？

果歩の言っていた『未来と美智子の友情関係を壊したくないの』と
いう言葉。もつと深い意味があったのか？ 果歩は、未来先生と美
智子が俺を好きだということを知つていて、俺を一人から離そうと
したと考えても… つじつまが合いつ。

「悠さんのことなんかつ

未来先生が喋っている途中。俺は、またも無意識に未来先生を抱き
しめてしまった。

心が震えて、涙が出そつだつた。

いや、待て。何故、涙が出そつになるんだ？ 心が震えているんだ
？ もつと冷静になるんだ、俺！

「あ、すいませ…」

俺が未来先生をすつと離すと、未来先生は俯きながら、そつと俺の
服を引っ張つてきた。

「未来さん…？」

「なんで……私なんですか」

顔は見えないが、泣いているのだ。「声が震えている。

「なんで、美智子を選ばないんですか！」

「それは……」

言葉に詰まつた。どうして、美智子じゃないかと聞かれたら、現代文の先生じゃないから。と答えるしかない。そんな事を答えるほど俺は馬鹿じやないが、代わりの言葉が出てこないのも事実。

「ばか……」

未来先生は、我慢していた泣き声をいつきに放出したかのように泣き出した。

「いつこの場合はどうしたらいい？『恋愛完全マスター』にはなんと書いてあつた？」

…くそつー！大事なときになるとひとつ出でこない。

異性が泣いている場合は、そつと胸を貸すと良い。
弱っている人には、効き田抜群。

「これだ……！」

「未来さん……」

未来先生が泣き止むまで俺は、しつかりと抱きしめた。今日、何度も

彼女を抱擁したことだらう。しかし、その行為は嫌ではなかつた。むしろ、何か落ち着く。そのようなものを感じとれた。

「ままの時間がすぎればいいのにと、少し思つてしまつたほどだ。

「悠さん…」

10分ほど、俺の胸で泣いていた未来先生はやつと落ち着いたのか、声は多少震えながらも俺の名前を呼んだ。

俺は再び未来先生を離す。

「はい」

これで未来先生は俺のものだ。

そう考へた俺が馬鹿だった。

「もう…私に会いつちやダメです

「え?」

「私は、美智子を裏切れません」

そう呟いた未来先生の眼差しは、俺の心にまで響いた。これは、本気で言つてゐるのだと。考へた末の結果なのだと。

「俺は…諦め切れません」

これは心から出た言葉だ。諦めきれない。ここまでゲームは進んだのだ。行くところまで行くと決めたはずだろ？

「悠さん…」

俺の名前を悲しそうな声で呼ぶ未来先生の顔を、俺は見ることが出来なかつた。今、見てしまつたら、諦めてしまつて怖かつたからだ。

「俺は、貴方が好きなんです」

「でも…私は…」

「…」

「美智子さんのことは…」

どうでもいい、なんてこと言えるはずがない。でも、俺には未来先生が必要なんだ。

重い沈黙が、俺達の間を駆け抜けた。

「考えさせてください…」

そういうと、未来先生はおもむろにベンチから立ち上がり、その場から去つていった。

「未来さん…」

俺が呼びかけるが、止まる様子はない。どうやら、また泣いているようだ。手で、涙をぬぐっている。そんな彼女を抱きしめてあげたい。未来先生の涙なんか見たくない……。

「俺……好きだから！」

そう思つ、俺の心は……何かの病気にかかってしまったようだった。

#17 優しい人なの

次の日の朝、俺はいつものように学校へと登校した。龍之介と喋り、昨晩出来なかつた勉強をする。

唯一、違つといえど、未来先生の顔を見ることが出来なくなつただけだ。

なぜだらうか。なんか、こう心がきしむ音がする。

「何、あつた？」

昼休み、俺の前の席に座つてゐる龍之介は、パンツといつも読んでいる本を閉じ、俺に質問をしてきた。

「いや、昨日、未来先生とや…」

俺は一通り、黙つて聞いてゐる龍之介に、昨日の全てを打ち明けた。美智子の気持ちに気付いたこと、黒歩に言われたこと、そして俺が告白したこと。

龍之介に言つたからといって、何か変わるわけではないが、どうしてか口が勝手に話し始めていた。

その途中、いきなり聞き覚えのある声が、俺の耳に入つてきた。

「はーい！ 朝、言ひのを忘れていたけど、席替えをするから、みんなこのクジに名前書いてねー！」

未来先生のその言葉に、教室中にビヨメキが起こった。それもそうだろう。俺達は去年、一度も席替えという行事を行っていないからだ。

まあ、人間はどうやらそういう行事が好きらしくて、ビヨメキもそのつけ雑談に変わり、「どこに書く?」とか聞こえてくる。

俺と龍之介は、そういう行事には全くの無関心だったからであろう。

次の日の朝、最悪な出来事は起きた。

「あ…まじですか」

朝登校してきて教室に入ると、黒板には席が表記された紙が張られていた。

「本当」

いつの間にか後ろに居た龍之介に、ボソッと最後の一撃を食らわされてしまった。

「…教卓の前って」

神様、これは何かの運命なのでしょうか?

「後ろ」

そつ眩きながら、龍之介は自分の席を指差した。そこは、真ん中の前から一番目の席。つまり、俺の後ろ。

「運命かな

俺がぼそっと呟くと、龍之介に冷たい目で見られたなんてことは言えない。

ため息をつきながらも、自分の席について鞄から筆箱を取り出し、チャイムが鳴るのを待つた。

「皆、席についているかな？」

チャイムとほぼ同時に、この教室のドアが開き、担任である未来先生が朝の連絡をするために、教室に入ってきた。

「よし、席についているね！」

みんなの顔をチラッと見ると、未来先生はいつもより出席を撮り始めた。

それにして、目の前にいる未来先生の姿を俺は見られずに居る。

「小泉 龍之介君」

「はい」

やつぱり、あんなことがあったのだから、俺の心が恥ずかしがつているのか？

「紺野 大将君」

いやいや、待て待て。何故、恥ずかしがる必要がある？ 相手は俺

だと分かっていないのだし、俺だつて未来先生をゲーム対象としてしか見ていないはずだ…。

「大将君？」

「そうだよな…？」

「だ・い・す・け・君！」

「はいっ！－」

知らぬ間に、俺の名前が呼ばれていたようだ。教室内の数名がクスクスと笑っているのが聞こえる。

それよりも俺が恥ずかしかったのは、未来先生の顔が目の前にあつたことだ。

「大丈夫？」

「は、はい…」

俺は再びうつむいてしまった。日曜日は全く逆の立場だつたのに。

それにして、この先生は日曜日のことがなかつたかのように、いつもと変わらない笑顔と、口調でみんなと話している。

あんなことがあつたんだ。

少しくらい同様しているかな、つて思った俺が馬鹿だつたのか？

「あ、そうだ

全員の名前を呼び終え、連絡事項も済ませた先生が、ボソッと言葉を漏らした。

「えっと、大将君準備室に来てくれるかな?」

「は、はあ…」

先生のお願いを断るわけにもいかず、俺は曖昧な返事をしておいた。何があるのだろ。未来先生が俺を呼び出すなんて、初めてのことだ。

まさか、ばれた? だから人気の少ない準備室に俺を呼んで、話すつもりなのか?

いや、もしバレているのなら、もう少し違う方法で俺に告げるだろう? 席も一番前にする理由が全くないし。先生がクジを作ったのだから、『まかしつくらでも利くはずだ。

俺は疑問に思いながらも、足を準備室へと向けた。

「失礼します」

俺はドアをトントンと一回叩き、未来先生が居るであろう準備室のドアを開けた。準備室は9畳ぐらいの大きさになっている。地球儀とか、電卓など、授業で使うよつた備品がたくさんある場所だ。

「えっと、何の用で?」

未来先生は、待つてましたといわんばかりの笑顔を俺に見せた。

ドキッ…。

つて、ちょっと待て。ドキッはおかしいだろ？

「じめんね、こんなところに呼び出しちゃって。一時限目が私の授業でしょう？ 今日は辞書が必要なんだけど、ちょっと一人じゃ持てなくて」

あはは、と笑いながらこっちにお尻を突き出すような格好で、奥のほうにあるダンボールを取りうつとしていた。

「…俺がやりますよ」

未来先生の隣まで行つて、ダンボールに手をかけた。

こんなところにあるものも、取れないのか。

「あ、ありがと…」

未来先生は、一步、二歩と俺から離れていった。

「どうしました？」

俺はダンボールを抱え、未来先生の顔を見た。

未来先生は、少し黙つた後そつと口を開いた。

「大将君ね、私の知り合いに似ているなって

その顔は、とても悲しそうな顔をしている。

「……」

俺は黙ってしまった。もしかして、これはピンチといつやつではないのか？

「丁寧でいい人なんだけど、どこかぶっきら棒で、なんだか冷たい人なの」

それは、俺のことだろう。これは直感だ。ただ、なんとなくそう思つた。

「けど……」

未来先生は下を向いてしまつた。

「優しい人なの……」

「未来……先生」

俺は、未来先生を抱きしめそうになつた。この俺の手に乗つている強大なダンボールさえなければ、多分手を差し出していただろう。なんだ、この気持ち。

「……」、「ごめんね！」

未来先生は、いつもの口調に戻つた。

「ほんな話、あるつもつじゅなかつたんだけどなあ」

あはは、と笑いながら俺の顔を悲しそうな目で見た。重ねてこるのだらう。今の俺と…悠を。

「そ、それじゃあ、それを教室に持つて行つてねー！」

ありがとひ、と黙つて、未来先生は準備室から出て行つた。

無理していたんだな。心のどこかでは、動搖していたんだ。生徒の前では、心を抑えていたんだ…。

「未来…さん」

俺は、声に出して未来先生の名前を呼んだ。

無性に悲しくなり、俺はダンボールを持ち直して歩き出した。

俺は、何をしているのだろう。彼女をあんなに悩ましていいのか？
悲しませて、泣かせていいのか？

…皆、いいはずがないだろう。

俺の心が、初めてこのゲームに否定の意見を述べた。

「だけビ…」

俺は、ここにいたい。離れたくない。

前よりもずっと、俺のこの気持ちは強くなっていた。

「いのんなさい…」

未来先生に謝るかのように、俺の口は動いた。

#1-8 ありがとう、龍之介

「大将」

「ん、どうした?」

後ろの席に座っている龍之介が、俺の背中をちょんちょんと突つきながら、話しかけてきた。

いつも前の席に座っていた龍之介。俺の後ろに居ると何か違和感がある。

それにして、教室に帰ってきてからの俺はひどかった。簡単な問題も答えられない、数学の授業なのに、次の授業である生物のノートにメモをとつていたり。

とにかく散々な一日だ。

こんなことは、俺が生まられてから初めてかもしない。何もかもに集中が出来なくなっていた。

「大丈夫…？」

本当に心配そうに見る龍之介を、俺はナデナデをしてあげた。こんなことすると、女子どもに嫉妬されるだろうが、関係ない。

龍之介は無言で俺の顔を睨み付けてきた。相当嫌だったのだろう。

「大丈夫。ありがと」

俺は出来るだけの笑みを、龍之介に返した。正直、ちゃんと笑えて
いる自信はない。

「今日へる？」

「どうして？」と問いたいところだが、この言い方的に龍之介の家のことだろう。果歩と親しい仲にいる恭平さんも居るし、ちょっと行ってみてもいいかもしね。

もしかしたら、何か聞けるかもしないから。

「うん。行かせてもいいかな？」

俺はそう答え、放課後となるチャイムを待つた。

「おかえりなさいませ、龍之介様。だ…悠様も、『』一緒に緒だったのですか」

「あ、今は大将でいいですよ」

俺は軽く頭を下げながら、そう返事をした。俺達を出迎えてくれたのは、スースをびしつと決めた恭平さんだった。

「今日は、お勉強をされにきたのですか？」

いつもとは違つて、敬語を話す恭平さん。

「お部屋へ案内させていただきまーす」

早く、俺達と普通に話したいのだから。恭平さんのせいかから、部屋に行こうと誘いがあった。もしかしたら、この前のことを聞いているのかかもしれない。

「お茶をお持ひますので、少々お待ちください」

やつぱり、恭平さんは龍之介の部屋のドアを閉めた。

「恭平さん、どうぞ執事をしてこらへ。」

「わからぬ」

「結構若このー。どうぞだらうね」

そんな話をしていると、ドアを叩く音が聞こえた。どうやら、恭平さんが帰ってきたようだ。

つて、早ツー、まだ一言しか話していないぞー！

「どうぞ」

龍之介がやつぱり、ドアは少し音を立てながら開いた。

「飲み物をお持ちいたしました」

「あつがとー」

飲み物を持ってきたのは、もちろん恭平さんだった。そのまま恭平さんは、龍之介の部屋に入り、無造作にお盆を置いて俺の近くまでやってきた。

「何があったんや？」

「何…って」

いきなりの質問に、俺は龍之介の目を見て助けを求めてしまった。

「恭平」

龍之介のやの一言で、恭平さんは俺から離れる。

「黒歩ちゃんから聞いた。未来ちゃんと、美智子ちゃんに向かあつたそりやな」

どうやら恭平さんも、詳しいことまでは聞いていないようだ。

「…まー」

俺は正直に全てのこと話を、躊躇つてしまつた。だって俺はどうとう未来先生に告白したのだ。

そのうち知るであろうが、今言つのはなぜか…。その忍びない。なんというのだろうか、恥ずかしい？ いやいや、違う。なにか後ろめたいものがあるのだろう。

「何があつたんや？」

今度はゆっくりと、俺に語り始めた。

「それは…」

「それは?」

「……」

俺は困惑していた。自分のこの気持ちに。

なぜ言えない?

後ろめたいものなんて本当にあるのか? 未来先生を騙す事を恭平さんは知っているではないか。それ以上後ろめたいものなど、ないだろう?

「その…」

なのに、俺は言えなかつた。ただ『告白しました』って言えばいいのに。

「…少しは、果歩から聞いたんやけどな」

さすがの俺も、聞いてたんかい! と、関西弁突っ込む気にもなれなかつた。

「ど、どいままで?」

聞きたくない質問ではあった。でも、聞かなくてはいけない質問だ

つた。

「悠…大将が、美智子に告白されて、未来ちゃん…」

龍之介の前だからだらうつか、恭平さんはそのあとを言ひ出しましてなかつた。

「…、瓶田したことですか？」

「ああ」

やつぱり知つていたのか。未来先生は多分、果歩に相談をしたのだる。

「何か言つていましたか？」

俺のその質問に、恭平さんは下を向いてしまつた。どうやら、いい報告ではなさそうだ。

「 もう会つなど…」

わざわざから俺が質問ばかりしているのだが、恭平さんの表情や仕草で答えが分かつてしまつ。昔から、親のそういうところにばかりを、気をつけていたからだらうつか。人の表情や、仕草に敏感になつてしまつたようだ。

「けど、俺は…諦め切れません」

俺のその言葉に、恭平さんの顔は驚きに満ちていた。

「大将…まさか？」

まさか？

「な、何ですか？」

「…いや、なんもあらへんよ。俺は、もつこれ以上言ひ」ともないし、大将の邪魔をするつもりもあらへん。止めたいけど、お前はとまらへんのやう?」

「…はい」

「わづこづ」とや。後は、大将の腕次第やな

俺は一度だけ頷いた。

「龍之介も、大将が無理しそうになつたら、止めたらなあかんで?
なんたつて、親友なんやからな」

龍之介は、コクンと一回俺と同様縦に首を振つた。

「んじゃ、俺は仕事に戻るわ。また何かあつたら、相談してもええ
からな?」

恭平さんは、いつもの優しい笑顔で、俺にそつと語ってくれた。

「あつがとうござります…」

俺は涙が出そうになつた。嫌なことがあつたとかそういうことじやない。嬉しかつたのだ。恭平さんがそう言つてくれたことも。龍之

介が助けてくれるところとも。

本当に、この人たちに出来て俺はよかったです。

「龍之介」

恭平さんが部屋から出て行って数分、俺達は沈黙の中にいた。

「何?」

「俺、未来先生に電話してくる」

「やつ」

「今日は、本当にありがとう」

「……」

「本当に……ありがとうございます」

俺は無言で本を読み続けている龍之介に背を向けて、ドアに手をかけた。

「大将」

「ん?」

俺が龍之介の声に反応して振り返ると、一いちをじつと見ていた。

「……無理しないで」

「あ

ありがとう、龍之介。

俺はドアをゆっくりと開き、歩き始めた。

#1-9 貴方が好きです

家に帰ると、俺は自分の部屋へと足を進ませた。

今から俺には、やるべきことがある。やらなければならぬことがある。

部屋に着くと、俺は荷物を適当に置き、携帯をポケットから出した。

「……」

何を言えばいいのだろうか？　いや、言ひことは決まっているのだが…。付合ってほしいこと、美智子のこと、未来先生のこと。

他にもたくさん話したいことはあるが、何から話を切り出せばいい？

昨日、先生は考えさせて、と言った。もちろん、昨日の今日で未来先生の意思が固まっているとは思えない。

… ひとつときさせ、どうすればいい？

俺は無意識に、いつも助けてもらっている『恋愛完全マスター』に手を伸ばした。

「えっと、異性に電話がしてることを…」

俺はボソボソと呟きながら、関連がありそうな言葉を捜した。ペー
ジをペラペラとめくつてこくと、そこには『雰囲気が悪くなつた異

性との電話の対処法!』という文字を見つけた。

そこには、最初は明るめに話をし、少し時間がたつてからその話題に持っていくとよい。と書かれていた。

明るい…って、俺はそんなキャラなのだろうか？

そんなことを考えながら、文章を読んだりと再び注目すべきものを見つけた。

どうしても駄目ならば、その異性の友達から当たっていくか、『原因』を対処したほうがいい。

…原因？

俺達の仲での一番の原因…。それは俺の告白か？ 原因を対処したほうがいいということは、告白を取り消して、今までどおりの関係を保てということなのだろうか。いや、いまさら引いたところで、俺と未来先生の関係が何か変わるとは到底思えない。

よく考えてみる、俺達のこの状況作り出した原因を。

…み、美智子？ 美智子なのか？

そう考えてみれば、そののかもしれない。美智子が俺を好きでなければ、もしかしたら今頃俺と未来先生は付き合えていたのではないか？ 未来先生は、美智子に遠慮をしているみたいだし。

…まだ、俺のこと好きとは言つてくれていなが。

それよりも、この状況を作り出した一番の原因はやはり、美智子ではないのだろうか。

なにせ、この本に書いてある通り、美智子から対処していくべきなのだろう。……いや、未来先生に電話をして、もう一度俺の気持ちを伝えるべきなのだろう……か。

どうすればいいんだよ……。

数分後俺は、携帯をパカッと開き、迷いを心のどこかで捨てて、電話をかけた。

「もしもし……俺ですけど」

「ゆ、悠さ……？」

「今、会えますか？」

そう言つた後俺が時間を見ると、もう一時をすぎていた。今から電車で会つに行けば、ここからなりませぬじ時間はかかるなしだろう。

「……会えない」と、言つたはずです

「家に行きますから

電話の向ひから聞こえてくる声は、どこか悲しげで、少し震えていた気がした。

「……」

「行きませか」

俺はそうじつと、彼女の返事を待たずに、携帯から耳を離し電話を切ると、ドアのまづからノック音が聞こえてきた。

「はー」

やうこいつと、ドアの向いの側からは、キヨ爺の声が聞こえた。

「キヨ爺？ 入ってもーこよ」

「失礼します」

キヨ爺はまづへつとドアを開き、一步部屋の中へ入ってきた。

「どうしたの？」

「…今から、どうかくお出かけでしょつか？」

「ああ」

俺がそうじつと、キヨ爺は一ノタビとつもの笑顔を見させてくれた。どうやら、時間からして俺にじ飯の準備が出来たことを知らせに来たようだ。

「お風呂をつけてください」

「…ああ」

せつかく作つてもうったのに、「めんなキヨ爺。でも、俺は…

ドアを開けて待つてくれて居るキ田織の横を通りてこべ。

「頑張ってください」

「……え？」

キ田織の言葉に、俺は戻心した。まさか、そんな言葉が来るとは思つていなかつたから。

「一「うう」と笑つキ田織の顔を見ると、自然と笑みがこぼれた。

「うう。こつてくわ」

キ田織にせ、俺の心が読まれているのではないか。

そんなことを思いながら、足を進ませた。

「……夜遅くに、申し訳ございません」

「……」

田の前に立てる彼女は、俯いて居る。今、どんな表情をして居るのだろつか。そりや、あの時覚えないといつた手前、本当に余計にいいのだから。

「どうしても、言いたいことがあって」

俺のその言葉に、俯いていた彼女の顔はすっとあがった。

「……どうも」

え、どうぞって、家に入れって事なのだらうか？　彼女は家の奥へとどんどん進んでいく。

考えてみれば、この部屋に入るのも一回目だ。

「お茶入れますので、少し待っていてください」

彼女は、俺を部屋の奥へと案内すると、キッチンへと歩き歩いてしまった。

さて、これから何を話そうか。

美智子について？　それとも未来先生について？

思い切って電話したのはいいものの、どうちに電話するか考えるばかりで、何を話すか決めていなかつた。本当に俺つて、計画性がないよな。

「緑茶がいいですか？　烏龍茶がいいですか？」

キッキンのほうから聞こえてくる、彼女の声に俺は『緑茶で』といふたえた。

「うごりのむ、ちょっと新鮮でいいかもしねない。」

「はい、どうぞ」

彼女は持つてきた「トップ」を、俺の前にある机の上に置き、「よこしょ」と、声を出しながらそこに座った。

「よ、よこしょ……」

「え、聞かなかつたことにしてくれださー！」

彼女は恥ずかしそうに顔を手で隠し、お茶に手をかけた。

「熱つー！」

自分が今さつき入れてきたことを忘れていたのだろうか？ やはり彼女は、相当のドジっ子だ。そこがなんとも可愛い…なんつって。

「大丈夫ですか？」

「は、はひ…」

下を火傷したのだろうか？ 上手く喋れていない。

「俺、その…やつぱり、未来さんのことが好きなんですね」

「……」

俺のその言葉に、黙りこくつてしまつた。こんなことを、初めに話すつもりはなかつたんだけどな。

「……」

そして、俺もそのあの言葉が出てこない。見切り発車もいっこだ。

：未来さんは美智子さんに遠慮をしているとでも言つのか？　未来先生は、まだ俺のこと好きとは一言も言つていなし、美智子に遠慮をしているとも言つていなし。そうであつてほしいという、俺のただの空想だ。

「私……」

田の前に立てる彼女は、俺より先に言葉を放った。

「貴方が好きです」

「……」

俺は彼女のその言葉に黙ってしまった。どうやつて答えていいのか分からなかつたからじゃない。ただ、驚いたのだ。

いきなり、彼女の口からそんな言葉が聞けるとは思つていなかつたから。

「あ……」

やつと俺の口から出た言葉は、間の抜けた言葉だった。

「でも、美智子を裏切ること出来ないんです」

力強くいった彼女：

未来先生

の瞳は、俺の瞳を捕らえていた。

#1-9 貴方が好きです（後書き）

感想等いただけると、非常に作者は嬉しいです。
なにとぞ、よろしくおねがいします。

#20 心が跳ねた（前書き）

友人より、恋人。

恋人より、友人。

貴方は、どちらを選びますか？

#20 心が跳ねた

「そ、そんな……」

彼女の告白を聞いた俺は、黙つて入れなかつた。

「好きな人同士、付き合つのが普通でしょうー！」

いつの間にか怒鳴つてしまつていた。

「『めんなさい』

未来先生は、今にも泣きそうな顔をしている。相当、考えた末の結果なのだろう。…多分。学校で、何の関係もない俺に素性を少し明かしてしまつほど、動搖していたのだ。

「……」

もはや、どう答えればいいのか分からなくなつっていた。

美智子を裏切れない。今ならば、そんな未来先生の気持ちが痛いほど分かるからだ。この状況を例えられる友人が、俺にも出来たから。中学校までの俺なら、未来先生の心境を分かりはしなかつただろう。

…だけど、俺のその考えに心を除く全てがついて来られなかつた。

「嫌だ…」

涙がこぼれそうなほど、胸が痛い。

「未来…好きなんだ」

好きなんだ…。

思わず呼び捨てにしてしまった。思わず呟いてしまっていた。

「……」で、俺が引いたら、未来はもう会ってくれない…」

「……」

好きといつ言葉を。

「会えないなんて、考えられない」

そう言つた瞬間、俺の右目から涙がポロッと零れたのを感じ取れた。

「…え」

それに一番驚いたのは、俺だった。

「何で…」

無意識に俺の放つ言葉に、未来は同様している。

「涙が…」

止まらなかつた。やむことはなかつた。

俺の心のダムが、溢れてきた…。

「出でてきたんだ…」

『惑つ俺に、暖かいものが覆いかぶさつた。

「え…」

「うひ、うひ…」

そして、俺の頭上から聞こえてきたのは、未来の泣き声だった。

「み…く」

未来は、俺を好きだといった。それだけでも驚くことなのに、そのまま未来は俺を抱きしめている。

そんな未来が…愛おしい。

心が跳ねた。

な……んだ?

これは何だ……?

コレハナンダ……?

『恋は、突如やつてくるものです。気が付いたとおりでは、もつ心は動かされているものですよ』

キヨ爺の言葉が、リフレインしてきた。

「心……動く?

」「…」

いまだ聞こえてくる未来の泣き声。

ドクンッ。

「な……んで」

俺はそのまま呟きながら、手を自分の皿に持つていく。

……やはり、濡れている。確かに、涙を流している。

そして、その手を次は胸に持っていく。

…やはり、震えている。確かに、いつもより激しい。

最後に俺の手は、彼女の頬へと動いた。

…やはり、愛おしい。確かに、俺は

そのまま俺は、涙で顔がしわくちゃになつていてる未来と口付けを交わした。

俺は未来を心から好きになつていてる。

「…うう、うう…」

目の前で泣いてる彼女をギュッと抱き寄せた。

「辛いよな…辛いんだよな…」「めんな…」

そう呟きながら俺は、彼女と一緒に泣いた。ずっとずっと、俺は抱きしめていた。一緒に居たかったから。未来は俺の腕の中でそのまま寝ていったけれども。

「未来」

いつの間にか、空は明るくなっていた。ああ、初めてだな。親に黙つて、自宅以外で夜を過ごすなんて。

そんな事を考えていると、俺の腕の中にいる未来がもぞもぞと動き出した。

「ん…」

「おはよ」

俺がそういうと、未来は驚いた表情で俺の顔を見た。

「な、な、何で悠さんが！？　え、あ…そっか」

自分で言っているうちに納得したらしい。それでも、未来の顔は真っ赤になっているが。

「学校は大丈夫？　何時から行けばいいの？」

現在の時刻は、朝の5時すぎだ。目の前の時計で確認したから間違いない。

「8時に集合だから… 7時半に出れば間に合つの」

まだ、眠気が完璧に取れていないので、ウトウトしている表情を見せていて。こんな状況で寝ていたんだ。すつきりと眠気が取れていのまづがどうかしている。

「ベッドで寝てくる？」

「ちよっとだけ…」

そつぱりて、未来は自分で立ちベッドへと向かっていった。

…わい、どうよつか。

「のまおじ」で過ごしてしまえば、確實に学校には遅れてしまう。だからと誓つて、田覓ましすらかけていないだろう、彼女を放つていくのも気が引ける。これで彼女が学校に遅刻したら、俺のせいだ。

俺はすぐっと立ち上がって、彼女の元へと歩み寄つていった。

ベッドには、寝息を立てながら寝ている未来がいた。

「寝るの早いな…」

俺はそう呟きながら、彼女の頬を撫でた。

つて、こんな事をしている場合じゃないな。

俺はベッド脇にある田覓まし時計に手を伸ばして、6時半ぐらいにセツトし、『家の鍵はポストの中』といつメモを残したら、未来の家を後にした。

学校に遅刻してしまったら、俺が大将だつてことがバレてしまう可能性が出てくる。ちよっとでも、そういう危険なことは回避したいからな。

「ぱーぱー…」

俺はドアを静かに閉めて、鍵をポストの中に入れておいた。

道を歩く。

空はまだ思ったよりも薄暗くて…

未来から離れた俺の体は、もう未来の温もりを求めていた。

#20 心が跳ねた（後書き）

昨日、私の師匠（僕の思い込みですが）である五十崎由記様が本を出版なされました。

『うしご。』といつ小説です。

多分、小説家になろうともお知らせがあると思います。
でもーー！

それよりも先に言つておきたかっただんです！
つて、先に言つちゃってよかつたのかな？駄目だつたら教えてください

とりあえず、詳しひは私のblog（http://polaza.rakuten.co.jp/mlq84s/）か小説家になろう様か五十崎由紀さんのblog（http://www.ikazaki.com/?NW=3tCgnYtFcVXTDZ）をご覧になつてください。

ちなみに、表紙画像JPGで載せておきますね。

<http://ikazaki.up.seesaa.net/iimage/350.jpg>

携帯からだと見れないかもしません。

#21 初恋だ

「Xはここに移行して…」

今は数学の時間。俺は成績を落とすまいと、眠さと戦いながら黒板を見つめていた。

「それで、ここにXを移行するだろ?」

そこは、せっつきも説明しているよ…先生。

そんな事を思いながら、俺は指を必死に動かす。

今日の朝、未来先生とはエレベーターで顔をあわせた。どうやら俺がセットした目覚まし時計で起きられたらしい。いつもより、テンションは下がっていたけど。

かといつ俺は、未来先生と違つて一睡もしていない。

俺は未来先生の家から自宅に帰ると、キヨ爺は5時半、「ひだ」とつのにもう起きていてせつせと仕事をしていった。

「お坊ちゃん、おかれいませ」

いつも輝かしい笑顔が、俺の瞳を捕らえる。

「おはよー」

「…寝ていなのですか？」

キヨ爺は手を止め、俺のそばへと近寄ってきた。

「ああ、色々とあって…」

それにしても眠いと思いながら、皿を「ンシゴシ」する。すると、そんな俺を見かねてか、キヨ爺は冷蔵庫からあるものを取り出した。

「これを飲みますと、一日元気で歸れます」

「…ありがと」

あきらかに変な色をした飲み物だったが、あのキヨ爺が勧めた飲み物だ。かなり効くのだろう。

俺はその飲み物の蓋を開け、一気に飲み干す。

「うえ…」

味は、見た目どおり不味かつた。しかし、目はとこうと…

「あれ、スッキリ…」

スッキリしている。

その表所を見て、キヨ爺は仕事へと再び就いた。俺は自室へと足を進め、制服を手に取る。今は朝6時。学校に行くには早すぎる時間だ。かといって、今から寝てしまつたらキヨ爺から貰つたジュースが台無しになつてしまう。

する」ことが無い俺は、結局机の前につき、勉強をし始めた。

そして時間はすぎて、今は授業2時間目だ。あのキヨ爺から貰つたジュースの効き目も、朝よりかはかなり薄れてきた感じがする。

なんとか、数学の時間を耐え抜いた俺を待ち受けていたのは、3時間目の現代文だ。

「…眠い」

俺がそう呟くと、後ろから「眠い?」という声が聞こえてきた。その声の持ち主はもちろん龍之介だ。

「昨日、色々あって…一睡もしていらないんだ」

「…大変」

「そう、大変なんだ」

「未来先生？」

「…「うん。 龍之介だから言うけど」

俺の言葉の途中で、3時限目が始まるチャイムが鳴った。

「俺」

そして、ガラガラと音を立て、未来先生が教室へと入ってきた。

「未来先生を好きになつた」

恥ずかしさを紛らわすために、生徒が椅子を引く音にまぎれて、俺は龍之介に言った。龍之介は聞こえていたのだろう。目がいつも以上に開いている。

「初恋だ」

俺は軽く笑いながらそう言って、前を向いた。

「礼！」

学級委員長の声で、みんなは挨拶をする。俺は頭を軽く下げながら、チラッと未来先生の顔を覗いた。

教卓の前の席が、今まで嫌だと思っていたのに、未来先生が好きだと自覚してからは、なぜか嬉しく感じる。

未来先生がすぐそこに。

手を伸ばせばまばたく距離[。]

眠気にやられたのか、俺は手を動かさず、ただ…未来先生を見ていた。田^だが離せなくなっていた。

あの温もりが…一段と恋しくなった。

「えっと、今日の休みは…」

未来先生は教室をぐるりと見渡してから「欠席はなし」と呟きながら、出席表に書き込む。

「じゃあ、教科書出して…」

彼女の声が聞こえた。心が安らぐ…。

心が…やすい…ぐ。

この間にか俺は、机に突つ伏していた。

「こら、大将君」

え？ 未来？

頭に何かが当たる感触で、俺は目が覚めた。

「あ…く？」

無意識に声が出た。小さな声。それでも、未来先生に聞こえるには十分だった。

「え？」

「あ、いや！」

もののコソマ数秒で俺は頭をフル回転にして、現在状況を理解していようとしていた。

そうだ、今は…授業中だ。

「起きた？」

未来先生の顔が目の前にある。心が騒ぎ出すのが分かつた。

「え、あ…はい」

落ち着け俺。ここで焦つてどうする。

「勉強もほどほどにね？」あまり無理すると、体に悪いから

優しい笑顔で俺の顔を覗いてきた。

ああ、やつぱり可愛い。

「す、すみません」

俺は顔を伏せた。あまり、未来先生には顔を見られたくない。さすがに、じっくり見られるバレてしまうそうだ。

「じゃあ、続けるね」

そして、再び未来先生は教科書を読み始めた。

俺が、授業中に寝てしまつなど、ありえないことだった。成績は、テストが8割、毎日の授業態度、宿題の提出率が残り2割で成り立つている。

少しでも点数を下げたくない俺は、授業中はどんなにつまらなくても、真剣に聞いている振りをしてきた。

なのに、現代文の時間に寝てしまつとは…なんという不覚。

そんなことを思いながら、ため息をつくと授業終了を知らせるチャイムが鳴り響いた。

「起立、礼！」

再び、委員長の声で授業は終わりを迎えた。

そのとき、目の前にいる彼女が俺に、「大将君、昼休みに弁当を持参

して、私のところに「来なさい」と言つて、教室から去つていった。

…まさか、さつき顔を覗かれたときにはばれたか？いや、まさかな。

もしかして、授業中に寝ていたから怒られるとか！？

色々と妄想を膨らませながら、4時限目の授業が始まった。

そして、昼休み。

俺は弁当を片手に、1年の担任室へと向かった。

「失礼します」

コンコンビニアをノックしてから、俺は担任室へと入った。

「あ、大将君」

未来先生は男の先生と何やら楽しそうに話していたが、振り返つて笑みを浮かべこぼれを見た。

…何、他の男と、つて…。なんだ、何かが爆発しそうだつたぞ。

「では、行きましょ」

未来先生は、俺に近寄つてきてそつ語つた。俺は返事をして、彼女の後ろにつく。

え？ 1階？

疑問に思いながら、足を運ぶと、思わぬところに着いた。

「ほ、保健室？」

「やうだよ

未来先生ははじけ隠し持つていたのか分からない、弁当を取り出して座り始めた。

こんなところで、食事をしようつて言つのか？

「早く、おいで」

この展開は、なにやら怪しい雰囲気を向える。いや、未来先生に限つて生徒とそんなことをするよつには思えないのだが。

俺はしづしづ、保健室の中央に置いてある机の上に弁当箱を置いて、食事をし始めた。

「それは、誰が作つてゐるの？」

ご飯中、田の前にいる彼女は色々と質問を投げかけてくる。なぜだ、なぜ俺と同じ飯を食べようと思つたのだ？

「意味不明だ。

本当にバレたのか？ それとも、未来先生は生徒に手を出す女だったのか？

……。

「えっと、どうして僕をここに……？」

俺はじ飯を食べ終えたときに、未来先生に話しかけた。

「だつて大将君、眠たいのでしょうか？」

「はあ、そうですが……」

俺がそういうと、おもむろに未来先生は立ち上がった。そして、ベッドが置いてある場所へと足を運ぶ。

「おいで」

「ほり、早く」

未来先生の言葉に何も言えず、俺はただ従つた。

「ほり、横になつて」

おこおこ、これじゃ本当に寝じて展開になってしまつや。

「じゃあ、田を瞑つて」

「俺は言われたとおり、田を瞑る。いいのか？ こんなことをして。

「40分後に、起しに来るから」

「…は？」

先生のあまりの言葉に、俺は間抜けな言葉がこぼれた。

「寝ていていいよ。大将君も何かあったのでしょうか？ 私も、本當は今日どつとも歸る」

あはは、と笑いながら俺にそう言つてきた。

「あ、はは…」

何も言えず、俺は苦笑。だつて、そうぢりう。少しでも変なことを期待してしまつた。そんなことがあるはずもないのに。

先生は隣のベッドに横になると、田を瞑り始めた。

「え？ え？」

俺は「惑つて、何がなんだか分からぬ声を漏らす。

「保健の先生に、起きてもらひよひよ頼んでおいたから、寝ても

大丈夫だよ

今から40分後といえば、授業が始まる10分前。

うちの学校は、昼休みが1時間あるのだ。授業はきつちり、休みはがつちり。今の校長先生のモットーらしい。

「大将君にこの前、助けてもらつたからね。これぐらいの恩は返さないと」

向ひつ側のベッドで目を瞑つている彼女は、ふと喋りだした。

「あ、ありがとうございます」

で、いいのか？

「…前みたいに、愚痴つてもいいかな？」

「はあ…」

俺は返答に迷い、肯定と取れる曖昧な返事をする。

「もう、逃げられないの。けど、心の準備が出来ていないときって、どうすればいいかな」

「……」

当の本人に、相談していると知つたら、彼女はどんな気持ちになるのだろうか。

「あ、」とめぐね。『んな』と書つたりやつて

スーツと彼女の田からは涙が流れ落ちた。

「……」

俺が黙つたのは、返答に困つたからじゃない。ただ、現実を田の当たりしたからだ。

そう、未来先生が言つたよつにもう逃げられない。

「未来先生……？」

「すう……すう……」

青春期の男の前で、こんな無防備に寝る女は彼女ぐらいだろう。

……信用されすぎるのも、なんか辛いな。

小さな声で俺は笑つた後、保健室を後にした。

逃げることは、もつしない。現実から田をそらさない。

俺は未来と一緒に居たいから

#22 大好きだよ

「え、どうしたんです？」

いきなりの訪問に、ドア越しにいる彼女は戸惑つているようだ。

「少し、話せませんか？」

俺のその問いに、口を閉じてしまつたドアの向こうにいる人物は、肯定の意味をこめてなのか、ドアをゆっくりと開けてくれた。

決着をつけよ。

俺は、今日家に帰つてからそう心に決めた。もう、未来先生の泣いている姿は見たくない。だから、俺が言うしかないんだ。

全てがうまくいくように。

「…どうしました？」

俺はリビングらしきところにつくと、座布団の上に正座をした。そして、そのまま地面に手を付き、頭を下げる。

「未来さんは、あなたが大好きなんです」

「いきなり」とな事を言われるとは思つていなかつたのだろう。俺の言葉にびっくりする彼女は、口をぱくぱくしてこた。

「え、え？」

戸惑いながら、頭をあげてへだせることいつ彼女のいつひとを聞かず、俺は頭を下げたままで居た。

「未来さんは、泣きながら俺に言つきました」

全て本物の「こと」を言おひ。そつすれば、彼女…美智子さんだつて分かつてくれるはず。

「私は、別に怒つてなんか…」

「じゃあ、なんでギクシャクとしているんですか？」

未来先生と、美智子の情報は恭平さんから伝わってきてこる。とうか、俺がただ問いただしただけなんだけどね。

「や、それは」

「俺を恨むのは勝手です。でも、未来さんを妬むのは違うんじやないですか？」

ちょっと棘がある言葉だが、今の俺は気ことにめることが出来なかつた。ただ、心から溢れ出でてくる言葉を、口から放出しているだけ。

「でも、あの時未来は悠さんに振られて泣いている私を放つて、貴方に会いに行っていたんですよ？ ちょっと、言いたいことがあるから行ってくるって…。なのに、帰つたら、未来は『告白、されちゃった…』って言つたんだよ…？」 私への当て付けなの？ なんで、未来ばっかりいい思いするの？ いつもいつも未来ばっかり

…「

あの時は俺が未来先生に、あの公園で告白したときだろ？ それについても、美智子は勘違いをしそぎだ。未来先生の言いたいことは、俺に対する『好き』という言葉じゃなくて、『なんで美智子を振つたのか』という質問である」と。そして、未来先生は美智子に隠し事が出来なかつたのだろう。だから、言つてしまつただけなんだと思つ。

「未来さんは、俺が呼んだとき、なんて言つたと思ひますか？」

「……」

「なんで、美智子を傷つけたんですか？」 つて

「え…」

美智子の小さな声が、ふと漏れた。

「私は、美智子を裏切れません。つて、言つたんですよ？」

「あ…」

「俺は、諦め切れませんでした。正直、本当に未来さんのことが好きなんです」

「…そんなこと」

俺は美智子の言葉を遮りて話し続ける。

「でも、未来さんは俺よりも、美智子さんを選ぎました」

「え？」

「もう会わなって言われちゃいました…」

俺は苦笑いしながら、美智子に田をむける。今日会ったことは、多分まだ聞かされていないだろ？

「でも…」

戸惑いの表情を見せる美智子。

「でも…じゃない。未来さんと一緒に居る美智子さんなら、未来さんのことを一番にわかつてやれるはずだ。未来さんが貴方達を一番に考へないとでも、思っていますか？ 本当に応援していかつたと思いますか？」

俺の問いに、美智子は俯いてしまっている。

「本当は、分かっているんですね？ でも、心がうまく理性についてこないんですよね」

今なら少し分かる、美智子の気持ちが。

「…悠也、んが」

美智子は震える声で、俺の名前を呼んだ。

「ただ、未来と付き合いた、いだけなんじゃ、ないんですか？」

「…実際のところは、付き合いたいです。もひとつ、一緒に居たいです」

「ぶつちやけすぎですよ」

美智子は軽く笑みを見せてくれた。

「でも…」

そして、俺は決めた。決着を付けにきた。

「でも、未来さんのために俺は」

そして、じこまでやつてきた。もう、未来先生の泣いている姿は見たくない。

「もう、会わないとこつかと思つてます」

俺は、心に決着をつけた。恋は直面とこづが、まさしく俺がその状態だらう。

現代文の成績のことがあるが、恭平さんの言つよつて、今から死に物狂いで頑張れば、点数をあげられるかもしね。もしかしたら、奇跡が起こるかもしね。

そんな決意を、俺は決めた。

「え？」

「だから、どうかもう一度、あのたの…しそうな、、三人でいて、
くだ…や」

俺がそういうながら立つたときだった、ふらつと足場が抜け…いや、
実際には俺の足がしつかりと立たなかつたからだ。

俺は、美智子の家の床に、崩れ落ちた。

「あ…れ？」

体が思うように動かない。それに頭もなんか痛いよつな気がする。
目の焦点も定まっていない。

「ど、なつて…るんだ？」

「え、悠さん！？」

必死に俺を搔すり起しやつと美智子さんの顔が、目の前にあつた。

「悠さん！ 大丈夫ですか？」

呼ばれているのに、声が出せない。美智子さんは、机の上に置いて
ある携帯を手に取り、誰かに電話をかけているようだ。

「未来っ！ 悠さんが！ ビリショ！ たおれひやつて…あんた彼

氏でしょー。なんとかしなやこよー。」

ああ、未来先生か…。

そつ認識したとき、俺の意識はどうかくと行ってしまっていた。

「悠…さん

田の前には、俺が待ち望んでいたあの顔がそこにあった。

「み…へ」

俺はかすかに口を動かしながら、その名前を呼んだ。

「寝なれすぎ…だそうですよ」

そういえば、ここ何日寝ていなかつただろうか。昨日は未来先生の家で徹夜したし、その前は心配になつて寝られなかつた…。

「すみません…」

とつあえず、謝つておこづ。それにしても、ここは何処なんだ。薬品のにおい、天井に白い網掛け模様。真っ先に思いつくのは、診療

所だ。そこまで大きい病院の雰囲気でもないし。

「どれだけ心配したと思っているんですか…」

あきれた顔で、俺の顔を見つめてくる。

「でも、これからは…」

未来先生の言葉は、そこで止まった。何が言いたかったのだろうか。

「あの、悠也ん？」

「はい？」

未来先生は、俺のおでこに手を乗せ、「コッ」と笑った。

「私達、付き合つちやいまじょつか」

…え？

「付き…つて？」

「その、恋人にならうって言つているんですね…」

俺の中の時間が一時停止したかのようだつた。それは、あまりにも突然の出来事で。

「え、ええええ…！」

…」は現実か？ 倒れたまま俺は妄想という世界へと入り込んで

いるんじゃないだろうな？ それともなんだ、これはドッキリ作戦か？

戸惑いながら俺は未来先生を見ていると、ひとつ息をはいて彼女は話し始めた。

「美智子に言われたんです。悠さんと付き合って」

「……」

「美智子、今日の悠さんを見て、別人だと思ったって言つていまし
たよ。そこまで熱くなる人だとは思つていなかつたらしいです。そ
れでもカツコイイって言つっていましたが」

そう言いながら笑顔を見せる未来先生。だけど、俺にはそんな言葉
たちも耳には素直に入つてこなくて、ただ驚きの表情を見せるだけ
だった。

「…本当に、付き合えるんですか？」

「はい」

未来先生はニツコリと眩しげく笑つてくれた。その笑顔がい
としくて、肩を抱き寄せた。

「やつた…」

心で呴こいつと思つた」の言葉が、そのまま口ぐと出てしまつた。
そして、未来先生も俺の背中に手を回す。

「悠也ん」

俺はその言葉につられ、未来先生の顔を見よつと密着している体を、少しだけ引き離した。

「どうし…」

最後まで俺の口は話しつづけられなかつた。

だつて、未来先生の口が俺の口を塞いでいたから。

「未来」

「何?」

「大好きだよ」

「ちよつと、もう…」

「未来は?」

「えつとねえ……」

#22 大好きだよ（後書き）

今回の話で、予定上の第一章が終りました。
どうだったでしょうか？

読者様の感想等を作者はお待ちしております。

もし、名前を出していいにない、みんなに私の感想を見られるのが
恥ずかしいという方は、

net_touki.net@yahoo.co.jp

にメールを送ってくださいが、

または、匿名（メールアドレスは別にいらない）の感想
を送ってください。

<https://plaza.rakuten.co.jp/mailboxform/84s/>

これからも、恋愛完全マスターとお付き合ってください。
よろしくおねがいします。

あなたーかとーつー（前書き）

#22の未来の視点です。

あなたーかとーつー

「悠さん…」

私は悠さんから貰ったクマの人形を取り、ベッドの上で寝転がっていた。

「でも、美智子を…」

裏切れない。それは絶対。

「ああ、何で私」

悠さんを好きになっちゃんだろ。

あの時、悠さんに優しくしてもらわなかつたら。

あの時、悠さんに人形を貰わなかつたら。

あの時、悠さんの笑顔を見なかつたら。

あの時、悠さんに出会わなかつたら…私は、

私は、恋をしていなかつたの。こんな気持ちにならなかつたの。

「悠…さん」

私はもう一度、悠さんの名前を呟いた。そのとき、私の携帯は大量の悲鳴をあげた。

「…美智子？」

携帯を手に取り、ディスプレイを見ると『立花 美智子』と表示されていた。

びついたのだね。美智子はずつと私を…無視し続けてきたの。ひつど、そんなことは関係ない。

私は意を決して携帯電話を耳に当した。

「もしも…」

最後まで言い切る前に、美智子は声を張りて悠さんの名前を呼んだ。

「未来っ… 悠さんが！ びつじょ… 倒れちゃって… あんた彼氏でしょ！ なんとかしなさいよー！」

「え？」

「びつじょ、未来…びつじょ」

美智子の声がだんだん泣き声に変わっていくのが分かった。

しかし、どうして悠さんが美智子の家に？ しかも倒れたってどうしたこと？

今私は混乱していた。

「未来！」

美智子の叫び声で私の心は少し落ち着くことが出来た。

「悠さんが、どうしたの？」

「いきなり… 倒れちゃって、どうしよう！？ 私が無理をせちゃつたのかな… 未来とギクシャクしてたからかな… ごめんなさい。『めん…』」

「大丈夫だよ。それよりも、今からそっちに向かうから…」

私はそう言って携帯を切り、車のキーを手に取った。

数分後、私は美智子の家に着く。

「未来！」

インター ホンを鳴らすと同時に、未来が勢いよく部屋から出ってきた。

「大丈夫！？」

「私より、悠さんが…！」

あわてながら私を部屋の中に引きずり込む。

「悠…さん？」

畠の前にま、ぐつたりと倒れている悠さんがいた。

「ど、とつあえず、落ち着いて」

これは私自身に言った言葉。美智子は、頷いているけれども、全く落ち着けていない。

私はそつと畠んで、悠さんをじっくり観察した。

「すう、すう……」

「…く？」

「すう、すう……」

何度も聞こえてくる悠さんの……寝息。

「悠……さん？」

揺すってみるが、畠をあけるような仕草は見せない。

「ど、とつあえず、何事もなきようだけど……一応、あの診療所に付れていくよ?」

私は美智子にそつと、まだあわてている美智子は向回も頷いた。

「ちゅうと、手伝って」

私は美智子に、私とは逆側の悠さんの方を持つよつて言った。その

まま私の車に乗せ、車を走らせる。

走行中も、美智子は混乱しているのか、私にずっと謝っていた。

診療所に着き、診療所の先生に手伝つてもう一悠さんを中心と運ぶ。

診断結果は…

「ただ、寝ているだけですね。もう、何日も寝ていなかつたんではないでしょうか?」

先生はやつこいつ、少しここで寝かせてから「自宅へ帰つてしまつてしま」と言つて、悠さんは空き室へと運ばれた。

「未来…」

やつと落ち着いたのか、悠さんが寝ているベッドの横で座つている私を、部屋の外から美智子は呼んだ。

「美智子、『めん』

今私の状況に気付く。彼女でもなんでもないのに、悠さんにべつたり引っ付いている私を、美智子は良く思わないだろう。

「いいの」

しかし、美智子から帰ってきた言葉は、否定を示す言葉だった。

「美智子?」

私は『』悪い、美智子の名前を呼ぶ。

「私ね、最悪な女だつたね」

美智子は苦笑いしながら、そいつ言つた。

「美智子は、最悪な女なんかじゃないよー。それ言つなら、私のほうが…」

そうだ、私のほうが最悪なんだ。美智子を応援するつて決めたのに、悠さんの告白に動搖…嬉しく思つているのだから。

「ううん、未来はいい子すぎなのよ」

「え?」

「私ね、未来のこと大好きなのに、嫉妬しちやつたりして…未来のこと信じなかつた。でも、悠さんが気付かせてくれたの。本当に…ごめん」

ボロボロ泣きながら私に抱きついてきた。

「裏切つたと思って」「めん。未来」「めんね…」

「ううん、いいの…」

そつか、美智子も私同様…苦しかつたんだ。それだけが分かつたから。

「未来」

涙を拭きながら、美智子は私の顔をじっと見てきた。

「悠さんは、未来にベタ惚れだからー。もう、付き合ひやがえ！」

「ヒヒと笑いながら、美智子の田からは涙がこぼれ出でていた。

美智子…

「うん…」

私も涙が自然と出できた。あふれ出できた。止まらなかつた。

「ありがとね…」

私はもう一度美智子をぎゅっと抱き寄せた。

「本当に、ありがと」

それしかもう、私の口は動かなかつた。

それから少しして、美智子が『私がいたら、一人がイチャイチャできないからね！ 家に帰つて自棄酒でもしていくよ』と言つて、病院を出て行つた。

その美智子の後姿を見ながら、私はもう一度ありがとつと呟いた。

次の日の学校には休みの連絡をいれた。びつしても今だけは悠さんと一緒に居たかったから。

私はそっと、寝ている悠さんの寝顔を覗く。

本当に、カッコイイ…。

こんなにじっくり見たのは初めてだ。いつも、まぶしすぎて直視できなかつたから。

そのまま私が悠さんの手を握つたとき、やつくりと彼の目は開いた。

「悠…さん」

半開きになつてゐる悠さんは、私の声で全て開きかる。

「み…く」

そうだ、この声だ。私の大好きな彼の声。全てをささげたい人の声。泣きそうな心を落ち着かせながら、私は一ヶ口笑つた。

あなたーかとーつー（後書き）

次から第二章となります。

基本、未来と悠が付き合っている話です。

どうか、最後まで恋愛完全マスターとお付き合ってください。

#23 何もかも忘れるほどに（前書き）

ここから、第一章の始まりです。

注意点があるとすれば、大将が『未来』と呼ぶことになつたことどうしょうか。

最後まで、お付き合てのほどをお願いします。

#23 何もかも忘れるほど

「悠！ 悠つてばあ！！」

「ちょ、待つて…まじ限界…」

今、遊園地へと来ている。

正式に付き合いつことになつた俺達は、お互いのことを呼び捨てで呼ぼうと決めた。いつまでも、さん付けでは他人行儀だからと俺が言い出したからだ。ただ単に、未来が俺の名前…まあ偽名だが、呼び捨てをしてほしかったからである。その、なんだ、嬉しいだろ？

「それにしても、あんな乗り物よく乗れるよな？」

「ジヒシトコースターのこと？ 面白いじゃない！」

俺はベンチに大きく手を広げて座りながら、未来にそう言った。

そして、俺が未来と付き合い始めてから2週間がたつていた。俺には勉強があるから、そんな頻繁には会えないが、こうして土曜日に一緒に遊ぶようにしている。

未来はどうやら、部活顧問を持っていないようだし、休日はフリーみたいだ。

「それにしても、悠が遊園地初めてとはね…」

そうなのだ。俺は今まで勉強勉強で、こうこうこうには来たことがなかつた。中学校の修学旅行は『あんなもの、勉強のうちにも入らん!』と、親父に怒鳴られて行けなかつたほどだ。

「あれも乗らうよ!」

そう言ってぐいぐいと俺を引っ張る未来。そんな彼女を見るのは、本当に楽しいのだが…。

「ぎもひわるう…」

ジエットコースターといつものに、なんの耐性もない俺には、苦痛でしかなかつた。

「大丈夫…?」

「だ、大丈夫…」

なわけあるか…!!

「けど、悠の弱つている姿はレアだね。いつも強がつて、弱いところなんて見せてくれないし」

「それは未来の前だからで…」

と、気持ち悪さのせいか、ふと本音が漏れてしまった。ほら、未来だって戸惑つてしまつていて。

この何週間で未来について色々知ることが出来た。その他のひとつが、いつも恥ずかしい言葉に弱いということだ。『好きだよ』なんて言つと、顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまう。

「や、や、やあ…… 次はあれに乗るわー！」

あたふたしながら言つ彼女は、観覧車とつもの指差していく。

「あれ？」

「モツモツ」

足が震えるのが分かつた。

「もしかして悠つて、高所恐怖症？」

「ち、違ひー！」

いや、決して高いところは好きではないが、高所恐怖症とつぽどまで嫌いではない！ 山の頂上に行けば綺麗な景色だと思つ。

「じゃあ、行ひー！」

「ハハハ笑いながら、未来は俺の腕を取つて歩き出した。

この「週間、色々な」とがあった。

恭平さんに報告をすれば、なぜかとても嬉しがつて、おめでとうと

言つてきたし、美智子からは泣きながら祝福された。龍之介といえ
ば、何も言わずにいつもどおりそばに居てくれる。

そんな彼らの接し方は非常に嬉しかった。

美智子と未来のわだかまりもとれとようだし。

「ねえ、悠」

観覧車に乗つて、数分。目の前に座っていた未来が、いつの間にか俺の隣に座つていた。

「どうした?」

俺は隣に座つた未来の手をとつ、ニッコリと笑つた。

「あのね、あのね」

普段、学校では見られないような未来のその顔は、俺の心のビック
をくすぐついていた。

「私、悠に出会えて本当に良かったよ」

「…俺も未来に会えて本当に良かつたよ」

未来のその言葉は、幸せすぎた。未来に会つまでそんなことも言わ
れたことがなかつたし、言おうとも思つていなかつた。

その後未来は、学校の出来事、美智子や果歩のことと、楽しそうに

話してくれた。

「あ、そういうえば、この遊園地ってパレードがあるんだよね」

観覧車を降りて、ぶらぶらしていると、未来はそう言い出した。その顔は、いかにも行きたそうな顔をしている。どうやら、俺の言葉を待つていてるみたいだ。

「見に行く？」

俺がそういうと、未来はニッコリ笑って大きくうなずいた。

未来に手を取られ、先導されながら後ろをついていく。この状況が本当に幸せなのだ。失いたくない、そう思っていたのに。

そう、思えたときだったのに。

いきなり俺のポケットから電話が鳴り出した。

携帯を取り出してディスプレイを見ると、そこには一番見たくない人の名前が映し出されていた。

「電話？」

未来は携帯を片手に立ち止まっている俺の目の前に来て、顔を覗き込んできた。

「あ、うん」

今の俺の顔は、どういう風になつているんだろう？ どんな風に未

来に写っているのだな？

「…誰？」

俺の表情から読み取つたのか、未来は俺に問いただしてきた。

「……」

「…女人の人？」

「違う！」

「じゃあ、誰？」

俺はどうやって答えればいい？　いや、ただ単にここに載つている人の名前を言えばいいのだ。

…親父だと。

「お…」

「…でないの？」

なのに、俺の口はその言葉を言えなかつた。

「…わらい」

俺は未来から少し離れ、鳴り止まない電話をとつた。

「もしもし…」

未来に田をむけると、じつしたの？　ところ田で俺をしつかりと見ている。

『大将、何をしている』

携帯向こう側からは、俺のじつしても聞きたくない声が聞こえてきた。

「関係ないだろ？」

…そんなことも言えず、俺はただ「すみません」と謝るだけだった。

内容は全く覚えていない。

ただ、勉強もしないで、遊園地で遊ぶとは余裕だな。と呟かれたのは覚えている。

その返答も、もちろん「すみません」だった。

数分後、電話が終わり俺は未来の元へと近寄る。

「誰？」

再び、未来は俺に聞いてきた。

「…俺の嫌いな奴」

俺はそれしか言えなくて、ただ泣きたくなつた。親父の声、親父の発言により、俺は当初の目的を思い出したから。

俺は、未来を騙してこないとこいつを連れ出したから。

居たたまれない気持ちが、俺の中をめぐつてゐる。現実を、親父のせいでも思ひ知らされた。幸せだった。幸せすぎた。

何もかもを忘れるほどだ。

「未来」

俺は黙つている未来の手をそつと握った。

「行こうか」

そう言つしかなつた。田の前には、未来の望んだパレードがあるのだから。今はただ、この幸せを味わうことだけを考えよう。

未来といふ時間を大切にしよう。

一步、また一步と悪魔の時間は近づいていく。

夏休み前の期末テストまで、残り一ヶ月をきつっていた。

#23 何もかも忘れるほど（後書き）

感想、メッセージ等お待ちしております。

メールでの感想もお待ちしておりますので、どうぞ送り合ってください。

net_touki-net@yahoo.co.jp

#24 順調だよ？

「ただいま、帰宅しました」

楽しかった遊園地も終わり、俺は親父の部屋へと踏み込んだ。

「遅かったな」

帰宅時間は20時すぎ。今までの俺、そしてこの家にしては遅いほうだった。

「申し訳ござりません」

俺は軽く頭を下げるが、今まで資料に目を通していた親父の目は俺に向けられた。

「アメリカへ行く手続きは順調だぞ」

それだけ言つと、もう一度親父は資料に目を向いた。

もしかして、それだけを言つたために俺をこの場所へ呼んだのか？

「…失礼します」

俺は振り返って、親父の部屋の強大なドアを押し開けとぎ、親父に名前を呼ばれた。

「何でじょりつか？」

俺は少し反抗氣味に振り返る。

「彼女とは仲良くしてこいるのか？」

「……！」

「……！」

「……何のことなのか、分かりかねます」

俺はそう言つて、部屋を後にした。

多分親父は、今までの俺の変わりようから俺について調べさせたのだろう。お金だけは余るようになってくるのだから。

とこうことは、俺が未来と向き合つてこることもバレしているのだと思つていもいいだろ。

……親父。

怒りといつものが、俺の心に渦巻いていた。

未来とはもう離れられない。もつ、未来無しの生活は考えられない。

「未来ッ」

俺は未来の名前を呼びながら、自分の部屋のベッドにしがみついた。

「お坊ちゃん

「…ん？」

頭上付近から、キヨ爺の声が聞こえてきた。

「夜の食事はどうなれますか？」

「…」めん、いらなし

何も食べる気にはなれなかつた。未来を失うかもしれないこの状況なのだから。

「いいえ、駄目です。食べてもいいます

そしてキヨ爺は無理やり、俺をベッドからおりした。

「ちよ、キヨ爺…」

「用意しております

そういう残すと、キヨ爺は俺の部屋から出て行つた。

ここまでキヨ爺が強硬手段に走つたのは、俺がこの高校に無理やり入れられたとき時ぐらいだらう。

あの時は、『うしも』の高校に入りたくない、家で一晩中泣いていたときだつた。キヨ爺は俺の部屋に無言で入つてきて、背中をバチンと強大な音を奏でるよつて叩いたのだ。

「クヨクヨしていくも、何も進みません。お坊っちゃん、この頃強に打ち勝てるとキヨ爺は信じております」

そう言つた後、こいつと笑つたキヨ爺の顔を今まで忘れることは出来ない。

このときのキヨ爺は、衝撃的な出来事だつた。今まであんなにも強く背中を殴られたこともなかつたし、信じているとも言われたことがなかつたからだ。

本当に嬉しかつた。

キヨ爺は唯一、この部屋で俺の居場所を作ってくれる人間だと、このとき思つたのだ。

そして今回もキヨ爺は俺を救つていた。

そのまま俺がベッドで放置されていたら、なにをするか分かつものじやなかつた。

一瞬俺の頭をよぎつたのは、逃亡と二字。

この家から出てしまえば、もう『うしも』ではない。そう考えたのだ。

だけど、そんなことをしても結果は見えている。

俺は大きく息を吸つてから、自分の部屋を出た。

3週間がたつた。

俺は何の解決方法を見つけられずにいた。ただ、未来の隣で幸せを感じていただけだった。

これから来る、悪夢の時間を知りもしないで。

「大将」

俺の後ろから聞こえてくる声は、いつもの龍之介のものだった。

「な、何？」

いきなり話しかけられた俺はしどろもどろになつている。

「最近、どう？」

そう言つてゐる龍之介の表情は、少し寂しそうに見えた。

この何ヶ月かで、龍之介の表情も今までよりはつきり分かれてきた気がする。今まで何を考えているのか分からなかつたが、最近ではほんの少しだけ笑うようになつたし、さつきのように寂しそうな

表情を見せることも多くなった。

俺だけではなく、龍之介も変わってきてているのだ。

俺も変わっている自覚はある。今までどおり、学校では田立たないよつにしているが、未来と一人になると、無性に甘えたくなるのだ。今までそんなことがなかつたらから、正直今の自分の気持ちに戸惑つていてる。

「どうして…まあ、順調だよ?」

俺は二口ひと笑って、龍之介に返事をした。

「勉強も?」

「…うん」

肯定の返事をしたが、前よりも勉強が進んでいり言い難い。昔と同じぐらいという言葉が合づだろひ。

未来と一緒に居ないときは、勉強に時間を費やしていくし、提出物だつてしまっかりとしている。

「協力、する」

「…ありがと」

俺は涙を必死に抑えて、いつものように笑った。

「はーい、席について!」

俺が龍之介と話していると、未来が教室へ入ってきた。

俺の席は特等席。一番、未来を間近で見られるという特権つきだ。付き合う前まで、いや好きと自覚する前までは、その席が苦痛でしかなかつたが、今はここでよかつたと思ひ。

目の前にいる未来は、俺を『悠』とは認識していないが。

「これから、テスト範囲の書いてあるプリントをお配りします」

その言葉が聞こえた瞬間、俺の心は跳ね上がった。

「テ…スト」

誰にも聞こえないようにそっと呟く。

そうだった、明日からテスト考查期間に入るのだ。テスト前の準備期間と言つたほうがいいだらうか。

先生達がテストを作成する時間のためにあると言つても過言ではない。

そのために、部活がこの時期だけ休みになるところも多いのだ。

この期間は、職員室に入ることも許されない。テストカシーニング防止のためだ。

そして、俺はこのカシーニングをするための、取つて置きの切り札が

ある。そんな言い方をしたくないのだけれども。

「大将君？」

聞きなれた声が、俺の目の前から聞こえてきた。

「プリント、回してくれる？」

純粋なその笑顔で俺の顔を覗き込んできた。

「は、い」

俺は詰まりながら返事をして、プリントを受け取る。

「それで！」

その後、プリントの内容について詳しく説明していたが、俺の耳には全く届いてこなかつた。

目を瞑る。

ああ、未来。

「では、テスト勉強頑張ってね！」

心が痛い。痛いんだ。

「未、 、 、 来」

俺は声に出して、 未来の名前を呼んだ。

その声は誰にも届かずに、 ただ俺の耳だけに残っていた。

#25 レンズの向ひ側

「悠？」

その日の放課後、俺はどうしても未来に会いたくなつて、未来を呼び出した。あの、公園に。

「よつ」

俺はベンチに腰掛けていた体を、立ち上がらせた。

「どうしたの？ 急に会いたいなんて、珍しいじゃん」

未来は満面の笑みで、俺を傍へと寄つてくる。

「いや、なんか、その……そつこいつ時もあるんだよ」

俺はテレながらそっぽを向いてそつこいつと、いつものお返しかのよう、未来は俺の腕へと抱きつき「私はこいつもだよ?」といいながら顔を覗き込んできた。

その行動が、俺にとつてはとても恥ずかしくて、顔を赤くしたのは言つでもない。

「さて、どうしましょうか」

俺に抱きついていた腕をそつと離し、未来は両手を腰へと当て、仁王立ちのような格好になつた。

「どうしたのか

いつもどおり、計画性のない俺は、呼んだのはいいが何をするかは決めていなかつた。…いや、決めていたのだが、口には出せなかつた。

「悠?

ボーッとしていたのだろう。未来は少し離れた場所にいたのに、いつの間にか俺の目の前に立つていた。

「ん?」

「私の家行く?」

ただいまの時刻、夜の八時。そんな時間に女人の家にあがるということは、色々と期待してもいいってことだよな?

「お、おひ」

俺はそう返事をすると、俺の数歩前を歩く未来の隣について、そつと手を握った。それから、何を話すというわけでもなく、ただ未来の家へと向かつた。

「何もないけど、ゆっくりしてこつてねえ」

キッキンのほうから聞こえてくる女の声に、俺の心はバクバクさせられる。

「の前にここに来たときは、告白をしたかったときだったかな。あの時は、緊張しそぎて全く部屋の様子など覚えていなかつたが、多少前より落ち着いている今の俺には刺激が強すぎる。

「よっこじよ

そう言つて、腰を下ろす彼女を見て思わず噴出してしまった。そつた、この前に来たときも、未来はそう言つて座つたんだ。

「笑わないでよー。」

そっぽを向く彼女を慰めるように、俺は頭を撫でた。すると、機嫌が直ってきたのか、俺のほうをチラツと見た。

「…もう！」

観念したのか、未来は田の前にあるパソコンに手をかけた。

「…仕事？」

パソコンを触る理由に、思わず最初に思いついたのはそれだった。その予想は、俺には当たつてほしくないものだった。

だけど、現実は非情なもので、その俺の予想は当たつてしまつ」とになる。

「やう、本当は持ち出しちゃいけないんだけどね。私の勤めている

学校つて、進学校つてこの前書つたでしょ？」

「あ、あの有名な、学校でしょ？」

「そうそう、私の頭じゃそんなテキパキ出来ないからね…。悪いとは思つてゐるんだけど、家でテストを作つてるの」

最悪だつた。

「そ…っか」

俺はなんて返事をしていいのか分からなかつた。その前に、目を開けてもいいのかさえ、分からなくなつていた。

「難しいんだよ～！ 私だつて、毎日のように勉強しているんだか」「ひ

そつ言つて頬を膨らます未来。その頬に俺はキスをしてやつた。

「え、ちよ…」

俺からキスをするのは、今回が初めてなのかもしれない。だけど、今の俺の心には、恥ずかしさはなかつた。ただ、罪悪感でいっぱいだつたのだ。

「未来」

俺はその行動を中断せらるかのよつて、元氣と抱きしめた。

「な、何？」

いつもはこんなことをしない俺に戸惑っているのだろう。未来は顔を赤くして、俺のほうを見ようとしない。

「……なんでもない」

「何よそれえ！」

と笑いながら未来は振り向いた。

そして、時が止まる。俺は振り向いた未来の唇を奪った。

「好きだよ…」

今、この言葉を発していいのか迷ってしまった。だけど、俺の心は抑えられなかつたが、欲望に負けてしまつた。

その後はただ強く抱きしめた。

「悠？」

いつもと違う俺に気付いたのか、未来は逃げようとはせず、そつと俺の手を触ってくれた。

「大丈夫、私はここにいるよ」

未来、居てはいけないんだ。

俺の近くに居てはいけないんだ。

だけど、俺は…

「悠、好きだよ？」

そんな言葉を吐いては黙口だ。

俺は悪の者なの、そんなこと言つては黙口なんだ。

「未来」

俺は未来の背中でしゃつと顔を押し付けた。

「何かあつたあ？」

俺のことを遣つてか、未来はいつもより高い声で俺に聞いてくる。

「俺…」

未来を騙しているんだ。そんなことは、口が裂けてもいえなかつた。

それが悲しくて、ただ泣きたくなるばかりだ。

「…お腹減っちゃつた」

この雰囲気に耐えられなかつたのか、未来は俺の腕の中でそう呟いた。

「何か、食べに行く？」

「ううん、私が何か作つてあげるよ… “彼氏”のために…」

満面の笑みを浮かべる彼女の言葉は…俺の心にしみこむことができた。

彼氏が

彼女に

嘘をついている。

俺からそっと離れ、キッチンへと向かう未来の後姿を俺はただ眺めているだけだった。

未来の鼻歌が聞こえてくる。

その歌は、俺の好きな部類に入る歌だった。

だけど、俺の耳はその曲を受け付けなくて、ただ、未来がこっちに来ないかだけ、それだけの為に耳を働かしていた。

パカツッと、音をたてて、田の前にあるスリープ状態のPCを起動させる。

起動音が聞こえると同時に、俺は田を瞑った。

…これは、未来と俺が一緒に居るために必要なことなんだ。

そう心に言い聞かせながら、俺は痛む心と向き合つ。

理性よりも、いい点数を取りたいといつ欲望のために今、俺は動いている。

「めん…

そつ心の中で呴いて、そつと口を開いた。

そこには、テストの内容、範囲、問題の簡単な組み立てが成っていた。

俺はそのディスプレイにむかって、いつも所持しているカメラを向けた。

「「めん…」

今度は声に出して未来に謝る。

これは、必要なことなんだ。俺がここにいるためには、俺が…未来と一緒にいるためには。

カシャっと、思ったよりも大きな音が未来の部屋に響き渡った。

そして、俺はPCを片手で閉じながら、未来にカメラを向ける。

「未来つ…！」

俺が呼ぶと、レンズの向こう側に居る未来は「何い？」と言しながら振り向いた。

人差し指を下ろす。そしてもう一度、カシャつという音が鳴り響い

た。

#25 レンズの向い側（後書き）

最近、暑いですね。強大な地震も来ましたし、
近辺にはお気をつけください。

#26 最悪だ、俺

あれから、何事もなく俺は家に帰った。当初、期待していた“あれ”もすることなく。

自分の部屋に入ると、俺は今日使ったカメラのフォルダを覗いた。未来がエプロン姿で二つ巴を見ている写真、一人で肩を寄せ合って撮った写真、そして…

俺はその一番最初にとった写真の内容をノートに書き出すと、証拠を消すかのように、消去ボタンに手をかけた。

「未来…」

無性に悲しくなり、愛しの未来の名前を呼ぶ。俺は、彼女を裏切つたんだといつ、自覚がとてもなく沸いてきたからだ。

「お坊ちゃん…」

どれぐらい自分の世界に入っていたのだろうか、いつの間にか俺の隣にはキヨ爺が立っていた。

「夜のお食事は？」

「…キヨ爺」

俺はキヨ爺の質問には答えず、キヨ爺の名前を呼んだ。

「何でいりこまじょうか？」

「俺さ… キヨ爺に感謝しているよ」

「それは、ありがとうございます」

キヨ爺はいつもの笑顔を見せ、俺にそう言った。

「だから…」

だから、親父を説得してくれといつになつた。そんなことをしてしまつては、キヨ爺の首が飛ぶのは目に見えている。

「なんでもない。」飯は、今日はいらないや。「めんね、キヨ爺」

俺は悪そつに手を顔の前であわせ、キヨ爺に謝つた。その行動のおかげか、キヨ爺はいつものまぶしい笑顔で「かしこまりました」と言い、部屋から出て行つた。

「最悪だ、俺」

「未来…」

ベッドにつづくあと、自然に涙がこぼれてきた。

今一番会いたい人の名前を俺は涙を堪えるかのように、布団にしがみついて呼んだ。

そのとき、携帯がピリリと鳴る。

それだけが書かれたメールが届いた。もう分かると思うが、龍之介からだつた。多分、このメールを見て思い当たる節は、一緒に勉強をしようと約束したことぐらいだ。ということは、明日龍之介の家で、勉強をしようというメール内容と取れる。

「ありがと」

俺は口に出しながらメールを打ち終えると、送信ボタンを軽く押した。

そうだ、割り切ろう。

俺はベッドの上で仰向けになり、そう心に呟いた。

仕方なかつたことじやないか。未来が好きだからしたことじやないか。今更後悔しても、どうなるつてわけでもないじやないか。

そうだ… そうだ…。

俺はそのまま目を瞑ると、頬を流れる涙を無視してそのまま眠りに付いた。

「よつ、大将！」

学校も終わって、龍之介の家に着き、部屋へ案内しても「ひつね」には私服の恭平さんが座っていた。

「どうしたんですか？」

「いや、お前等が勉強するつちゅうから、俺が教えたひつ思つてな「ヤニヤしながら、そいつ恭平さんは言こにくいが、頼りにならなさそうだった。しかし、やつぱり執事といつ肩書きは嘘ではなくて…。

「まあ、大将は基礎がちゃんと出来てるから教えることねえけど、言つなら氣をつける場所が少し違つ氣がするな」

みつちり恭平さんに教えてもらつて、早3時間がたつた。大学とかは行つてないらしいけど、俺よりもはるかに頭がいい。あの龍之介だつて、もしかしたら恭平さんに教えてもらつたのかもしれない。

そう思つて、龍之介のほつを見ると、いつもどおり英語の本を読んでいた。

「大将は、「Jの問題一番氣をつけないとひざだしやと思つへ。」

科学の問題集を開けながら、恭平さんは俺に聞いてきた。

「やつぱり、「Jの原子記号?」

俺が指差した先には、英語ばかりの原子記号があつた。

「だと思つだろ? だけど、「J」で一番氣をつけることは、「J」な

んだ」

そう言って、恭平さんが指差した場所は教科書でもなく、ノートでもなく、俺の心に向かっていた。

「へ？」

意味が分からぬ俺は、どこから出たのか分からない声を発していた。

「だから、心やつむづのー！　どの教科でも一緒にけどな、間違えへん！　つちゅう心が大事なんや」

一シシリと笑いながら、恭平さんは俺の頭を撫でた。

「未来ちゃんに罪悪感が沸いてるんやろ？」

俺の顔を覗き込むように、少し恭平さんは顔を下げた。俺はその恭平さんの顔を見る」とは出来なくて、目をそらしてしまった。

「そ、そんな」と…」

無いわけが無い。

こんなに好きになつた人を、騙しているんだ。罪悪感が沸かないわけが無い。

「…大将」

恭平さんは、俺の頭に乗せていた手を肩に乗せ、じっくり俺を見て

めた。

「やの嘘、いつかは……」

いつかは、言わなくて済むだけない。

その後の言葉は、俺の頭の中ですうとコフフレインしていく言葉だった。

「考えたくないのは分かる。やけど、お前が決めた道なんやから、迷つたらあかんで。俺は正直、大将の今の気持ちがいまいち把握できやへん。今までそんな事した経験もあらへんしな」

俺は田の前にあるホールを開き、くしゃくしゃにしたい衝動に駆られてしまった。恭平さんに言われたことがムカついたわけではない。ただ、自分の不甲斐なさに、泣きたくなつたからだ。

「今日せまひいらへんじよか！　また、来るやう？」

ここやかに笑う恭平さんの顔を見て、俺は一回縋つづなづいた。そして、龍之介の家を後にした。

家に帰ると、こつものようにベッドへと直行した。そして、考えることはこつものように未来の事。

「まつか…そのまま去るか…」

確実に、後者のまづがいいのだろう。だけど、俺は…　俺は…

「未来と離れ離れになるなんて、考えられねえよ…」

そう言つた俺の声はもはや、誰も聞き取れないぐらいの涙声だつた。今キヨ爺が入つてきたら、何も言い訳が出来ない。あの笑顔で「どうされました?」なんて聞かれたら、今の俺の心はキヨ爺に頼つてしまつ。

…キヨ爺には、迷惑はかけたくない。

「未来…未来つ

俺の意識は、昨日同様そのまま意識が無くなつた。

「お坊ちやま、携帯が鳴つております」

ベッドの上で寝ていた俺の体を揺するのは、いつものようにキヨ爺だった。

「あ、」め…

俺は寝ぼけたまま携帯に手を伸ばし、通話ボタンを押した。

「ん?」

俺は目を擦りながら電話を耳に当てるが、だんだんと意識がはつきりしてきた。

『悠う?』

電話の向ひからぬ、未来の声が。

「え、あ…やつは」

そつ答えるしか出来ない。だつて、俺の隣にはキヨ爺が居るのだから。

『さうしたの?』

「こあ、その…」

俺はそういうながらキヨ爺をチラツと見た。多分、もうバレていると思つ。電話の相手が俺の彼女であることを。

俺が思う、キヨ爺はもう親父から俺に彼女がいること、それが学校の先生であることを聞いているのだと思つ。キヨ爺は俺の世話係だからな。

「下でお待ちしております」

そういうと、キヨ爺は俺に背を向け部屋から出て行つた。

「ちょっと知り合いが来ていてさ」

『そうなの。今、大丈夫?』

電話越しでも分かる、彼女の心配している声は、余計に俺の心を罪悪感で満たして言つた。

「大丈夫だよ。何かあつた?」

俺がそういうと、未来はなんとなく声が聞きたくてと、可愛い声で言つてきた。あまり聞きなれないその声は、俺の心を震わせるのは十分だつた。

「仕事、大変だろ？　あんまり無理するなよ？」

未来の生徒である俺が言つのもなんだが。

「うん。いい子ばかりで、私が助けられているぐらになんだよ？　そういえばこの前ね…」

「ん？」

「“大将君”って言う子がいるんだけどね」

未来のその言葉で、俺の背中には冷や汗が流れた。今まで大将の俺に“悠”的話はしていたが、悠の俺に“大将”的話をしたことがなかつた。

「う、うん」

俺はつまらながら、相槌を打つ。

「悠みたいな子なんだよ？　どつか素つ氣無いんだけど、本当はとっても優しい子なのよー。この前なんて、私が持てなさそなダンボールも、教室に運ぶのを手伝ってくれたの」

いい子でしょおー！　という未来に、俺は焦りを感じていた。出来るだけ目立たないよう学校生活を過ごそうと決めていた俺に、い

い方向で先生に立っているようだ。

「あ、俺に似てるって？ そ、そんなイケメンいるのかよー。」

俺は笑つてそうこうと、未来は容姿については完全否定をしてくれた。

「その子、好きになるなよ。」

「ならないわよー。間違つても教師と生徒はそういう感情を持ちません！」

「そ…っか」

未来にそう言われた俺は、悲しくなった。俺は生徒だけど、未来が大好きだといつのこと。

「俺は…」

「何い？」

「未来が俺の先生だつたら、好きになつているよ」

「ちよ、ちよつと… 变なこと言わないでよー。」

その後、どうしても俺には聞きたいうことがあった。この衝動を抑えられない俺は、未来の言葉に間を空けず言葉を発する。

「俺が、生徒だつたら… 好きになつていいる？」

俺達の間に、沈黙が少し流れた。

#27 応援しています

「どう…なの?」

俺は緊張しながら、その質問の答えを待った。

「悠が生徒だつたら、私は…」

やつと口を開いた未来の言葉はとても遅くて、迷つてこる感じが見て取れる。

「私は、好きになつていないと…思ひ」

「……」

その言葉に俺は、何も言じ返せなくなつていた。さつきまで考えていたことが、完全に否定されたのだ。

「…つか、そのまま去るか。

前者は完全に、未来の理論の前で否定された。

「教師といつ職に私は誇りを持つてゐるから…」

言葉に詰まりながらも、未来は俺にそう言つてきた。今、未来の顔はどうなつてゐるのだろう? 未来のことだから、俺を好きにならないといつて、とても悲しんだ顔をしているにちがいない。

「…つすが」

「え？」

「さすが未来だよな！　俺はそういう未来大好きだ」

ニシシと笑いを混じりながらそういうと、未来の声にも元気が戻ってきた。俺のこの悲しみの感情は抑え切れていないかも知れない。だけど、未来が悲しい顔をするとき、俺の心はもつと痛んでいく。

なら、俺が我慢すればいい。

それから俺と未来は他愛もない話をして、電話を切った。すると、無性に悲しみがこみ上げてきて、また泣きそうになった。

「駄目だ。我慢、我慢」

俺はそういうながらベッドを降りて、キヨ爺の下へと向かった。

「遅れてごめん」

リビングに着くと、キヨ爺が用意してくれたご飯が準備されていた。そこには、母親の姿も、父親の姿も無い。

キヨ爺と、少々のお手伝いさんだけ。

「（一）飯の準備が出来ております」

キヨ爺はそう言って、俺のために椅子を引いてくれた。

「ありがとう」

俺はそうこうと、その椅子に腰をかける。

「あのわ、キヨ爺…」

俺は思こぎりで口を開いた。しかし、その言葉はキヨ爺のせいで途切れることになる。

「野原さん、天野さん、少し席を外してくれますか?」

キヨ爺がそういうと、一人そろつて肯定の返事をした。

「キヨ爺…」

キヨ爺は、これから俺が大事な話をするのを分かっているようだ。さすがは、年の功というべきか。

「どうしました?」

いつも笑顔で俺の顔を覗き込んでくる。

「あの…わ、俺に彼女居る」とつてもう、親父に聞いたよな?」

「はい」

やつぱりか。

「私は、応援していますよ」

思つてもいなかつた言葉だつた。だつて、恋愛を応援する=勉強が疎かになるかもしれない。といつ考えを誰だつて持つてているはずだ。

現に、恋は盲目といつ言葉もあるのだし。

「応援、してくれるのは?」

だけど、その現実的な発想を覆すように、キヨ爺が応援してくれたことがとてもうれしくて、俺の右目は涙をこぼした。

「 もううんていりません

一コラと笑うキヨ爺の胸に、俺は恥ずかしながらも飛び込んだ。

正直、不安だつたんだ。

キヨ爺に『許しません』といわれたら、俺の居場所……いや、全てを失つてしまいそうだつたから。

「キヨ爺……」

これ以上泣くところは、もうキヨ爺には見せられない。俺は顔をあげて、にっこりと笑みを見せた。

恋愛話を含めながらも、食事を終えた俺は部屋へと戻つた。

キヨ爺と少し話してわかつたことが一つ。

今を楽しめ、過去を見るな、未来を確かめるな。
おひこ

キヨ爺いわく未来は、多少“予測”しなくてはいけないが、それに捕らわれていってはいけないらしい。

確か、恋愛完全マスターにも似たようなことが書いてあつたはずだ。さすがはキヨ爺。全国出版の本と同じことを思つていてるなんて。

俺は机の中から恋愛完全マスターを取り出し、ベッドに寝転びながら読み始めた。

「女性が喜ぶ」と…

いつも悲しい思いをさせている未来を楽しませてあげようと俺は思つたのだ。少しの罪滅ぼしと思つてもらつてもかまわない。

ただ、未来の笑顔をもつと見たいのだ。

「えつと、女性に『何がしたい?』と聞くのはあまりよろしくない。大体の女性は男にエスコートされるのがいいらしい」

らしい。かよつて突つ込みを入れくなつたが、まあいいはよしつしよう。

「俺が…エスコートか」

そういうえば、今まであまりエスコート的なものをしてることが無かつた気がする。いつも遊びに誘つてくれるのは向こうからだし、俺から誘つたとしても、特に計画性がないため、最終的には未来に頼つてしまつている。

「俺つて、男として駄目なんじゃないのか?」

元々、計画を立てることが苦手な俺にどうして、エスコートどころの非常に難しいことだと思った。その日に何々をするとか、全部自分で決めるなんて不可能に近い。

だって、もし未来が嫌がつたら？　いや、未来は優しいから『嫌』とは言わないが、内心好きじゃないことを未来にさせてしまったらどうする？

やつぱりここには、一人で決めるのが無難じゃないのか？

そう思つてページを一枚めぐると、俺の心を全て読みすかしたかのよつた言葉が書いてあつた。

相手が嫌と思うことをさせてしまつのではないか、と思つ輩も居るかもしれないが、それは勘違いだ。女性は好きな男性にエスコートされて嫌だと思うことは無い。一緒に居ることが全てなのだから。

…はい、分かりましたよ。

俺はひとつ大きなため息をついた。

そして、悪魔の時間であるテストは終わっていた。今日、この日まで、一番最後に遊んだ先週の土曜日からは悠の姿で未来とは会わずにいた。

確かに、未来と会うのは大事なことなのだが、それよりもこの日本に残ることが何よりも先決なのだ。正直、何度も会いに行こうかと思ったことか。だけど、毎日電話をやり取りして、その気持ちを落ち着かせていた。

未来も、テストの準備などで忙しくて、あまり会えないらしい。教師って、見た目はあまり忙しそうに見えないのだが、本当は彼氏にかまつている時間が限られているようだ。

それでも、最終日に行つた現代文のテストの内容が、俺に罪悪感を再び沸かせたのであった。

「大将」

少し落ち込んでいる俺の前の席で、龍之介は心配そうに俺の顔を見た。

テストの時期だけは、席の場所が出席番号順に戻つてしまつ。

ということは、俺は龍之介の後ろになつて、学校内で唯一の幸せだった先生姿の未来を間近で見る時間も少なくなつた。

「何?」

「テスト…」

どうだつた? と聞きたいたのだろう。俺は一ヶコリ笑つて、「いつも…と同じかな」と答えた。

本当はそれどころじやない。

全問と言つていいほど、答えがスラスラと頭の中出來た。なんたつて、未来の家で見たパソコンの内容と、ほぼ変わらない問題がそのまま出てきたのだから。あの時映し出されていた内容は、この問題用紙ほどの完成度は無かつたが、問題の出る場所、出す記号などが全て記されていた。

それを写真でとつて、ノートに書き写した俺が、いい点数をどれないわけが無い。

… そう、取れないわけが無いのだ。

「大将？」

「ん？ どうした？」

「… なんでもな、い」

難しい顔をしていた俺を心配してくれたのだろうか。龍之介は俺をじつと見た後、そっぽを向いてしまった。

学校も放課後となり、帰る準備に取り掛かる人を俺はずつと眺めていた。今日は、龍之介と一緒に帰るうという約束はしていない。

だから、俺は少しここで心を落ち着かせようと思つたのだ。

それが、裏目に出るとも知らずに。

毎日終わった学校も、午後3になると誰もいなくなっている。家に帰る気にもなれなかつた俺は、何も考えようとせずに、ずっと座つていた。

「帰る…」

そうつひつて、鞄に手をかけたとき、ドアの開く音が、教室に響き渡つた。

「だい、すけ君？」

その声の持ち主は俺が一番愛している人のものだ。

「どうしたの？」

そして、今は会いたくなかった人物でもある。

「もう、誰も居ないかと思ったよ。大将君がいて先生ビックリしちゃつた」

その純粹な笑顔を俺はまともに見ることが出来なかつた。

「未来、先生…」

俺は少し離れた場所にいる、彼女の名前を呼んだ。

「未来、先生」

「テストは、どうだったの？」

「惑つていろ俺に構わぬ、未来は教室の黒板の前に立つた。いつもやら、黒板消しやチョークなどの掃除をしごきたらしく。

「まあ、こつむじねりです」

俺はさつさまで座つていた椅子の前で立ちながら、未来の言葉に返事をする。

「確かに大将君つて、いつも成績とつてもよかつたわよね？ すごいよねえ。先生尊敬しちゃつ

あはは、と笑いながら未来は俺に背中を向けながらひと言つた。

「…今年、」

そこまで言つてしまつて、自分の失態に気付いた。未来に成績のことを言つてみる。あの生徒を大事にする未来のことだ。もしかしたら、俺の家にやつてくるかもしれない。

それだけはどうしても避けたかった。

「今年、どうしたの？」

案の定、俺の途切れた話を続けようと未来は質問を投げかけてきた。

「いえ、何も。現代文のテストは難しかったですよ」

あはは、と軽く笑いながら俺はその場に座った。

「今日はちょっと難しかったかもね。けど、大将君なら大丈夫よ。一生懸命勉強していること、先生は知っているんだから」

「あ、ありがとうございます」

それから数分間、俺と未来の間に沈黙が流れる。この沈黙を俺はどうしても好きになれない。かといって、俺から何か話題を振るか？
そんなことを考えていると、未来は口を開いた。

「それにしても、今回も龍之介君が、学年一位かしらねえ」

チョークの粉を掃除し終わったのか、未来はこっちを振り向いた。

「そ、そうですね」

振り向いた未来の顔を、俺は見ることは出来ず俯いてしまつ。あの純粋な笑顔を今の俺は見ることが出来ない。

「大将君」

未来が教壇を降りて、近づいてくるのが分かる。俺の心はもうバクバクで、今傍に寄られたら正直抱きしめる衝動を抑えることは出来ないと思う。今、俺の体未来の温もり、優しさ、そして安心感を求めているから。

「こつせ…」

また、一歩近づいてくる。

「ありがとうね」

未来…俺に“ありがとう”は書つかやこけないんだ。そんなこと書
われる筋合いか無いのだ。

「いえ、そんな、こと、は

だめだ！ 田を、あわしちゃいけない。

「そんなこと無いこと無いのー。大将君は、いつも先生を助けてく
れているんだから」

ね？ つと言いながら未来は俯いている俺の顔を覗き込んできた。

「み…く、先生」

しちゃいけない。分かつてこる。だけど、俺の理性はどうかへ吹つ
飛んで行った。

俺の右手は、未来のほうへ少しずつ伸びていく。それに気付いてな
いのか、どうなのかは分からぬが、未来はまだニッコリと笑った
ままだった。

止まれ、止まれ！

そのとおり、俺を助けるかのように学校中に響く放送音が流れた。

『諸戸先生、諸戸先生、職員室にお戻りください』

その放送を聞いて、未来は俺から少し離れていく。

「じゃあ、私職員室に戻るからね。あまり学校に残っていると、他の先生に怒られちゃうぞ！」

じゃあ、と言つて未来は教室から出て行つた。その間、俺は何も発することは出来ずに、ただその場に突つ立つているだけ。

未来が出て行つて数十秒後、俺の理性が全て戻つてきた。

「俺……」

自分の行動に嫌気が差し、右手で思いつきり太ももを殴る。
「何、やってんだよ」

鞄に手をかけて、出口へと足を進ませる。悲しみを堪えながら、自分の最悪さを感じながら。

後日のテスト返し、俺の成績が確実に上がるだらう点数を全てのテストで取っていた。現代文に関しては、トップ成績といえる満点だ。

龍之介におめでとう、と言われたが全く嬉しくない。むしろ、悲しくなった。

『100』

その数字を見ると、俺の心はきしむ音がする。俺が未来を裏切った、証なのだから。

そして、そのテストが終わると、皆が待ち望んでいる夏のビッグイベントが待っている。

「明日から、夏休みだから、交通事故などには十分と気をつけてください」

教壇の前、つまり席が一番前である俺の前で未来は、夏休みでの注意事項を述べていた。

「あと、九月初めのほうに実力テストも……」

その後も色々と話している未来の顔を、いまだに俺は見ることはできなかつた。

あのテスト以来、俺は未来に会うことが出来なかつた。未来はテストが終わってやつと遊べる時期だというのに！ と叫んでいたが、

俺は家の用事とこいつとで会わなことにしていた。

しかし昨日、恭平さんからのメールがきた内容は、実に今の俺には残酷なものだった。

『夏休み暇やろ？ またいつもの6人で遊びに行こりやー。』

いつもの6人というのは、龍之介と未来も含まれているらしい。といふことは、絶対に未来は反対するだろう。

『未来は、反対すると思いますよ？』

と俺が返信すると、数秒で恭平さんから返ってきた。

『そんなんを俺らがやると悪いか？』

ニシシ、と笑い声が聞こえてきそうなこのメール。まさかとは思つが…いや、そんなことはないだろ？

俺は考えながらメールを打つていると、俺の返信を待たずに恭平さんから再びメールが。

『まあ、拒否権はないからな！ つちゅうが、もう行く場所も日時も決まってるねん。その口だけあけといてくれたらいわ』

…は？ としか言いようが無かった。

その後に続く文章によると、どうやら泊まりらしい。生徒と一緒に遊びに行くのさえ、未来にとつては駄目なことなのに、それ+泊まりだなんて。あの未来が許すはずが無い。

とりあえず、未来にメールしてみるか。

『未来？ 恭平さんたちと夏休み遊ぶって聞いた？』

未来とは会つてはいないが、電話やメールは毎日のようにしている。そつじやないと、学校での俺の精神が耐えられなくなるからな。

数分後、未来からメールが返ってきた。

『うん！ 楽しみだねえ。ちよつとドキドキしてきちゃった！ 早く水着買っに行かなくちゃ』

どうやら、遊びに行くことは知っているみたいだ。もつ美智子と果歩の強引さに、未来もとうとう諦めたのか。

『楽しみだな。じゃあ、今日は寝るね。おやすみ』

とメールを送つて俺は、ベッドに倒れこんだ。

「大将」

はつと、意識を現実に連れ戻す。

「大将」

いつの間にか、学校は終わっていて教室には目の前の人物以外、誰も居なくなっていた。

「あ、れ…龍之介？」

俺の傍に立っていたのは龍之介だった。まあ、学校で話しかけてくるのは、龍之介か未来だけ。

「帰ろう」

今日は、一緒に帰る約束をしていなかつたはず。何があるのだろうか？

俺は声には出さず、肯定の意味を表した。

また、一日空けての更新申し訳ございません。
ハイペース更新が、私の売りなのに…（？

言い訳をしますと、今作者はテスト勉強といつ悪魔と戦つておりまして、さほど頭がいいわけでもないのに
IT系の学校へ進んでしまったわけですよ。

一回、試験で50点以下を取れば、2000円支払いをして再試験
という設定になつておりますし、金の無い作者は一生懸命勉強をして
いる”つもり”です。

ところが、小説の更新ペースがガクッと落ちちゃいましたが、
一応一日一回の更新を最低ペースにしたいと思います。

夏休みに入れば、優雅な休息が待つてゐる。それまで、しばしあ待ちを…。

感想などいただけたら嬉しいです。

#29 そして、事件は起る

「わりい、わりい！ 直接色々と言いたくてなあ！」

俺の目の前には、私服の恭平さん。

その後、龍之介に付いてきて欲しいと言われ、付いてきた先がこのカフェだったのだ。俺達が着いたときには、もう恭平さんは席でくつろいでいた。

「はあ、なんでしょう？」

学校帰りの俺はもじれと、学生服。俺の隣には、来て早々頼んだジースを飲んでいる。

「それにしても、その姿の大将と、この姿の大将の変わりっぷりは面白いなあ」

一シシリと笑いながら、肘をついて俺の顔を覗き込んできた。その笑顔を俺はじつとにらみ返して、本題へと入る。

「それで、言いたい」ととは？

恭平さんは面白くないわけに、背もたれに背中を預けて、手を上に伸ばす。

「え～あ～！ あんなあ、5、6、7日と空けといてくれへん？」

上を向きながら俺の顔を見ようとしない。

「え、いきなりですか！？」

「まあ、大将に拒否権はないんやけどな。大将がその口空いてる」
とも知つてゐるし」

「な、なんでーー？」

俺が軽く叫ぶと、小さな声で「わこなあ」と言いながら、再び恭平さんは机に肘をつく。

「大将の側近の人聞いたねん。家庭教師や塾とかいってへんのやろ？ 夏期講習みたいなんも無いみたいやし。な？ いこおやー！ つてか決まってるから、変更は受けへんけどー！」

拒否権が無いのなら、何のために「こ」呼んだんだと叫びたい。

「まあ、今から本題にはいるんやけど…」

「今からかい…」

つて、思わず関西弁でツッコムを入れてしまった。なんという不覚。

「おお、いいノコやん！ でも、まだまだやな。セイはな…」

と、シシ「コ」に対する説明をしようとして「の恭平さんを止め、本題へと入らせた。

「そんな焦るなやあ。えつとな、この事未來ちゃんには言つたか？」

今の俺にはその質問の意図が全く理解できなかつた。数日後、その言葉に意図があることを思い知らされたことに鳴るのだけれども。

「え？　はい。そりゃもちろん。何故かウキウキでしたが。もう、龍之介のひととかも諦めたんですかね？」

そつぬいひと、恭平さんは頬を軽く膨らませ、空氣を噴出した。

「うふ、笑わせるなやー。」

「はあ……？」

「まあ、うふ。諦めたらしこのあ、らしこのあ」

といいながら、笑うことやめない恭平さん。何で笑っているのかは俺にはさっぱりだ。助けを求めるために龍之介のほうを見るが、ジューースをすする吸っているだけだった。

「それだけですか？」

「あ、いやいやー。そんな訳ないやろ」

じゃあ、とつと本題に入れよと言つたかったが、何かとお世話になつてゐる恭平さんだ。そんなことは口が裂けてもいえない。

いきなり真剣な顔になつた恭平さん。もう、何を言われるのか分かつた。

「…トスト、どうやつた？」

やつぱり。

「よか、つた…です」

罪悪感が再び降り注いできた。テストといひ言葉を聞くと、どうしても最初に浮かんでくるのがあの事件。

未来を裏切った、あの事件。

「わっか…まあ、夏やからな。テストのこととか忘れて、ぱっと、遊ぼうや！」

「わあっとな！」と言いながら、恭平さんは手を大きく広げた。多分、この旅行も、俺に対する優しさから来ているのかもしれない。

未来とこのまま気まずい関係のままにならないようひとつの、恭平さんの心から。

そして、事件は起きる。

8月5日火曜日。

未来は、俺達が泊まる宿舎の前で叫んだ。

「な、な、な、なんでーーー！」

未来の叫び声で、周りの人から俺達が注目されている。そんなこと
も気にせずに、未来は大声で果歩に怒鳴りつける。どうやら未来は
龍之介が来ることを知らされていなかつたらしい。

「なんで、なんで…」

そう、俺達の会話全てが…

「小泉君が居るのーー？」

…噛み合つていなかつたのだ。

「え、言つてなかつたっけ？」

工へツつて顔をして、未来にそういう果歩。未来はもうやつきれな
い顔をして、俺を睨みつけてきた。

「悠は知つていたのーー？」

「いや、その…龍之介が来るってことは…」

俺はあたふたしながらそつ返答をすると、未来は俺の胸をポスボス
音を立てるように殴つてきた。

「なんで、教えてくれなかつたのーー？」

「いや、知つてこると思つて…」

そういうと、未来はうつむいてしまった。じりやうら、俺達の会話全てが噛み合っていなかつたことを理解したらしく。

「…帰る」

まあ、そつなるよな。

未来は鞄を手に持ち、駅の中へと入つてこいつとした。

「ちよ、待つて！ 未来！」

果歩は未来の腕を掴むと、その場に留まるように説得し始めた。

おかしいとは思つたんだ。

今日の集合場所、時間と共に未来たちとは別だつた。恭平さんいわく、女の人たちには色々と準備があるから、と言われその場は納得したが、よく考えてみるとおかしいことばかりじゃないか。

「ごめんな、未来」

果歩の説得を受けながら、呆然としている未来に俺は近づいていた。俺は知つていたのに、気付いてあげられなかつた。

「ごめん」

俺がもう一度謝ると、未来は首を両サイドに振つた。

「悠は悪くないもん」

「いや、でも…」

未来は大きくため息をついて、果歩の顔を再び睨みつけた。

「今回だけは許す。だけど、もし次こんなことがあつたら、私帰るからね！」

ふいっとそっぽを向いて、宿谷へと入つていった。未来は何よりもこの旅行を楽しみにしていた。この雰囲気をこれ以上壊したくなかつたのだろう。

未来の後についていき、格部屋に分かれて荷物を置いた。どうやらこの宿谷は一人部屋が最高らしく、三人同じ部屋に泊まることはできないらしい。

とこうことで、俺は龍之介と同じ部屋になると聞かされ、部屋へ案内された。

405と書かれた部屋のドアのぶをまわす。鍵はかかっていなかつた。龍之介は先に到着しているのだろうか？

玄関の奥にある襖を開けると、そこには思わぬ光景が待っていた。

「「え」」

一人の男女の声が重なり合つ。

「「なんで」」

田の前にはいつも見ている、あの人が座っていた。

「未来ー!?」

「悠ー!?」

まさか、俺達…はめられたのかー!ー!

恭平さんがいると思われる部屋へと俺は迷わず走った。こんな事が
あっていいわけが無い。正直、一緒に部屋なのはすぐ嬉しいのだが、俺が大将だつて知られそうで怖いのだ。

「恭平さんー!」

俺は声をあげて、恭平さんの名前を呼んだ。

「おーだい…、悠かあー!」

一応気を使ってくれているのだろうが、そんなことお構い無しだ。
俺は恭平さんの傍まで一直線に足を運び両手で肩を掴んだ。

「な、何を…してくれているんですかあー!..」

俺は、旅館中に響き渡るのではないかと思うくらい、大きい声を張
り上げた。

#29 そして、事件は起る（後書き）

テストも無事終わり、本日から夏休み生活となります。
急げず、作者がしっかりと生きていけば、しっかりと執筆をさせていただきたいと思います。

作者にとって、読者様の声が何よりも嬉しいです。

感想等、お待ちしております。

#30 悠の…馬鹿あ…！

あの俺の叫び声を聞きつけて、恭平さんと龍之介以外の3人もこの部屋に集まってきた。

「ビ、ビ! したの…?」

一番に声をあげて部屋に入ってきたのは果歩だった。未来はとこうと、一番後ろでモジモジしている。そりや、俺達は一緒に夜を過ごしたこと…はあるけれども！ あれは、事情が違う。あの時は抱きしめていたら、知らぬ間に時間がたつてしまつて、一緒に夜を過ごしたという感覚にはなれなかつた。今回は、そのときと違つて心構えをしなきゃいけない。故意で一緒に部屋で夜を過ごすのだ。

「いやあ、悠がいたなり怒鳴り込んできただけや」

「シシと笑う、反省する色を見せない恭平さんに俺は少しだけ呆れた。

果歩は、未来の顔をじっと見て「あ～」と呟く。

「ナウニハヒトネエ

「ナウニハヒトナエ」

果歩と恭平さんは何か通じるものがあるひっこ。あの会話だけ全てがわかつたようだ。

「ナウニハヒト…ビヤナコですよ

「まあ、別にいいじゃない！　付けていいんだから」

果歩も恭平さんのよつこいシシリと笑いながら、俺の肩をポンポンと一回叩いた。もづ、この人たちに何を言つても無駄だ。

「…わかりましたよ」

俺は諦めてそう呟くと、自分の部屋の玄関に放置してある鞄を整頓するために戻った。そのとき、恭平さんと果歩に何か言われていたが気にしない。

「まあ、うん。俺は大丈夫だから」

一緒に部屋へと戻った未来に俺は呟く。恋愛完全マスターによると、好きな男性と過ごす初めての夜は怖い。なので、男性の方は焦らずゆっくり相手を見ながら、事を進めましょう。と書かれていた。

未来は天然だから、正直怖がっているのかはどうかは知らないが、とりあえず何もしなければ大丈夫だろ？

「う、うん」

鞄に目をむけながら、未来はそう返事をした。それにしても、未来は何故かさつきから「うひひ」を向こうといつとしない。どうしたものだろ？

「みーくー！」

俺はぴょんっと跳ねて、未来の隣へとつぶ。

「どうした？」

少し頬が赤い気がする。もしかして風邪か？ 旅行前になると、かならず風邪を引く人とかよく聞くからな。

「熱？」

俺はそう言って、未来の額へと手を伸ばしたが、なぜか未来はそれさえも避けてしまう。もしかして、本当に風邪なんかじゃないのか？

「未来」

俺は名前を呼ぶと、未来の顔を両手で無理やり俺のほうを向かせ、俺の額と未来の額を合わせるように、顔を近づけた。

「ちよ、悠…」

そして、額をあわせる。

「別に、熱ないじゃん」

「…く？」

俺はそつと額を離すと、未来の顔をそつと覗いた。

「大丈夫か？」

「え、あ……」

未来が俯いてしまった。どうしたんだよ。

「悠の……馬鹿あ……」

そう言つたまま、未来は部屋を飛び出していつてしまった。つて、俺は何か悪いことをしたか？　ただ風邪か心配になつただけなのに。

「おー、未来ー！」

俺はすぐさま立ち上がりつて、未来の後を追つた。

その後、未来に追いついた俺は理由を聞いた。まあ、結果から言つと何も教えてくれなかつたわけだ。

「なんだ、痴話喧嘩あ？」

俺達が廊下で話し合つていると、そこに美智子がやつてきた。美智子に告白されて以来、俺は美智子を正直避けってきた。未来だつてそうぢり。出来るだけ、俺と未来が一緒に居るところを見られないように気をつけてきたはずだ。その証拠に、今未来の顔はどこか悪しそうな顔をしている。

「私のおかげで付き合えたんだから、そんなすぐに別れないでよねー！」

でも、どうやら美智子はその「なんて全く似ていないようだ。

「え、あ、うん」

未来は作つた笑顔を美智子に向けた。正直、別れるつもりは微塵もない。

「じゃあ、先に行つているからね～」

美智子が手をフリフリしながら、俺達に背を向けた。って、え？
先に行くつて…どこに？

俺達は意味も分からず、その場に立ち尽くしているだけだった。

「お前等遅いねん！！」

「す、すみません・・・」

そして、あの美智子の発言から、そこまでたどり着くまでに30分
かかった。

あれから部屋に戻つた俺達は、美智子がどこに発言の意味を一人で
考えていた。俺達はこれからのスケジュールを一切聞かされていな
い。

数分後、恭平さんから思わぬメールが届く。

『お前等今どこにいるねん？　早く浜辺ここんかあ……』

「…浜辺？」

俺は疑問に思い、未来にメールの内容を伝えてみると、俺と同じ反応を見せた。

とりあえず、恭平さんに言われたとおり、俺達一人は浜辺に向かったのだ。

それからが大変だった。

浜辺についたら、上半身裸の龍之介と恭平さんがいるし、ビキニ姿の果歩や美智子もいる。つまり、泳ぎにきていたり、俺達はこのとき気付いたのだ。

恭平さんに軽く怒鳴られ、水着を取りに戻つて、もう一度浜辺に戻つてきたらこの有様だ。

「はあ、まあいいや。それよりも早くみんなで遊んでハッスルしよ
うやーー！」

そう言つて、子供みたいに恭平さんは海へ向かつて走り出した。それに続いて、果歩と美智子も走り出す。俺と未来と龍之介はというと、近くにあの人たちが立てたであろうパラソルの下で腰を下ろし

た。

「眩しいねえ」

俺がそう呟くと、未来は何も言わず首を縦に振るだけだった。

「まだ、怒つてゐ？」

何で怒られたのかはさっぱり分からぬが、あの状況からすると俺
が悪いのだろう。

「べ、別に…怒つてないし」

そう言いながらも、俺の顔を見よつとせしない。やつぱり、怒つて
いるじゃないか。

「みくつ！」

俺は未来との距離を縮めた。未来は驚いた顔をしているけど、気にしない。

「俺、未来のこと好きだよ」

そつと耳元で呟くと、未来は顔を真っ赤にして俯いてしまった。本当に可愛いんだから。

俺が二二二二二していると、向こうのまづから黒歩の声が聞こえてきた。何を言っているかは分からぬが、手を振つてゐるとこ見ると、来いといふことだらう。

俺と未来は顔を見合した。何故かそのとき笑みがこぼれてきて、一人で声を出して少し笑う。

俺は龍之介を呼び、果歩の下へと足を運ばせようとした。

「悠、待つてよ。」

日焼け止めを急いで塗っている未来を見て、俺はもう一度微笑む。そんな俺を見て未来は頬を膨らませた。

「もつ、ちょっと手伝つてよ。」

涙目になりながら俺に訴えてくる未来の表情は、愛おしかった。龍之介に先に行つてと言つと、龍之介は無言でうなずき、果歩達の下へと向かっていく。

俺は龍之介とは反対の方向に足を運び、未来のところへと歩み寄つた。

「ほれ」

俺は未来が手に持つている日焼け止めを手に取り、背中を向けてさせた。それからほじ想像にお任せするとじょつ。俺の頬がにやけていたのは、言つまでもなきつだ。

#3-1 ハジマでいったねん？

「なあ、悠」

「はい？」

「未来ちゃんなんじでこいつたねん？」

「はあー？」

俺は思わず砂場へと寝かしていた体を起き上がらせる。

今、俺と恭平さんは泳ぎ疲れたこの体を、パラソルの下で癒していったところだ。龍之介は最初から泳ぎに行っていないため、俺達の横で本をずっと読んでいて、海辺にいる元気な女子三人組は、ビーチボールでバレーらしきものをしてくる。

「だ・か・ら、最後までいったんかつて聞いてるんや」

悪魔の笑みを浮かべながら俺にそう聞いてきた。

「ど、どけでも進んでいませんよ」

キスさえも、あの付き合い始めた時が最後なのだ。それ以上が俺達にあるわけがない。

「まあ、未来ちゃんも、悠もシャイそつやでな

はあ、とため息をつかれても、俺は今ままでいこと思つてこる。

「これ以上先に進んではいけない気がするからだ。」

「やつこいつ事にこじれおこいくださー」

俺は起き上がりて、体を、再び砂場へと寝かせた。

「恭平さんは……」

「どうまでこったんですか？」と反撃してやがついたのだが、この人は俺がいい終わる前に答えた。

「最後まで行つたで。シャイな君達とは違つかうなあー。」

「そんな恥ずかしい」とを堂々とこぐる恭平さんは拍手を送つてあげたい。

「まあ、別に人それぞれペースがあるからな。気にする」とはあらへん。むしろ恋愛をするひと、未来のやんも困つやけいかもしけれへんからな」

こつに無く真剣な顔で恭平さんは恋愛を語り始めた。

「は、い」

俺達のことを少しばかり考えて、ちょっと嬉しかったりもする。だけど……俺達のこの関係は、恋愛といえるのだろうか。未来は俺のことを何も知らない。騙されてこる」とやがても気づいていない。

それを恋愛といえるのだろうか。

「恭平ー。」

海辺のほうから、果歩の声が聞こえた。恭平さんと俺は、少し体を起き上がらせて、そつそつと田をむける。

「ほり、悠輔もおこでよー。」

果歩の声は透き通るような声は、50㍍は離れているであらう俺達の耳まで届いた。

「ほな、行くか」

恭平さんはその場に立ち、砂を払い落とすと果歩たちの元へと走つていった。もちろん、俺はそんな事が出来るわけも無く、砂を払い落とすとむづくつと歩いていく。

それから俺達は、一緒に泳いだり、ビーチバレーをしたり、笑い合つていた。本当に楽しかった。自分が未来を騙していることさえ、少し忘れそうになるぐら)。

そんな遊びは日が暮れると、する気力も無くなつて、俺達は宿谷へと戻つていた。その後はお風呂、ご飯を済ませ、各自自分達の部屋へと足を運ばせた。当然のじとく、俺と未来は同じ部屋。ぐつたり地面に倒れた俺のそばで、未来は今日あつたこと、楽しかったことを喋つてくれていた。

「未来ー。」

うつ伏せになりながら、少し背をそつて言葉を発したからだらうか、

少し甘い声になってしまった。

「なあに？」

未来はそんな俺に会わせるかのような口調になつてゐる。

「づがれだあ……」

濁音つきでそういうと、未来は、あははと笑つておつかれさまと言つてくれた。もう一度未来の名前を呼び、俺は未来に触れるぐらいいの距離まで寄つた。

「未来？」

いつもこの所に来ているからだと思つ。俺は自然と未来に好きだと呟いた。

「わ、私も好きだよ」

未来はいつも言わないその言葉を、照れながら言つてくれた。久しぶりにその言葉を聞いた俺は、心の底から何からは分からぬ物がこみ上げてきた。

「み、く」

俺は未来の手をとると、体を少し起き上がらせた。未来はそんな俺の顔をしっかりと見てゐる。自然と、俺達の顔は近寄つていった。

凄まじい音を出して、俺達がいる部屋のドアが開いた。

「な、何！？」

俺と未来は驚いて、ばつと距離を取る。

「未来うーー！ 悠君ー！」

そう言つてきたのは少し酔っ払った様子の果歩だった。

「ど、どうしたの果歩ーー？」

未来はあたふたしながら、果歩のそばへと近寄つていいく。

「もしかしてお邪魔だつたあ？ よかつたら皆で何か怖い話でもしようかなあつて思つたんだけども、お邪魔なら仕方ないねえ」

「シシ、と恭平さんの笑い方を真似するかのような笑い方で俺達にそう言い放つた。もちろん、俺達は一人揃つて思いつきり否定したのだけれども。

「じゃあ、おいでー！」

果歩はそう言つて、自分の部屋へと戻つていった。話に聞くところだと、果歩達の部屋がこの三部屋の中でも一番大きいらしい。

俺達は少し身なりを整えなおすと、果歩たちが待つ部屋へと向かつた。

「やつと来たかあ！」

部屋へ踏み入れると、恭平さんや龍之介たちも居た。部屋の中心部分に口ウソクを置いて、それを囲むように円になつて皆座っている。

「なんで、こんな座り方なんですか？」

俺は苦笑いしながらも、果歩たちに聞くと、どうやらこの座り方が定番らしい。俺に過去経験は無いから、そういうことをても知らなかつた。

「こんな風に怖い話をしようとか言い出すのって、どれぐらい久しぶりだらうね？」

美智子はワクワクした表情で、果歩と話していた。俺達は空いている場所に座つたのだが、いまだに始まる気配は無い。

俺は隣に座つている未来に、これからすることの大体の内容を教えてもらつた。部屋の明かりを消し、口ウソクに火を灯したら、一人ずつ怖い話をするらしい。

怖い話を出来るような体験は俺には無い。だから話す内容も無いのだ。どうしよう、と未来に相談しようとしたとき、美智子が今まで明るかつた部屋を闇へとかえた。その電気が消えると、さつきまで少しはしゃいでいた恭平さんまでもが静かになつた。

果歩が口ウソクに火をつけると、じゃあ私から行くね。と言つて果歩は話し始めた。

その話は、ある県の山奥での話らしい。4人家族がお婆ちゃんの住んでいる山小屋を訪ねてみると、そこには誰もいないのだそうだ。夜も遅いといつことで、仕方なくその小屋で一夜を過ごす。そうとしたある家族は、ある異変に気付く。少しずつ物の位置が変わつていつているというのだ。包丁を使つていないので、いつの間にか流し台の中にあるとか、おばあちゃんの寝床だった部屋に電気がいつの間にか点いていたとか。

そんな内容の怖い話を果歩は話していた。それにしても、果歩の話し方は上手い。あまり怖いものとかには怖気つかない俺も、少し背中に冷や汗を流してしまつた。隣に座つていてる未来と言つたら、もう泣きそつた顔で俺の服の袖を引っ張つている。

時計回りに回るらしく、次は美智子の順番らしい。未来は果歩の右隣に座つているということは、結果的に最後ということだ。

美智子の話も終わつて、龍之介、恭平さんと回つてきた。次は俺の番だ。

ドキドキしながら、俺は少し前にキヨ爺から聞いた話を思い出す。確か夜の道路での話だつた気がする。

「次は、悠君の番ね」

もはや司会役となつた果歩にそつといわれ、俺はゆっくりと口を開いた。

「俺の知り合いから聞いた話なんですけど……」

そういうい始めるべ、みんなは俺のほうを注目し始めた。隣の未来は

ずっと俺の裾を引っ張っている。

「 県の夜の道路には、必ずヒッチハイクのお化けが出るらしいんです」

「ヒ、ヒッチハイク？」

恭平さんのその言葉に俺は相槌を打つと、話を進めた。

「俺の知り合いの男性が、その道路を走っていると、後ろのほうに何かいる気配がしたらしいんです。そして恐る恐るバックミラーで確認してみると、誰も乗っていないはずの後部座席に、顔を伏せてびしょ濡れの女人が座っていたそなんですよ」

俺がそういうと、恭平さんはびくっと体を動かした。

「その男性は、後ろを振り返るのが怖くて、そのまま運転していたらしいんです。だけど、そのままじゃ駄目だと思った男性は、もう一度バックミラーで後部座席を確認すると、誰も座っていなかつたんですね」

俺がそこまで言つと、みんなほっと息を吐いたのが分かつた。しかし、話はここから始まる。

「だけど… だけどですね、よく気配をたどつてみると、なんと… 助手席へと移動していたというんです」

そういうと、俺の左に座っている未来の俺の服を掴む力が強くなつた。

「そして言われるんですよ。『地獄山までお願ひします…』って…

静かにそつこつと、周りの空気が凍るような感じを俺は味わった。

「それに答えてしまつたら最後。そここの地元の人の話では、もう向こうの世界へと連れられていくらしいんです。そして、その知り合いは答えちゃつたんですよ。その質問に…」

みんなの俺を見る視線がよりいつそつ強くなつた。

「『そんな地名ありましたけ?』と…」

俺は軽くそつ言い放つた。

「は?」

恭平さんは意表を疲れたのか、軽く裏返つた声で俺の顔を見てそう言つた。

「まあ、何も無かつたらしいんですよ。何かあつたら、この話は聞けていなかつたですしね。そのまま無事に家に帰つたやうです」

俺は軽く微笑みながらそつうと、軽く笑い声が聞こえてきた。隣の未来は笑つてはいなかつたが。多分、自分のことで精一杯なのであつ。

この後聞ける、未来の話に俺は胸を高鳴らせ、闇に乗じて未来の手をそつと握つた。

#31 エリオでいったね？（後書き）

誤字脱字のため、本当に申し訳ござりません。
ただいま、推敲、修正のため少しずつですが、小説を読み返しております。

もしかすると、更新時間も遅くなってしまう可能性が出てきますので、そのへんはご了承ください。

本当に申し訳ござりません。

#32 僕信じて

「あはは……」

笑い止ることを知らない恭平さんは、大声をあげて笑っていた。

「も、やめて……」

俺の隣に座っている未来は、恥ずかしさのあまり俯いて顔をあげようとしてしない。

未来の怖い話を聞いていた俺達は、正直本当に恐怖を感じた。俺も「いやあで冷や汗を流したのは初めてかもしねないといつぽど」。

だけど、今恭平さんは笑っている。それもそのはず、未来は一番盛り上がるところでかんでしまったのだ。その後も、カミカミ状態。途中で恭平さんが笑い出して話は終わってしまった。

「ほ、ほんま」「めんな！ わ…笑いが…」

そして、また恭平さんは笑い出す。

「もう、恭平さん。笑うのやめてあげてくださいよ」

俺は恭平さんに頼み込んだが、了承したのは口だけで笑うのをやめようとはしない。恭平さんいわく、止まらないそうだ。ビニがそんなに面白いのか俺には分からぬが、恭平さんのツボにはまつたらしい。

「未来、気にする」とないからな?」

俺がそういうと、未来は俯きながら少しだけ首を縦にふった。

それから数分、恭平さんもやつと落ち着いたのか、笑うことも無くなつた。そのころには未来も元気を取り戻していく、果歩たちと一緒に話していた。俺は龍之介とのんびりその光景を見ているだけ。これじゃあ、学校にいるときと何も変わらない気がするが。

そして時間が経ち、魔の時間は俺の元へとやってきた。

就寝時間だ。

恭平さんは、このままこの部屋で泊まればいいじゃんかあ！ と言つていたが、そこは果歩が却下。

そして、自然とみんなの足並みは各自の部屋へと向かっていく。

「…まあ、ベタつちやあベタだよな

俺はそう呟いた。部屋につくと、一つの布団が引っ付いて置かれているのだもの。いつの間に、宿谷の人ぐ俺達の寝所をセットしてくれたのかは分からないうが、この状況は昔からドラマや漫画でよくあるパターンだ。

「ほ、ほらー、こうすれば大丈夫だよー」

未来は俺に気をつかつてか、引っ付いている布団をズリズリと離した。正直、俺は引っ付いていたほうが嬉しいのだが、理性が持つかどうか怪しい。そこが欠点だ。

「あ、うん」

俺は戸惑いつつも、布団のほうへと足を運ぶ。

「今日はもう寝ようか」

そう言いつと、未来は軽くうなずき布団の中へと入つていった。俺もそれに続いて、自分の布団の中へと入つていく。それにしても、同じ部屋で好きな人が隣に寝ていると思うと、男の性なのか少し興奮してしまうところがあった。

「な、なあ！」

俺はこの緊張をほぐすために、未来へと話しかける。

「なにい？」

未来はもつ何も気にしていないような声で俺に返事をした。

「今日、楽しかったな」

「うん」

そして、その会話も一言で終わり、俺達の間には再び沈黙が流れた。昔から話す事を得意としない俺は、長話というものが苦手なのだ。特に話題を考えることについては。

何かしなくてはいけない、何か話せなくちゃいけない。

俺は理性を抑えるため、未来のほうに背を向けていた体を、そつと反転させた。

「未来」

俺がそつと名前を呼ぶと、向こう側を向いていた未来も恐る恐るこつちを見てくる。

「なにい？」

さつきとは少し違った上ずつた声。

「一緒に寝ようか」

俺は冗談交じりでそういうと、未来は黙ってしまった。やつらまつたかと思った時、俺の耳が、小さい未来の声を捉えた。

うん。

まさかそんな返答が来るのは思っていなかつた俺は少し動転しながらも、未来のほうへと布団を寄せていく。何もしない。何もしないと自分に言い聞かせながら、俺は未来の隣へとついた。

「大丈夫、大丈夫」

俺は自分に言い聞かせるように、小さく呟いた。それが未来に聞こえていたのか、ふつと笑う声が聞こえてくる。

「そんなに気にしなくてもいいよ」

笑い声交じりの未来の声。俺はその声で少し、ドキドキしていた心を少し落ち着かせることに成功した。

そんな安堵もつかの間、未来の温かい手が俺の手にそっと触れた。

「手、つなげつか？」

子供に言つたのように言われた俺は恥ずかしくなつて顔を背ける。今の未来は小悪魔に見えてきた。

「悠？」

一方的に話す未来の声は、どこか優しい音を奏でている。その声は俺の心を安らかにしてくれた。

「私ね、悠の優しいところ大好きなんだよお」

ギュッと手を握るのが強くなつた。

「ほら、怖い話をするとき、私の緊張をほぐすために、手を握ってくれたでしょ？ 本当に嬉しかったんだよ。まあ、最後は失敗しちゃつたんだけどね」

あはは、と笑いながら未来は俺の顔を見ててくれた。それと同時に、俺の中にひとつつの疑問が浮かんできた。

俺は、こんな幸せを味わつていいい人なのだろうか？

未来を騙しているのに、この笑顔を俺のものにしてもいいのだろうか？

「未来」

俺はそつと未来の背中に手を回した。未来の体が少し硬くなつたのが分かる。

「何もしないから大丈夫だよ」

俺は二ツ「コリ」と笑うと、未来も安心したのか体の力は抜けていった。

「聞いて」

俺は未来の耳元に口を持っていくと、小さな声で話し始めた。

「…俺を信じて」

不思議に思つたのか、未来は何かあつたの？ と問いを投げ返してきた。

「何があつても俺は未来が好きだから」

俺はその問いを無視するかのように、言葉を放つた。

「俺、未来が居ないと生きていけない」

けど、これ以上は何も言つてはいけない。今は、まだ早い。

「未来」

涙を堪えるかのように、俺は未来の名前を呼んだ。

「大好きだから」

未来を抱きしめる力が、知らぬ間に強くなっていた。

「「めん、「「めんな…」」

今まで言えなかつた…いや、言つてはならないその言葉をそつと呴くと、未来は俺に何も聞かず、分かつたと言つて俺の背中に手を回し、そつと撫でてくれた。

「いいよ、無理しないで」

未来の優しい声は、俺の心の底まで届いて、再び安らぎが俺の元へとやってきた。

「私も大好きだからね」

そして未来は、少し俺の体を押しのけ、見つめてきた。

「ね？」

「こいつと笑つた未来の顔を、俺はもう忘れることは出来ないだろ？」

俺は自然と未来の口元へ、手が伸びた。

「んっ」

親指で未来の唇を触った。未来の漏れる声、未来の笑顔、未来の全てが愛おしい。俺は手を頬へとずらし、顔を近づけた。

「未来」

俺は名前を呼び、キスをした。

罪悪感であふれるこの日々を、俺は耐え抜くことが出来るだろうか。

何もかも未来が知ったとき、俺は耐え抜くことが出来るだろうか。

そして、未来が居なくなつたとき、

俺は生きることを耐え抜くことが…出来るだろっか。

#33 恭平さんは大丈夫

「悠

俺は君を泣かさぬ事は出来ないのだろう。

「悠、起きてしまえ！」

君の笑顔を見たいのに

「起きてついてばあー！」

僕はまた君を泣かしてしまおうのだらう。

「起きなきや、放つていぐぞー！」

何故、俺はこんな事をしているのだろう？　ただ、笑顔を見たいだけなのに。

ここに居たいだけなのに。

「悠ー！」

さつきから、俺の体をグイグイグイん揺らしている彼女は、笑いながら俺の名前を呼んでいる。

「はあー！」

俺はその幸せな時間を味わいながら、体をゆづくつと起しだした。

「おはようございます。」

そういうと、未来は照れながら馬鹿っと声を張った。いつまでも、この時間が續けばいいのに。そう願うようになってしまった。

俺はゆづくら未来の顔へと近づけていくと、未来も観念したのか目を閉じた。

ドン・シ!

「ほえあああーー！」

未来は驚いて、俺とは反対方向に飛びのく。また、この展開か。

「未来、悠君起きてるう！？」

元気よく俺達の部屋へと入ってきたのは、再び果歩だつた。この前にも似たような展開があつた気がする。俺はもう慣れたのだが、未来はそうでもないようだ。この前同様、未来は焦つて果歩のもとへと近づいていった。

「また、お邪魔だつたかな？」

「シシリと悪魔の笑みを見せながら、果歩は未来を無視して俺に聞いた。俺は丁寧に否定の言葉を放つ。

2日目の朝。俺達は慌しくも、樂しくなるはずの一日起ました。

「今日は、何するんだろ?」

果歩騒動で、少し時間は掛かつたが、俺達は服を着替え終わり、廊下を歩いていた。果歩の話によると、宿谷の玄関付近に集合らしい。

「お、悠!」

俺達の前方、つまり宿谷の入り口からは、恭平さんの声が聞こえてきた。

「すみません」

俺と未来は、みんなの姿が見えると少し小走りになる。

「また、お前等が最後やないか! イチャイチャしこんなよ。俺も果歩とい!」

そこまで言つと、果歩のパンチをお腹に食らったのか、喋らなくなつた。

「それじゃあ、行こうか!」

殴られて、喋れなくなっている恭平さんに代わつて果歩が先頭を歩き出した。本日も昨日と同じ、何をするかを聞いていない。龍之介に聞いても、分からぬといふ話だ。

「よし、着いたよ!」

「男共は用具一式借りてきてー。私達は、食料の調達に行つている

歩くと一五分。俺達は田畠地に着いたようだ。

から

果歩はやつぱりと、女達を連れて何処かへと歩いて行つてしまつた。

周つを見る限り、ここはキャンプをするところのようだ。用具一式をもつてこさせ、どうこうことなのだろうか？ 聞きたいにも、恭平さんは腹を押えて喋りたくなさそうにしてくる。いつまで、そうしてこるんだと問いたいほどだ。

「よ、よし行ひやないか……」

苦しそうな声が、俺と龍之介の背後から聞こえてきた。どうやら、もつ難れるよつこせなつたらしく。

ゆつべつと歩く恭平さんの後ろを俺達はついていった。

「すんません……」

ある施設に入ると、恭平さんは受付のおじさんに話しかけた。すると、どんどん話は進んでこそ、あつとこう間に誓約書まで持ち込んでいく。さすがは苦しんでこるとはいえ、龍之介の執事だ。

「よ、よし……悠ま」れ、龍之介はいつもを頼む

少し、それよりかはマシな話し方になつている恭平さんの言ひ方を、キャンプに向知らない俺は従つだけだつた。

全てを運び終わり、ベンチで30分ほど待っていると、未来たちが姿を現した。

「おひまつたせーーー！」

そう言つたのは、もちろん果歩。恭平さんはその声で、すっかりと元気になつたのか、ベンチに寝かせていた体をすくつと起き上がらせた。

愛の力は絶大と恋愛マスターに書いてあつたが、本当にそういうだ。まあ、恭平さんがこいつなつたのは、果歩のせいなのだが。

「よつしゃ、準備に取り掛かるか！」

恭平さんはそう言つて、タオルを頭にグルッと巻きつけた。

「悠、龍之介！ 新を持ってきてくれへんか？ 僕は鉄板の準備とかしどくから」

「薪つて……薪ですよね？」

「は？ 他に何があるひちゅうねん！」

盛大なツツ「ミミ」を恭平さんから受けたが、薪というのは俺の知識によると、燃料になるものだ。たとえば、木を電動ノコギリで切り落とし、その丸太をさらに細かくしたもの。

… その作業を、俺と龍之介にしていいのかー？

俺は困惑しながらも、龍之介の後についていった。どうやら、龍之

介はこうこう行事を少なくとも一度はしたことあるよつだ。だって、俺の知らないことを知っているから。

「これ

そうつ言って俺に渡したのは、小さくなつた丸太…といつか木だ。

「これ？」

「やつ

そこは、少し離れた場所にある、前後ろに壁がない木を置く場所のようだ。どうやら、ここから火につけるための燃料を持つていいつてもいいらしい。

「泥棒…じゃないよな？」

俺の問いに、龍之介は間髪をいれず頷いた。そして、俺達は薪を一人5本ずつぐらい持つて恭平さんの下へと戻る。

「これでいいですか？」

「おお、十分や…」

ニシシと笑いながら、ありがとなと恭平さんは呟いた。その後の恭平さんの動きに、俺達一同驚きを隠せなかつた。食材をきるところから、全てを焼くところまで、何もかもを恭平さんがしたのだ。

女達には手伝わんくともいいで！ と言つて席に座らせ、俺達にはもう用無いから、お姉さん達と楽しく喋つて来いやと言つてきた。

「よし、食べるかーー。」

恭平さんが作った焼きそばが、そりそりと美味しそうに並べられていた。

「やあ、恭平す！」こんだね……」

果歩は驚きのあまり、田を見開いていた。

「何や、ずっと一緒に居たのに、今更気付いたんか？」

軽く笑いながら、恭平さんはいただきますと言つて、『ご飯に手を伸ばした』。

俺達もそれに続き、『ご飯にありつく。その『ご飯の味は、多分一生忘れることはないのだわ』。美味しかった。ただ、それだけではない。本当に楽しかったのだ。

「どうや、美味しいやろ？』

恭平さんが皆に意見を求めるが、皆はいつもに頷いた。あのちやらけた恭平さんに、こんな才能があるだなんて考えられたのは俺と龍之介ぐらいだわ。だって、恭平さんが執事と知っているのは、俺達だけなのだから。

… そういえば、恭平さんは果歩に、職種は執事という事を言つてゐるのだろうか？ それも、龍之介の側近ということを。

「恭平さん…」

果歩や、未来、美智子たちが洗い物をしているとき、俺は疑問に思つたこの質問を投げかけた。

「何や？」

「果歩さんは、恭平さんが執事だと言つ事を知つていいんですか？」

俺のその質問に、恭平さんは表情を固まらせた。

「え、何やいきなり……」

動搖を隠しきれていない。どうやら、果歩には言つていよいようだ。

「ただ、知りたかっただけなんです」

俺は自分の好奇心を恭平さんにアピールすると、観念したのか真実を話し始めた。

「大学生つて言つてるねん」

あはは、と笑いながら恭平さんの田は果歩の方へと行つた。

「俺の職種は、ちょい特殊やろ？　あ、洒落と違うで？　執事……なんて、ちょっとと言へんくてな……。別にやらしい仕事でもないのに、なんでやろ。昔から抵抗はあるねん」

恭平さんの悲しそうな田を俺は久しぶりに見た気がした。

「それに、あんまり都合の取れへん仕事やろ？　余計に言つにくくて

な。しかも龍之介の。あ、これは変な意味とちやうで？　…黒歩にもいつかはいわなあかへん」とは、知ってるんやけどな」

そういうと、恭平さんは俯いてしまった。

「恭平さん…」

そして、俺は恭平さんの言葉に胸を打たれた気がした。今の俺の状況と同じなのだから。いつかは言わなくてはいけないこの嘘を、抱え込んでいる辛さは俺もよく知っている。

「恭平さんは大丈夫です」

そう言つしが、今の俺には出来なかつた。

#34 世界中の誰よりも

闇の中でバチバチと光を放つその火玉は、俺達にとって貴重な存在だ。夏の風物詩だと俺は思う。いや、世間一般的にもそうなのだろう。冬に店頭へと並んでいるのを見たことが無いから。

「うお、やつべえ！」

恭平さんの叫び声が、あたり一面に響き渡った。

今、俺達は花火をしている。恭平さんがどこから持ってきた大量の花火が俺達の傍に置いてあるのだ。

あのキャンプ場から少し歩いたところにある川。尖った石がゴロゴロとそこら中に落ちているが、靴を履いている俺達は怪我をする心配は無いだろう。

「悠もやろうよ！」

「おう」

ちなみに、俺は花火さえも初体験だ。今まで学校の近くから、またはテレビで打ち上げ花火といわれるものしか見たことが無かった。

俺は未来に呼ばれ、二ツコリ返事すると花火を手に取った。

恭平さんからライターを借りて、花火に火をつける…が

「あれ、つかねえ」

未来や恭平さんたちのように綺麗に火を放つことは無かつた。

「え、悠…」

もしかして、の言葉が聞こえたとき、俺の周りは爆笑の嵐となつた。

「は？ ちょっと教えてつて！」

何で笑われている？ もしかして俺は希少価値なのか？

「悠、それ…反対！」

どうやらこの花火は、あまり目立たないほうに火をつけるらしい。俺のこの失敗は今日だけで3回目だ。丸い筒型の花火も、俺がつけようとしたら、恭平さんにあわてて止められた。あの花火は横から線が出ていて、そこに火を点けるらしい。俺は真上から紙を破つてつけるものだと思っていたのだ。

「もう…」

未来は軽く笑いながらも俺に近づいてきて、丁寧に花火の点ける場所などを教えてくれた。

「ね？ 点いたでしょ？」

未来のその言葉とともに、俺の持つている花火からは綺麗な赤色と黄色が混ざった光を解き放つていた。

「うおっ」

初めて味わった手荷物タイプの花火を俺はびっくりして手を離してしまいそうになる。

「ほら、見て！」

未来の声がするほうに俺は目をむけた。

「ひつやつひつひつ…」

満面の笑みを浮かべながら、未来は花火を円を描くように振り回していた。

「未来」

俺がポツリとこぼした言葉は、周りに聞こえていないことを祈る。

「綺麗すぎ」

こんな言葉、未来以外の誰にも聞かれたくないから。

「ばかっ、悠！」

未来はあわてて、花火を回すのをやめてしまった。俺は未来の真似をしてまわそうとするが、俺が持っていた花火の光はいつの間にか消えていた。

「ほら、もう一本！」

未来から貰った花火に、今度は間違えないよう火を点ける。

「すげえ！」

俺は花火を振り回していると未来は、あははと楽しそうに笑つてくれた。どうやら、こうやってすると一瞬だが、俺達の目の網膜に光が焼き付いて残像が残るらしい。俺はそれを利用してハート型を描くと、またもや未来に馬鹿っと言われてしまった。

「次はこれね！」

俺の花火が消えるころに未来が持つてきた物は、ひも状のものを小さく平らに丸めたものようだ。

「何これ？」

俺の不思議そうな質問を無視して、未来はそれに火をつけ地面に置く。

「え？」

俺の不思議な声とともに、その地面に置かれた花火は…俺を襲つてきた。

「未来！　たす…」

地面を暴れまわっているその花火から逃げるよつて、俺は少し走ると、遠いところから未来の笑い声が聞こえてきた。その姿を見て、果歩や美智子も笑つてきた。

それから時間が経つにつれ、どんどん大量にあつた花火は少なくな

つていき、残り数束となつてしまつた。

「これが最後か」

そう呴く恭平さんから、俺はひとつ小さな玉が点いた花火を貰つた。それを皆に一つずつ配る。全員に配り終わると、花火はもうなくなつてしまつた。俺は未来の傍に行き一つの質問をする。

「何これ？ ビビリつけるの？」

俺のその言葉に、皆は絶句。

「線香花火も知らへんのか！？　まじ、悠はどんな生活を送つてきたねん！　これは花火の最後と決まっててな…」

と、そこから数分にわたつて恭平さんの花火への愛情を聞かされた。

「あ、そりや」

その話が終わると、ぼそつと恭平さんは呴いた。

「これが最後の花火や。どうせなら賭けせんか？」

「賭け…ですか？」

「うん、賭けや。誰が最後までこの火玉を落とすかに残つとれるか
つかうつな

一シシと笑うと、恭平さんは皆に一つライターを渡した。

「最初に落とした人が、最後まで残っていた人のことをビリ思つて
いるか川に向かつて叫んでもらおうやないか」

「それは、男同士でも？」

果歩の小さな疑問に、恭平さんは当たり前やと答える。

「さあ、始めよう」

俺達は円になるように屈み、ライターに火を灯した。

「いっせえの！」

恭平さんが合図を送ると、皆は一斉に花火へ火を近づけた。

バチッと音を出して、俺の花火は火を放つ。周りを見てみると、ほとんどの人が俺と同じタイミングで火が点いたようだ。

「誰だろ？ねえ

果歩がワクワクしながら、そう呟くと一人の男が早くも脱落をした。

「あ

そり、俺だ。

どうやつたら、長持ちをするか全く検討の点がない俺は花火を結構揺らしていた。まさか、こんな終わり方があるなんて。

「悠、ドベな

いたつて真剣な恭平さんは俺の顔を見ずに、そう言った。皆は自分の火玉に夢中になつてゐる。

そして、一人ひとりと脱落して行き、残り一人となつた。

「よし、じゃあ叫んでもらおうか」

恭平さんが俺の後ろでそう促すと、俺は大きく息を吸つた。

まさか、こんな展開があるかよ。

そう心の中で呴いたが、現状は何も変わりはない。

「俺も一位になりたかったなあ」

恭平さんがそう呴くと、笑いながら黒歩は、悠君に何か言われたかったの？ と呴いた。

龍之介は、少し大きめな石に腰掛けて、俺のほうを見ている。美智子は残念そうな顔をして、悠さん頑張れ！ と叫んでくれた。

よし、行くぞ。

心の中で俺は覚悟を決めた。とっても恥ずかしいが、これは仕方が無い。賭けは絶対だからな。

「ほり、未来ちゃん後ろ向いて」

恭平さんの声に何も反応をしない未来。未来も相当緊張しているのだろう。言われたくなければ、わざと負ければよかつたのに。

そう、一位になったのは未来だった。美智子とコンマ何秒差での勝利。負けた後の、美智子の叫び声は、本当にビックリした。相当一位になりたかったらしい。

「未来」

小さな声で川に向かって言つと、恭平さんからの怒鳴り声が入る。もつと大きい声を出せ、と。

それに対しても、美智子じやなくて良かつた。

美智子だつたら、何て言えばいいか分からぬ。それに、何も氣にしていない振りをしているが、未来だつて本当は美智子に少しなりと氣を使つてゐるのだ。

「こきます！」

俺は大声を張つてそりそりと、当たりはしーんと静まつた。

「俺は…俺は！　未来のことが大好きだ！　世界中の誰よりも愛しています！」

しばらく沈黙が続く。

俺のその言葉に涙した愛しい恋人は、小さくありがとうございました。

#35 なあ、キヨ爺

「キヨ爺、お願ひがあるんだけど……」

俺が唯一頼むことが出来る、キヨ爺に俺はしぶしぶ言葉を放つた。俺の真剣な面持ちに気がついたのか、キヨ爺は優しく接してくれる。

「どうしました？」

「うーん」と笑うキヨ爺を見ると、本当に俺の居場所だ、と実感してしまった。

「部屋……」

俺はボソッと呟くと、その次の言葉を放つた。

「部屋をひとつ、借りてくれないか？」

「へ、部屋つて……マンションの部屋ですか？」

キヨ爺の聞こに、俺は頷く。少し恥む様子を見せるキヨ爺は、ふうと息を吐き分かりました、と答えてくれた。

「ありがとう……」

俺はそのまま言葉がとても嬉しくて、キヨ爺に抱きついた。

俺が部屋を借りたいと思ったのは、未来が放ったあの一言のせいなのだ。

「悠、今度悠の家に行きたいなあ」

あの楽しかったキャンプが終わった数日後、未来の家で俺がゆったりしながら、ソファーに腰掛けていたときだつた。

「…は？」

思つてもいなかつたその言葉に、俺は思わず言葉を漏り出す。

「だつて、悠のことあまり私知らないよね？ 悠は私の家に来てゆつくりしているけど、私だつて悠の家で笑つたりしたいなあ…なんて」

あはは、と笑いながら未来は話しているが、俺は正直笑える状況ではなかつた。

「で、でも！ 無理ならいいんだよ？ その…私に言えないともあるもんね」

笑つていた声が、どんどんと小さくなつていく。そんな未来を見て、俺の家に来ることを拒むことが出来るわけない。このときは、何も案が浮かんでいないのに、肯定の意を示してしまつた。

「え、本当ー？ やつた！」

「あ、ああ…」

そして、その日は「」で帰宅とこう形になつた。

まあ、今となつて考えてみれば、完全に俺の失態だつた。もちろん、今俺が住んでいる家を見せるわけにはいかない。そんなことをしたら、全てがバレるから。

かといって、今更未来に断りの電話を入れる勇気も俺には無い。

結局、何も出来ない俺が頼つたのは、キヨ爺だつた。

「といひで、お坊ちやま

抱きついていた俺に、キヨ爺は話しかける。そつと離れて、キヨ爺の顔を覗くと俺は何？ と答えた。

「お部屋の大きさはどうじょうつか？」

「ん~、2LDKより小さいのがいいな

未来の部屋が2LDK。それよりも小さく言ったのは、未来より部屋が大きかったら、俺の親について色々聞かれると思ったからだ。

「かしこまりました

そう言つてニッコリ笑うと、キヨ爺は何処かへ行こうとする。そんなキヨ爺を俺は呼び止めた。

「どうなされました?」

「親父には…」

そこ今まで語つと、キヨ爺はニッコリ笑い、かしこまりましたと答えてくれた。

「あ、あとー。」

何度もキヨ爺を呼び止める俺。

「北区内にしてくれないか?」

俺のその言葉にニッコリ微笑んで、キヨ爺は何処かへと行ってしまった。

北区を選んだのもちゃんと理由がある。初めて未来に会ったとき、未来は西区と言い、俺は北区と言った。そこに矛盾をしてしまえば、何かと聞かれるかも知れない。とりあえず、俺の家柄について質問をされることは極力避けたいのだ。なんと答えるか、何を答えれば

ここのか俺にはそっぽり検討がつかないから。

次の日、キヨ爺の思い切った行動は俺を驚かせた。

「お坊ちゃん、起きてください」

夏休み、キヨ爺に起しきれることは、あまり無いのだが、今日せど
ひやり違つぱだ。だいみづひきせい

「ん…びつた？」

「出かけますので、準備をよろしくおねがいします」

キヨ爺のその言葉に、何かいつもと違つた物を感じた。すっと体を起
き上がらせると、俺は服を着替える。

「よし、どうした？」

俺がキヨ爺に質問をすると、辺りを一度見てからキヨ爺は俺の耳元
で「引越しの準備が出来ました」と囁つたのだ。

まさか、昨日の今日でそれを行動に移すと思つていなかつた俺は、
驚いてしまつた。恭平さんも、キヨ爺も、どうして執事といつも
は、全てにおいて行動が早いのだろうか。

「行きましょ」

俺が黙つてキヨ爺を見ていると、キヨ爺は一ヶ口笑つてそっぽく

た。俺は軽く頷く。キヨ爺が運転する車に乗り、田的地区へと向かつた。

「で、どんな所?」

聞くところによると、2DKらしい。まあ、それぐらいが妥当かな。さすがはキヨ爺。俺の思い通りに全てを運んでくれる。

キヨ爺と他愛もない話をしていると、田的地区に着いた。

「いい所じやん」

マンション7階建ての6階にある俺の部屋は、周りに高い建物が無いため眺めがとてもよかつた。

「ありがとう、キヨ爺」

そして、驚くことにその部屋には冷蔵庫からテレビまで、一人が普通に生活できるほどの生活用品が並べられていた。

冷蔵庫を開けてみた。まあ、うん。ここまで想像はしていなかつた。そこには、いかにもここに住んでいますよ、と言わんばかりの食材が置いてあつた。

「すげえ、キヨ爺」

思わずキヨ爺の名前を呼んだ。キヨ爺は謙虚にいえいえと返事をしたが、並大抵の人間にはここまで再現できない。長年生きてきたキヨ爺だからこそ出来る業だ。

「本当に、ありがとう。」

「いえ、お坊ちゃんのためならなんなりと」

これなら、未来を呼んでも大丈夫だ。キヨ爺のことだから、もつと細かい部分まで偽装してくれているのだ。ひ。

こじめでは、俺の心は喜びに満ちていた。この後、あんな出来事が起るとは思わなかつたから。

俺はキヨ爺にお礼を何度も言つながら、マンションを出た。

車の中、ふと思いつ出す。確か、ノートがもう無かつたと。俺はキヨ爺にお願いをして、駅前のデパートへと向かった。キヨ爺は、私が買つてきますと言つたが、全てをキヨ爺に任せることはない、と俺は言い放つた。

そして、俺は後悔する。

自分のこの行動の過ちを。

何故、気付けなかつた。

今日は土曜日。

夏休みのせいで曜日感覚が狂っていたせいか、俺は気付けなかつた。土曜日の駅前のデパートには、ほぼ毎週未来が来るつてことを忘れていたのだ。

「キヨ爺、これ…」

そして俺がノートを選び、振り返ったときだつた。

キヨ爺の「はい」という声。その後ろには、俺が今は見てはいけない人物の姿。

俺の愛しい未来の姿があつた。

「悠？」

驚きの表情を隠しきれない未来の表情を俺の瞳は捉えた。

「未来…じゃん」

俺は「…」「…」と固くなりながらも笑うことが出来た。

「なんで、…？」

未来のその問いに、俺はすぐ答えることは出来なかつた。

少しの沈黙の後俺はゆっくりと口を開く。

「えっと…ノートが欲しくて」

嘘を言える場合じやなかつた。別に、ノートを書くことについて嘘をつく必要はない。

「…」

やばい。

この質問は、今の俺に強烈な焦りをもたらした。キヨ爺は多分、未来のことを書類上でしか知らない。なんと言ひ詫すればいいのだ。

俺の回転はフル回転しながらも、今の状況に追いついてはいなかつた。そんな時、キヨ爺は口を開く。

「私は…」

キヨ爺、早とちつしないでくれ！

「悠の祖父です。貴方が、未来さんですか。よく悠からお話を聞かしてもらっているんですよ。とってもいい方だつて、私に自慢して

「元気めのへ

あはは、と笑いながらキ田爺は俺のまつを向き、なあ悠？ と囁つてきた。

「ああ

何かを考えるよりも先に、キ田爺の言葉に呑ませるかのように口が動いた。

「そうなんですか！ お恥ずかしい限りです。私、諸戸未来と申します。悠のお爺さんでしたか。いつも悠さんにお世話をなつております」

未来は丁寧に頭を下げた。

しかし、俺の頭は今の状況にさつきよつも追いついていない。何がなんだか分からなくなつていた。

なあ、キヨ爺。

何で悠の名前を知っている？　何で誤魔化した。
俺と未来の関係：俺が嘘をついていることを親父は：知っているのか？

もはや、頭の中はパンク寸前だった。

#36 僕を裏切らない

未来と『テパート』でさよならの挨拶をした後、俺とキヨ爺は車へと足を向けた。パニックになりながらも、しっかりとノートは手に入れるることは出来た。

だけど…

キヨ爺への疑問が、俺の中から拭えない。

いつ知ったのだ？

どうして、知っていることを俺に教えなかつたのか？

よく考えてみれば分かることだった。何でキヨ爺は冷蔵庫にまで、あんな細かい工夫をしてくれたのか。

知っていたからだろ。俺のことを、悠のことを。

最近は未来の温もりに浸りすぎていた俺の頭脳は、少し麻痺にかかっていたようだ。今までの俺なら気付いていたはずだ。

駐車場へつき、車の前まで行くとキヨ爺が後部座席のドアを開けた。俺は何も言わず乗り込む。

車を走らせること数分、重苦しい空氣の中俺は思い切って口を開いた。

「キヨ爺」

なあ、キヨ爺？

「何で“悠”のこと…知つてゐるの？ 未来との関係を何で知つて
いるの？」

俺のその問に、キヨ爺は何の迷にも無く答えた。俺が今日の『J飯
は何？ と聞いてゐるかのように。

「書類上で確認いたしました。私は、今回未来さんを見るのは初めて
です。お坊ちゃんの反応、そして“未来”と呼んだことにより、
私は彼女を“悠”的彼女と確認したわけです」

その言葉を聞く限り、俺の近辺を調べたのはキヨ爺ではなさそうだ。
それよりも問題がある。

親父だ。

「“悠”的ことは…親父知つてゐるのか？ 俺の…その…目的も知
つてゐるのか？」

その問に、キヨ爺の顔が一瞬曇つたのを俺は確認することが出来
た。

「……」

黙つてゐるキヨ爺に俺は苛立ちが増した。

「書類で見たつて言つたら！ ところが、親父は知つてゐるん
だろー？」

「…いいえ」

まさかの答えだった。

「お、親父は、本当に知らないんだな？」

俺は最後の確認をとった。ここまでして、キヨ爺が嘘をつくわけがない。俺は、キヨ爺を…信じているから。

「はい」

本当に親父が知らないなら、ここで疑問がいくつか浮き上がる。何故キヨ爺は知つていて、親父は知らないんだ？ 親父は、俺が未来と付き合っていることを知つていることは確認済みだ。

…親父は、書類をしっかりと見ていいなかつたのか？

俺が悩んでいるとき、キヨ爺はお坊ちゃまと呟いた。

「何？」

「お坊ちやまの周囲の状況を調べるようになつたのは、私で『じや』
ます」

その言葉を聞いた俺の心は時が止まつたかのよつだった。

「え…なんで…」

キヨ爺は知つてゐるはずだ、俺について調べられることを俺が嫌つ

ているところを。それなのにどうして？　どうして、キヨ爺は俺を調べた？

「私も仕事で『アゼ』こます。申し訳『アゼ』こません」

「仕事……」

キヨ爺が、俺を……。

「なあ、キヨ爺」

泣きそつた心を抑えながら、俺は言葉を放つ。

「俺が嫌いなのを知つていたよな……？」

キヨ爺ははつきりと『はい』と答えた。

「仕事だから、俺を裏切つて……いいのかよ！」

その言葉を吐いた後、俺の目からは涙が一つ、二つとこぼれた。

本当に悲しかった、心が痛かった。キヨ爺は、俺のことを一番に考えてくれていると思ったのに、大事してくれていると思ったのに、

キヨ爺だけは俺を裏切らないって……思っていたの。

「お坊ちやま」

俺の声が震えているのを知っているのに、キリ爺は俺に話しかけてくる。

「何だよー。」

俺は声を張つて、返事をした。そして、キリ爺は言葉を発する。思わぬ言葉、そして、俺の心を動かすようなことを。

「お坊ちやまは、未来さんに同じことをしているのではないですか？」

「え？」

「未来さんは自分を一番大切にしてくれていると思つていてる貴方に、名前も、住所も、年齢も、近づいた目的も…全て嘘をついているのではないですか？」

「な、にが言いたいんだよ」

そこまで言われて、気付かない俺ではなかつた。だけど、見たくなかつた。自分に良くない方向に向いていっているから。

向き合いたくなかった。

「しつかりと、考えた上で行動してみてはいかがでしょうか？」

さっきまでの威勢はどこに行つたのか。それほどまでに、俺の心はどん底へと落ちて行つていた。

車を降りると、一言キヨ爺に謝ると、ニシココとキヨ爺は笑ってくれた。

キヨ爺の言つとおりだ。俺は今、キヨ爺がしたことに回かいじをしようとしている。

いや、している。

未来を裏切つている。一番大切な人物を。

だけど、だけど…止まることはできない、もう戻れない。選択肢は進むしかないんだ。ここまできてしまった。

部屋に戻ると、俺は何故かまつさきに未来へ電話をした。今、動搖しているのに、俺としては冷静ではない判断だ。

「未来」

「ふつと血の音と共に、むこうからは未来の声が聞こえてきた。
「今日、びっくりしたよな」

あはは、と笑いながら俺は未来に話しかけた。未来はいつもと変わらない声で答えてくれている。

「なあ、未来」

「なに？」

「未来は俺のこと信じていろんだよね」

何を聞いているんだ俺は。

「当たり前じゃない！」の前だつて、信じてつて言つてこたよね
？ 悠、何かあつたの？」

「俺も未来のこと信じていろよ」

未来の問には答えず、「俺はそう言つた。ありがとう」と電話の
向こう側から聞こえてくる。

「いつ、家に来る？」

俺は軽く明るい声でそう言つた。それでもしなきや、俺の声はどん
どん音を下げていってしまう気がするから。

「明日がいい！」

未来の元気な声が聞こえると、俺は笑つて分かつた、と答えた。

そして、それから未来が今日『パート』であつたことを淡々と話して
くれた。どうやら、俺達と分かれた後、果歩たちに会つたらしく。

俺はそんな話を聞きながら、涙が零れ落ちてきた。さつきの言葉、
俺を信じているというものを思い出していたから。

「悠、泣いているの？」

不意に話を止め、俺に聞いてくる。やべ、声が泣いているように聞こえたのか。

「泣くわけねえだろ」

未来に心配されると、余計涙があふれ出でてくる。止まることを知らないこの涙は、俺の頬を伝つて下へと落ちていった。

「どうした…の？」

何の予兆もなしに泣いている俺を聞いている未来は不思議に思つだらうつな。

「いや、未来に会いたくて」

本当のよつな嘘のよつな言葉を俺が言つと、恥ずかしそうな未来の声が返つてきた。

「あ、明日会えるんだから！ ちょっと我慢しよう。私も、悠に会いたいんだから」

「うん、分かった」

その後、少し喋つて電話は終わつた。電話からはプーパーと言ひ悲しいメロディが流れてくる。

そして、俺は切れた電話に話しかける。未来、俺は謝つても許されないことをしているんだ。ごめん、俺を嫌いにならないでくれ。俺は未来を愛しているから、と。

俺のその届かない言葉は、苦しみを増やすだけだった。

#37 今のみの幸せ

「 いじが、悠の家かあ 」

未来は、俺の部屋に一歩足を踏み入れた。

「 狹いだろ? 」

俺が軽く笑いながらそういうと、あまり私の家と変わらない大きさだよ、という言葉が返ってきた。

昨日、俺はちゃんとキヨ爺の所へ謝りに行つた。キヨ爺は快く許してくれたが、俺はこの一番愛おしい人には許されないのだろう。

まだ、俺の正体を明かすつもりはない。出来れば、最後までこのままでありたい。けど、多分そう上手くはいかない。俺が“悠”であり続けることは、不可能だわ。

お金はある。戸籍や保険証、パスポート、その他全てのものは、お金を使えばなんとかなると思う。だけど、一番の問題は俺の心だ。

未来に嘘をつき続ける。

不可能に近い。よつは慣れだ、という言葉をよく聞くけど、これは慣れない、慣れてはいけない。大好きな人に嘘をつき続けること。このままでは俺の心が壊れてしまう。

「どうしたの？」

玄関で俺はぼんやり考え込んでしまっていたよつだ。

「『めん、『めん！ ちょっと、何か買い忘れたものが無かつたか
考えていたんだ』

「大丈夫だよ！ 悠は心配性だなあ。もしかしてA型？」

「正解だよ

「私はO型なんだよ」

そんな他愛もない話を俺達は少し続けた。今日の夕飯は、ここで未来と一緒に『ご飯を食べることになつてい』。しかも、未来の手作りだ。

「楽しみだなあ

俺の家のキッチンで、トントンと音を立てながら包丁を扱っている未来を見ながら俺は声を漏らした。

「ちよつと、あまり見ないでよー。」

ふうっと頬を膨らませて「うちを振り向いた未来。

「沸騰してゐる」

俺はそんな未来にそう言つて、鍋のほうを指差した。あわてて未来は火を消して、あぶなかつたあと咳いてくる。そんな未来を見ると俺は笑みがこぼれた。幸せだ。こんな、

「こんな日が続けばな…」

つい、思つたことが言葉に出てしまつた。

未来は沸騰事件に慌てていて、俺のこの言葉に気付いた素振りはない。

俺はそつと立ち上がり、料理をしている未来のほうへと近づいていった。未来に気付かれないように、後ろから何をしているか覗くと、キャベツを切つているようだ。

そして、俺はゆっくり未来を抱きしめる。

「ややつ」

びっくりしたのか、未来の声が漏れた。

「な、なななな何！？」

俺の突然の行動に驚きを隠せていない。そんなところがまた可愛いのだけれども。

「ん、未来つてあつたけえ」

夏休みとこうこの時期に、こんなこと言うのもおかしいと俺も思つ。だけど、俺はこの未来の温もりが大好きなのだ。

「 もう」

未来は大きく息をはくと、優しい声で俺の名前を呼んだ。

「 ん~?」

俺は未来の肩に顔を擦り付けるようにしている。すると、未来のお腹辺りに置いた俺の手には手の柔らかい感触を感じた。

「 私、こうじているのも幸せ。悠と一緒に居るの幸せだよ」

「俺も幸せえ」

泣きそうになつた。声が少し震えていたのかもしれない。甘えるよううに言つたのだが、うまく言えてなかつたかもしれない。

「 悠」

名前を呼ばれたと思つたら、未来は振り返つて俺を抱きしめた。

「 み、未来?」

普段なら考えられない未来の行動に俺は驚いてしまつた。そんな彼女は、俺の心拍音を上げるかのような、天使の笑みを俺に見せた。

そして自然と、俺の口は未来の唇を捕らえる。

「むつー回ー」

未来の要望に答え、俺はもう一度キスをした。今度は少し長い。

「ふはあ」

キスが終わると、未来のよく分からぬ息の漏らし方を聞いた。そんな未来が愛おしくて、俺は頭を軽く撫でる。

「それじゃあ、『飯作つてくるからそつちで待つてねー』

未来の言葉に俺は軽く頷き、元の場所へと戻つていた。

料理をしている未来の後姿を見る。多分、俺は夫として、家族としてこの後姿を見ることは無いのだろう。

今だけ、今のみの幸せだ。

本当はそうじゃないと願いたい。今だけだなんて考えたくない。

「未来」

俺は小さな声で未来の名前を呼んだ。

「はーっ！」

未来は大きな皿に盛つたサラダ、そしてご飯と味噌汁、その他のおかずを俺の前に置いた。

「上手やつ……」

それはお世辞ではなく、心の底から漏れた言葉。皿の前には未来が一緒に、お箸を持つて、食べる準備をしている。

「ありがと！」

未来はニッコリと笑うと、いただきますと呟いた。それに続き俺もいただきますと呟く。

一口、おかずを口の中へと運んだ。

「美味しい。未来、本当に美味しいぞ！」

ニシシと、声に出しながら笑っている未来を見て、俺は箸が進んだ。いつも一人で食べている夕食とは違い、未来と一緒に食べているからかもしれない。本当に美味しかった。幸せを感じた。未来の温かさをこの料理に感じた。

何もかもが俺には幸せに感じて、気が付く間もなくは皿の前にあつたはずのご飯全てがなくなっていた。

「早っ！」

「美味しかったからなあ」

俺は未来に笑つてそうこうと、未来も一緒になつて笑顔になつてくれた。

「未来、おいで」

ご飯を食べ終えた俺は、未来の温もりが欲しくなつて未来を呼んだ。未来は「ご飯中だから」と言つたけれども、お構い無しに俺から未来へと近寄つた。

もう、と未来は言つていたが、なんだかんだ嬉しそうだ。未来の後ろで回ると、俺はぎゅっと未来を抱きしめた。

「食べにくいでしょ！」

「気にしない、気にしない

俺はそう言つて、未来の肩へと顔を下ろし目を瞑つた。

「未来

「何い？」

「…大好きだよ

その後、未来は何を言つたのかは分からなかつた。俺は、未来の温

もりに負け、昨晩あまり眠れなかつた体を睡眠といつものに預けたから。

#37 今のみの幸せ（後書き）

更新遅れてしまい申し訳ござりません。

#38 信じていいんだよね？

終わることがなればと祈るほど、その時間は短く感じる。

笑顔で満たせばいいと

幸せで満たせばいいと

「大将君」

そり、思っていた夏は終わった。

「はい」

学校が始まって早3日が経つた。一日田から授業が始まるところの学校、これからはテスト三昧の日々になるだろ？

「それじゃあ、授業始めるから教科書開いて～

未来はいつものように元気な声で、生徒達に向かって言つた。

夏休み、俺と未来は充実すぎる生活を送った。これからはあまり会えないね、なんて夏休み最終日に未来が言つていたのをふと思い出す。

この学校は生徒はもちろん、それに合わせるように生活をしている先生達も大変なのだ。テストがいっぱいあるということは、その分テストを作らなきゃいけないということ。

ちなみに、昨日もテストがあった。

もちろん、夏休み中にそのテストを作っていたから、俺はいつものよつに罪悪感と戦いながら、テストの内容を覗いた。

なあ、未来。

もし、現実を…真実を知ったとき、お前は俺を恨むのか？

笑つてはくらいいよな？

俺のそばに…居ては…

「あと一ヶ月後には、一学期の中間テストがあるから、勉強するんだよー！」

授業の終わり間際に、未来は壇上の上でそう言った。

誰も返事はしないが、その代わりに教科書を閉める音が教室内に響く。

「じゃあ、授業終わり！」

いつものように元気な声で未来が言った後、委員長が起立と声をかけた。

休憩時間、いつもポケットに入れている携帯の振動が足へと伝わってきた。

「ん？」

こんな時間に電話が来るなんて、めったに無いことだ。そんなことを思いながら俺は携帯のディスプレイを見ると、諸刃 未来と表示されている。

「もしもし？」

何があったのだろうか？ いきなりの電話だったので、教室で通話ボタンを押して廊下へと出た。

「悠つー！」

ハキハキしている声が、俺の耳の中へ届いてきた。

「どうした？」

「あのね、来週の土日は学校から休みを貰えたから、遊びに行かな
い？」

「お、本当か？ よかつたじやん。遊びに行くかあ

俺は嬉しくて、つい頬が緩んでしまった。

「うんー。」

未来も相当嬉しいのか、いつもよりテンションが高い気がする。

「じゃあ、私授業あるからまた後でねー！」

「おつかれ

俺は携帯から耳を離すと、教室の中へと足を進ませた。

このとき

俺達は

幸せだった

かもしない。

金曜日、何も知らない未来にある一通のメールが届くまでは。

そのとき俺は来週の土日、未来と一緒に居られる喜びを表に出さないよつに押せがあるので必死だった。

そして、今週の土曜日。

「どうしたんだ？」

昨晚、俺の家がいいと、いきなり言い出した未来を俺は快く受け入れた。

だけれども、さつきから未来の様子がおかしい。

「え、えへへ！ なんとなく悠の家でやつくりしたかったの

一シシリともよつ少し元気が無くなきがする未来はやつくりした。

「や、そっか」

何も聞かないほつがいい、何かショックなことがあったに違いない。

「ゲームする？」

俺の問いに、未来は首を横に振る。

「やつくりしたいな

あはは、と笑いながら未来は俺の顔を見て言った。俺はそんな未来を心配に思い、少し近寄る。

「みへへ」

俺はできるだけ笑顔を作り、未来の頭に手を乗せた。そして、ただ無言で頭を撫でる。

「むう」

未来がそう言って、拗ねた格好をするが、こいつやってることを未来が望んでいることを俺は知っている。

何か悲しいこと、辛いこと、大変なことがあったとき、未来にこいつやってするとこいつも笑ってくれるからだ。

そして、今回も未来は…

「み、」

俺はそこで言葉を発するのを止めた。いや、発せなくなつた。未来が俺の口を口で塞いだから。しかも、いつもより長いキス。

「ふあ」

キスが終わると同時に、未来の吐息が漏れる。

「どうしたんだよ?」

あまりの出来事に、俺は慌てて未来にそう言った。

「びっくりした?」

ニシシと小悪魔のような笑みを浮かべている未来は、少し悲しそうな表情をしていた。そして、俺は次の言葉に冷や汗をかくこととな

る。

「私、悠の事信じていいんだよね？」

「え」

「だよね？」

「あ、ああ」

いきなりじりつしたんだ。

「……」

未来は黙つて俺に抱きついて、覆いかぶさつてきた。

「未来？」

未来は黙つても、無言を突き通す未来。

それからもう何分経つただろうか？

「温かい」

未来は俺の胸の上でそつ眩いた。

「未来」

俺はそつと抱きしめる、何があったのかは知らない。ただ、抱きしめたくなつた。

だって、未来が泣いているんだから。

「落ち着いた？」

少し時間が経ち、俺は無言だったこの部屋で呟く。

声は聞こえなかつたが、首をカクンと縦に一度振つたのが分かつた。

「何があつたの？」

もう一度聞いてみる。未来は俺の顔を見上げて、軽く微笑みながら首を横に振つた。無理しているのが見え見えである。

しかし、そんな未来に何をしてあげられるわけでもなく、俺はただ抱きしめるだけだつた。

深深く考えればわかるこの涙の真相を俺は数時間後知ることになる。気付いていれば、深く考えていればと今までも何回も思ったのに、何一つ学べていなかつた俺自身を後悔することになつた。

紛れも無くその声は未来のものだった。

「信じて…いいんだよね？」

その声の持ち主は俺ではない。

「な、んで？」

俺の家の庭は龍之介の家ほどでかくないから、門の前で車から降りる。そのとき、俺の背中に電気が走った。

荷物を全て持つた後、俺はキヨ爺に連絡をし、迎えに来てもうひとつ見送ると、自分も帰る準備に取り掛かる。

「じゃあな」

#38 信じていいんだよね？（後書き）

更新遅れてしまい、申し訳ございません。

19日がテストなのと、一ヶ月ほど前から家が少し大変になつたせいで、小説にあまり手をかけられませんでした。

これからは少しだけペースがあがるかと思います。

そういうえ、知らぬ間に10話をきつっていました。
完結まであと少し。最後まで付き合つていただけると盗鬼は感動してしまいます。

#39 ナゼ、彼女ガココニ

「未来……？」

ナゼ、彼女ガココニ？

俺の頭はもう、パニック状態だった。

「こいつて……」

「え、いや」

何を答えて言いのかわからない。今は“紺野 大将”の家なのだから。

「昨日…私のところにメールが来て」

未来はそれだけ言つと、ぱかっと携帯を開き俺に見せてくる。そこには、堂本 悠のことが事細かく書かれていた。俺が偽名を使っていること、ここに住んでいること。確信である、俺が大将ということは書いていないことが、唯一の救いだ。

しかし、今日ここに来れば全てがわかると記入されていた。誰が、送ったんだ？

「しかも……」

俺がパニックになつていて黙つていると、未来はそつと口を開いて家を見渡した。

「確か…大将君の」

家だったようなまで言つたとき、俺の背中には冷や汗が流れた。しかし、俺が冷や汗を流したのは、未来の言葉のせいだけではない。

自宅から親父が出てきたからだ。

「おや…」

その姿を見て、ボソッと口が動いてしまつた。

「先生ではございませんか！」

俺の動搖を知つているのか知らないのか、俺の親父は家の者には決して見せないような笑顔で先生を出迎えた。

「いつも、こいつがお世話になつています」

親父は俺の横まで来て、俺の頭をくしゃくしゃとしながらそう言つた。その言葉に、俺と未来はもちろん、キヨ爺までもが凍りついたように固まつていた。

未来は口をパクパクとしながら、俺の顔を見たり親父の顔を見たりしている。

「え、それは…」

「“大将”は学校でどのような子でしょうか？」

親父は何も変わらないように、悪魔の姿を隠したその笑顔で決定的な一言を言い放つ。気がついたときには未来の瞳からは涙がこぼれていて、俺は未来の名前を叫んだ。

「え、どういふこと…え？ や、やだ…やだ！」

未来は一步一歩俺から離れていく。俺は未来を追いかけるかのように、小走りで近寄った。

「み、未来、違うんだ…」

「来ないで！」

未来の張り上げる声。その声は、周りの家までに聞こえていたのか、ざわざわと人が小さい声で話す音が聞こえてくる。その雰囲気に耐えられなかったのか、俺と一緒に居たくなかったのか、未来は走つて行ってしまった。

追いかけようとする俺。

しかし、その行動をとめたのは、親父だった。

「大将」

未来と話すときは違う、親父の渋い声。

「どうだ？ アメリカに行く気になったか？」

俺の顔を一切見よとはせずに、家へと戻ろうとした親父。そこでかなりの違和感を覚えた。

今、未来は泣きながら走つていった。

その行動に対し、どうして親父は不思議と思わない？

「まさか…」

そういうば未来は言つていた、昨日届いた不審なメール。内容は、俺の近辺にいる人物しか知りえないことだった。

それに、あのタイミングで親父がここに出てきたこと。

最後に…俺に向けたあの言葉。

気付けば俺は振り返つて、『親父』と叫んでいた。

「何だ？」

振り返るその顔には、何も悪気の無い表情。

「お前、お前！」

もはや感情が抑えられる領域ではなかつた。未来は俺の心の支えだつた。誰よりも好きだつた。好きなのに

「どうして、こんなこと…」

涙声になりながら俺は親父に問いかける。こんなことは初めてだろう。

「…勉強する気になつたか？」

俺のこんな乱れた態度を見るのを親父は初めてのはずだ。なのに、そんな冷静に対処できるものなのかな？

「お前、ぶつこ」

そこまで言つて、今まで黙つていたキヨ爺が止めに入つた。

「離せ！　俺は、俺は！」

親父の下へ行こうとする俺を、必死に押さえつけているキヨ爺。さすがは、執事といったところか、抑えられた俺は何も出来なかつた。

「離せよ…俺は…くそつ…！」

涙は絶えなかつた。親父の前では泣くまいと決めたのに。こんな悔しいとは思つてなかつた。

「お坊ちやま」

「離せよ、離せ…」

一度乱れた俺の心は、静寂を取り戻そうとはしていなかつた。

「こいつかは」うなつっていたんですね！」

キヨ爺の叫ぶ声。

その声で、俺の力は一気に抜け、死体のようにその場で横になつて

いた。そんな俺を、数秒間見つめたキヨ爺は、いつもの笑顔に戻り、俺を背負つて部屋へと運んでくれたのだ。

「どうしよ……」

部屋に着くと、何度も携帯が鳴り響いた。

ディスプレイすら見る気すらしないが、多分恭平さんだろ？

動転した未来が、果歩に言つて、果歩から恭平さんに渡つたつてところだ。

未来…。

心の中で、俺はその名前を呼び続けた。

全てが、終わつたのだ。

全てが。

「はは…」

自分のこの状況がおかしく思い、俺は何故かベッドの上で笑つている。

「あははははは…！」

おかしかつた、本当に…。

自業自得だ。

「はは…」

数分間笑っていた俺も、無性に悲しくなってきて、その声はいつしか泣き声と変わっていた。

「未来…未来…」

涙を堪えることを知らない、赤ちゃんのよつて俺は泣き続けた。

月曜日。

学校が再び始まる。

俺は行きたくなかった、未来の顔を絶対に見るから。それは避けて

通れない道だつた。

だけどキヨ爺は無理やり俺を起こし、無理やり学校へと向かわせた。家を出るとき、一瞬親父の顔が見えたが、もはや怒鳴る気力もなくなっていた。

何も言わず、俺は家を出てキヨ爺に学校まで送つて行つてもう。校門前で降りされ、キヨ爺は去つていった。そのとき帰りつかと迷つたが、ここまで来て帰るほど俺も馬鹿ではない。

仕方なく、足を校舎へと運ばせた。

校内に入ると、俺を待つていたのか、そこには龍之介が立つていた。

「大将」

いつもと変わらない声で俺の名前を呼ぶ。そんな龍之介には悪いが、俺は笑う気力さえ失つていた。

「大将」

「どうした?」

俺は比較的いつもと同じように言つたつもりだったのだが、やっぱり上手く言えていなかつた見たいだ。

「『めん、龍之介』

なんだが悲しくなり、突っ立っている龍之介の横を通り、先に教室へと向かった。

教室に着き、いつもと変わらぬ生徒の雰囲気の中を通り抜け、俺はいつもの場所へと足を運んだ。

そこは、教壇の前、一番未来と近い場所。

ゆっくり腰を下ろすと同時に、非常なほどまでに俺の心を焦らす、一番聞きたくない学校の始まりの音、チャイムが学校中に鳴り響いた。

#39 ナゼ、彼女ガコロー（後書き）

#40 衝撃的な映像

俺は、どうすればいい？

恋愛完全マスターにはどう書いてあった？

確か原因を対処しようと書いてあったはずだ。

原因？ 俺の行動だろう。

それを対処したところはどうなる？ 今更…。

俺はもう取り返しのつかない事をしてしまった。愛する人を裏切ってしまった。

裏切った相手に対する対処方法、恋愛完全マスターにはどうすればいいと書いてあった…？

ガラッと、ドアは開いた。

龍之介はいつの間にか俺の後ろにいる。俺が気付かなかつただけで、ずっと俺の隣に居たのかもしれない。

「はーい、皆さん…」

一瞬、俺と未来は目が合った。

「席について……ぐだわい」

未来が言い終わるころには、皆自分の席に戻っていた。そこで『あら、皆もう座ってるね！　さすが優等生だ！』と元気よく言うのがいつもの未来なのだが、さすがにそんな気分では無いようだ。

「出席を取ります」

いつもの元気はどこへ行つたのか、騒がしく始まるこの教室の朝は、静かに始まつた。

「……」

俺の名前を呼ぶとき、未来が言葉に詰まる。

「紺野…大将君」

「はい」

俺は小さな声で、聞こえるか聞こえないかぐらいの声で返事をした。

そして、詰まることなく未来は次の人の名前を呼ぶ。

教室に入つてきて以来、未来は一度も俺を見ようとはしなかつた。名前を呼ぶときに、普段の未来なら生徒の顔を見て確認するのだが、今日は違つ。

ずっと出席簿に田を通したままだ。

「「めん…」

それに気付いた俺は、そう声を出してしまった。

その言葉に、未来はびくっと体を反応させる。聞こえてしまったみたいだ。

「じゃ、じゃあ…朝のホームルーム終わります」

それだけを言って、未来は教室を出て行ってしまった。

未来先生のその変な感じに気付くものは、この教室に俺ともう一人を除いていなかつた。

「大将」

そう、俺以外のもう一人とは龍之介である。

「「めん、何も…その…」

「大丈夫。大丈夫」

龍之介は俺がパニックに陥っているのを見て、いつも俺が龍之介にしているように、龍之介が俺の頭をナデナデしてきた。

「りゅ、龍之介？」

女子どもの視線が痛い。

「大丈夫。大丈夫」

「ありがと…」

俺は二ツ「コリ笑つて、龍之介の手を取つた。

「ありがとな」

そう言つしかなかつた。龍之介が、少し悲しそうな目をしたから。
それから、ほんの少し時間が流れる。今は、悪魔と言える現代文の
時間だ。生徒達へ必死に語つている。目の前の彼女は朝のあの違和
感をなくしていた。

俺は必死に授業を受けている振りをしている。未来だつて本当は、
この教室に居づらいはず。

：俺と同じ気持ちのはず。

それはただ俺の願いだつた。あるはずのない想いだ。分かつていてる。
未来が、俺のこと嫌いになつたこと。

知つていてる。理解しててる。

悲しみが一気に心の奥底から噴出してきて、俺は目を瞑つた。心を
落ち着かせようと、俺は大きく息を吸つ。

こんなところで泣けるものか。

泣け…

ゆつくりと目を開いて、偶然未来の姿を捉えたそのとき、衝撃的な映像が俺の視界が捕らえた。

「み、く」

俺達に背を向けている未来の体が、足元から崩れしていく。その光景がスローモーションに見えた。

「未来！」

俺は誰よりも声を張り上げる。そして、誰よりも先に駆け寄った。

「おー、未来！」

ざわざわとしているはずの教室の音は、俺の耳には届かない。

「未来！」

俺は叫び続ける。だけど、未来は一向に動こうとはしなかった。こうこうときは体を揺らさない方がいいと、何かの本で書いてあつた気がする。

「龍之介、救急車！ 委員長、先生を呼んできてくれ！」

俺は悲鳴と、ざわめきの中、ずっと未来から離れなかつた。

そして、二つの間にか眼鏡は外れ、髪の毛は捲くりあがっていた。

「未来、未来！」

そのことに気付かず、「俺はずつと呼び続けていた。

「紺野、病院までは行かなくていい」

「何でー。」

「授業があるだろ？ 教室に戻りなさい」

未来が救急車で運ばれていった後、追いかけようとしていたとき、俺は体育の先生に呼び止められていた。

そいつは前から未来のことが好きなのではないか？ と噂されていた先生。聞くところによると、こいつが未来の行つた病院にいこうとしているらしい。

そんなことは許せない。許すことは出来ない。

「…わかりました」

俺はしじぶしじぶ承諾した… ように見せた。

やつぱり俺は未来に恋している。学校をさぼってまで、何かをしようと思ったのは今日が始めてだ。

俺は先生の姿が見えなくなると、保健室に足を運んだ。

「すみませ…」

保健室のドアを開けると、いつも見かけることのない保健の先生がそこに居た。

会いに来たのだから、居なくては困る。だけど、何度もここに足を運んでいるにも関わらず、一度もその姿を見かけたことが無かつたから少し驚いたのだ。

とにかく、俺は急ぐ。

「先生！」

俺は勢いよく先生を呼んだ。先生は何もかもが分かっているかのように笑みを浮かべる。

「早退かしら？ 未来のために」

「え、あ、いあ、その… 風邪っぽくて？」

「本当に病気の人はそんな大声をあげないし、疑問文にしません。とりあえず、ここにクラスと名前と体調不良とだけ書いて。あとはしておいてあげる」

「あ、ありがとう」「やこまわ」

何がなんだか分からないうま、先生の言つとおりにして俺は教室に戻つた。先生の昼寝騒動といい、今回といい、あの先生はどうまで適當なのだろうか？

そんな事を思いながら、先生に感謝をしつつ、俺は教室に入る。

「龍之介、俺帰るから」

鞄に手をかけて、俺はそれだけ言つと教室を飛び出した。小さな声で頑張れと龍之介の声が聞こえた。

時間が経つにつれて、未来を心配する気持ちが膨らんでいく。

俺は、家に寄らず病院へと向かった。もちろん、タクシーで。

キヨ爺や、親父には今は正直言つて会いたくない。キヨ爺に仮病で早退したなんて言つたら、怒鳴られてしまう。親父は論外だ。顔なんて見たくない。

「未来、未来」

俺は足を揺りしながら、必死にタクシーの中で病院に着くのを待つた。

#41 愛を語りないで…

病院に着き、受付で未来の名前を言つと、看護婦さんが病室へと案内してくれた。話を聞くところによると、軽い貧血だそうだ。

しかし精神的ストレス、睡眠不足が重なつての貧血らしい。

そこまで無理をさせたのは、俺のせいだ。俺が未来と出会つて、未来を裏切る真似をしたからだ。

病室に着くと、そこには仰向けで目を瞑つている未来の姿があつた。隣には、あの体育の先生が座つている。

未来が寝ているのをいいことに、その体育教師は未来の手を握つていた。その光景を見た俺は頭で考えるよりも、口が先に動いていた。

「おい、五十嵐！」

五十嵐とは、体育の先生の苗字。俺は怒りのあまり、呼び捨てをしてしまつた。いくらムカつく教師とはいえ、こんな言葉遣いをしたら成績が下がつてしまつだらう。

「え、あ、紺野！」

五十嵐は驚きの表情を見せ、未来からすつと離れた。

「未来に触れるな」

興奮は冷めず、俺は言つてはいけない言葉を放つ。その言葉に、五十嵐は驚きながらも聞き返してきた。

「お前は未来先生の恋人気分か？　お前に何をしている。授業はどうした？　さぼりか？」

開き直ったような態度で、五十嵐は俺に突つかかってきた。

「どけよ。お前が寝込んでいる未来先生の手を握っていたって、言いつらうぞ？　俺と未来先生はただの生徒と先生の関係。他に何か用事ある？」

俺が軽く脅しをかけると、五十嵐は悔しそうな顔をして病室から出て行つた。

五十嵐が居なくなるのを確認すると、俺は椅子へと腰をおろす。

そして、布団から出でている未来の手を握りつとしたとき、俺は行動を止め考えた。

俺が未来の手を握つても、未来は喜ばないだろつ。と思つたのだ。

「未来……」

寝顔を見るだけと決めた俺は、そつと覗きこんだ。

たまに、顔をしかめる未来を見ると心が痛くなつた。

「『』めんな

この言葉を、俺は何度呟いたことだらうか。許されないことは分かつていい。

「「」めんな

何度もいえる。呟つて許してくれるなら、俺は何度だつて呟おつ。

「「」めん…」

だけど、それは叶わない夢だ。それが分かっているのに、他の言葉が出てこなかつた。かわりに俺の瞳からは涙が零れ落ちる。

俯きながら泣いていると、背後から声が聞こえてきた。

「え、どひっ…」

聞き覚えがある。

「果歩や…ん」

未来の親友である、果歩だつた。隣には絶句している恭平さん、そして美智子が立つていた。

時計を見ると、毎を過ぎたじゅうだつた。この時間だから、仕事を放り投げてきたのだろう。

しかし、ここで俺は気がつく。

自分が着ている服を、姿を。

中途半端なこの変装は、俺が悠だと断定するには十分だつた。服は学生服。それを果歩たちに見られたのだ。もひ、言い訳も効かない。この反応を見る限り、未来は果歩と美智子にまでは俺のことを言つてこなかつたようだ。

「「」めんな… やー」

一番に出でてきた言葉は、さつきから何度も言つてこるものだつた。

「悠… もん?」

信じられないよつな顔をしている果歩に俺は近づくため、立ち上がる。

何度もシミコレーションしてきた。俺の正体がバレた場合の対処を。一番恐れていたこと、一番想像したくないことを、毎日のよつにシミコレーションしていたのだ。

「果歩さん、美智子さん、そして… 恭平さん」

俺はひとつ間をおき、言葉を放つた。髪をかき上げ、俺は髪の毛で少し隠れている自分の顔を覗かせた。

「俺、高校生なんです。分からなによつに姿を変え、未来に近寄つたんです」

そして、これまでの経緯を軽く語る。

肝心な部分、恭平さんが知つていたこと、成績のことは話さず。

龍之介に関しては、申し訳ないが知っていたと本当のことを言った。ここで分かりやすい嘘をつくと、恭平さんまで疑われてしまうから。

「あ、あんた… 最低！」

美智子は泣きながら、俺の頬を思いつきりビンタする。病室に一つ大きな音が鳴り響いた。

「それで… 未来は知っているんだよね？」

俺は頷く。そして、一昨日に知ったことも言った。

「悠、おま」

恭平さんが何か言おうとしたとき、俺は止めに入った。恭平さんと果歩には幸せになつて欲しい。

その願いのために、俺はこの嘘をついた。恭平さんの性格からすると、俺をかばうだろう。本当に優しい人だから。

「本当にごめんなさい、だけど俺の気持ちには嘘はなかつた。本当に、未来が大好きです」

その衝撃の告白に、三人は固まる。

俺は真剣な目をしたまま、言い続けた。

「愛しているんです」

その言葉の後、果歩が震えるのが分かる。そして、病室には再び頬

をビンタする音が鳴った。

「簡単に人を裏切れるお前が、愛を語らないで…」

果歩の目からは大粒の涙が流れていた。果歩のその乱れた姿を俺はただ、黙つていて見ていた。

いや、何も言えなかつたのだ。果歩の言つとおりだから。

「もう、帰つて」

果歩は俺の横を通り過ぎて、未来の隣へと向かう。

「帰つてよ。未来をこれ以上悲しませないで」

「でも…」

それだけは嫌だつた。

未来と今、離れたらもう駄目な気がしたから。

「でも？ 今のお前に拒否権は無いのよ…」

俺に背を向けたまま未来を見下ろして立ち去つてしている果歩。

何も言い返せない俺が悔しくて、病室を出よつとしたときだつた。

「ねえ」

静まつてこるこの病室では、果歩の小さく呟いた声でさえしつかり

と俺の耳に入つてくる。

「何で、未来に…近寄つたの?」

果歩の声は震えていた。

「……」

俺は振り返ることも出来ず、ドアに手をかけたところで止まつてしまつた。

「好きだつたの? 好きだつたから…付き合つたの? あの時、合コンに来たの? それとも…面白半分で、未来を騙していたの? 美智子まで…。私達、本当に、本当に…。」

果歩の言葉は、泣き声へと変わつていった。その続きを、何と言おうとしていたか分かつっていた。

本当に友達と思つていたの?。

「俺は…試験に悩まされていたんですね」

俺は振り返ることをせず、果歩たちに背を向け話し始めた。

「果歩さんと会う少し前、親父に条件を出されてしまつて。それが、簡単に言えば成績アップさせること。いつも、頑張っているんだ！頑張つているんだけど…現代文だけが点数が上がらなかつた。そんな時、たまたま果歩さんたち、そして未来に会つたんです。未来の担当科目は現代文。最初はズルをしようと思つて近づきました。だけど、時間が経つにつれて…好きになつたんです」

振り返れば、多分この人たちは絶句しているのだろう。

勇気を振り絞つて、振り返つてみると、そこにはベッドに寝ているはずの未来は、起き上がつていた。

逃げ出したくなつた。

だけど、逃げられない。覚悟を決めた俺は未来の瞳をそつと捕らえた。

#42 未来“先生”だろ

「許されないとだと、思つてゐる」

未来が起きていたことに、果歩は気付いたから俺にあんな質問を投げかけたのだらう。

いつから起きていたのかは知らないが、せつとの話は聞いていたに違いない。

「な、んで」

未来は驚きの表情を変えないまま、涙を流していた。

「理由があるとすれば、未来が現代文の担当だつたから。あの時、俺は運命だと思つた。神様からのプレゼントだと思つた。こんな機会滅多にないのだから。だけど、俺は…」

そこまで言つと、俺の言葉は閉ざされた。喉に何かが詰まるような感覚に陥つたからだ。今、ここで泣いてはいけない。泣いては馬鹿にされる。泣くならするなどいわれる。

「お前がどう思つているなんて、私達に関係ないの。もちろん未来にもよ。今日はもう帰つて。お願ひ…これ以上未来を悲しませないで」

「み、く」

果歩に言われた俺は涙を堪えながら下を向いた。

俺の呼びかけに何も反応しない未来は、今何を思つているのだろう?
? 俺を許せないと? それは当たり前だろ。

「いじめん」

俺はその一言を残し、その場を去つた。

家に帰ると、キヨ爺が玄関で俺を待つていた。

「お坊ちやま

「何

俺はこの家が嫌いだ。好きになることは一生無いだろう。
「お父様が書斎で待つていると」

それだけ言つと、キヨ爺は頭を上げて立ち去つとした。

「キヨ爺」

そんなキヨ爺を俺は呼び止める。聞けなかつたことを、今聞いりつ

思つたから。

「はい」

「キヨ爺は、未来が家に来る」と…親父のことを知つていたのか?」

キヨ爺は俺がこのことを聞くのを覚悟していたのか、顔色一つ変えずに一言だけ「はい」と答えた。

「なんで、何で…?」

「私はこの家の雇われ者です。お父様にたてつくことは出来ません。そして、そのこの前にも申したはずです。未来様のことをよく考えてくださいと。こつかはこうなつていた。今、こうなつっていても、先の未来にこうなつっていても、結果は同じだつたはずです」

「俺は、未来が好きだつたのを、9位以内に成績を收めないとアメリカに飛ばされてしまうことも、キヨ爺は知つているだろ!?!? どれだけ勉強を頑張つたって、9位以内なんかに入れるはずが無いだろ…。俺は龍之介と…未来と一緒にいたかつただけなのに…」

「…やつてもいのに決め付けてしまつのは、お坊ちやまの悪い癖です」

「なつ…」

「お父様が書斎でお待ちしておつます」

キヨ爺は深々と頭を下げ、リビングへと向かった。

「な、何だつて言つんだよ……」

俺は仕方なく、あの親父の下へと向かつた。

トントン、とドアを一回ノックする。中からは親父の声が聞こえてきた。

「失礼します」

俺はドアをゆっくりと押した。

「大将か」

パソコンで仕事をしていたのか、俺の顔を見ると手を止めた。

「どうだ、学校生活は？」

「ど、ど、ど…だと…」

「成績は、取れなさそうだな」

お前が困ったんだろう…？ 俺が…こんなふうに…。

怒りに満ちた気持ちを、俺は自分の拳に押し当てる。

こんなときこれまで、親父の向かう事が出来ないなんて。

「は…話はそれだけか?」

俺は悔しくて親父の顔を見ずに、地面に顔を向けた。

「未来といつ…女」

親父が言つたその言葉は、俺の耳にじっかり届いていた。

「未来には何もするな!」

反応的に、声を張り上げた。

「…未来“先生”だろ?」

余裕の笑みを浮かべる親父への憎悪は膨らむばかり。

「く…未来先生は関係ないだろ」

その場にもう居たくないで、俺は親父の部屋から飛び出した。

自分の部屋へと走っていく。

“めん、未来。

俺のせいで、俺のせいで…。

部屋に着きドアを開けベッドに飛び込むと、俺は泣き崩れた。

今、未来に何かあつたら俺は耐えられない。それを承知での親父はあんな言葉を吐きやがった。

「くそ……」

涙は止まるといふことを知らなかつた。

次の日、学校へと足を運ぶと、注目を浴びているのはすぐに分かつた。

女達が俺のほうを指差しながらコソコソ何かを話していく。

それもそうだ、昨日未来を呼び捨てにした上に、早退までしたのだ。噂が経つても仕方がない。このことで、未来が何か問われないと云いが。

しかし、俺のそんな考えは外れていた。

そのことに気付くのは、下駄箱を開けたときだった。

「……は？」

そこには数十枚のラブレターが入っていた。

「な、んで？」

困惑している俺の後ろには女が。

「あ、あの！」

スッと目の前に差し出されたのは、やはりラブレターリしきもの。

「ひ、受け取つてください！」

「……」

俺は押し付けられたラブレターを手に取ると、女は顔を真っ赤にして立ち去つていった。

「大将」

女を見送つた俺の隣には、無表情の龍之介が。

「へ、あ…お、おはよっ」

「おはよう」

龍之介はそれだけ言つと、俺の服をちゃんと引つ張つて、歩き始めた。

付いて来いといふことなのだろうか？ 不思議に思いながらも、俺

は龍之介の後ろを付いていった。

歩く」と数分、武道場の裏といついつも人気の無い場所だ。

「大将聞いて」

無表情なのは変わらないが、どこか真剣な雰囲気をかもし出している。

「大将、隠してた姿ばれた」

「あ、ああ…」

それはさつきのワープレター事件で、薄々とは気が付いていたことだ。

「それと」

と、まだあるらしい。

「今日家来て」

「わかつた」

俺は出来るだけ一ヶ「リ笑うと、教室へ行こうと促した。これ以上、龍之介といの雰囲気で話したくなかったから。

一人で教室に入ると、みんなが一斉にこちらを向く。龍之介の格好良さでいつも注目を浴びていたが、今日はそれとはちょっと違う注目の浴び方。

「な、なあ大将」

「なに?」

あまり話したことの無い男子生徒が俺に話しかけてきた。

「えつと、その… 未来先生とどういう関係なんだ?」

男子にとつては、俺の容姿よりもそつちの方が気になるらしい。男子生徒にかなりの人気があつた未来だ。聞かれて当然だろう。

「別に。ただの生徒と先生だけど?」

俺は当たり前のよつに返事をすると、男子生徒は「変な」と聞いて「ごめんな」と謝つて去つていつた。

教室の椅子に座る。タイミングよく、チャイムも鳴つた。

「席について」

そう言いながら、教室のドアは開かれた。

そこに居たのは、未来ではなく保健の先生だった。

「諸戸先生は、少し体調が悪いようなので休暇を取つています。かわりに私が出席を取るので返事してね。じゃあ、まづ…」

俺は頬杖を着いて前を見た。

いつもの風景ではない。何か物足りない。

担任じゃないから?

未来じゃないから?

愛しの人ではないから…。

そして留まることのない後悔が俺の心の中に降り注がれていた。

#42 未来“先生”だろ（後書き）

残り、本当に数話となってしまいました。
展開が速くなっていますが、最後までお付き合いでモジおねがいします。

#43 はじめのつけ方

あれから数日後、未来は体調が回復したのか学校に戻ってきた。

そして、少し前の生活に戻る。

俺は田をあわすことなく、学校へ通い続けていた。

そして思う。

こんなことしていいのか？ ただ、未来を苦しめるだけじゃないのか？

俺は何を求めて、学校に来ているのだ？

成績なんてもの、今の俺にはもう関係ないことだらう？

何をしても無駄なのに、俺は今日も学校に来ている。

「おっはよお！」

「あ、先生！ もう大丈夫なお！？」

そんな生徒の声が教室の中で巻き起こっている中、俺は未来に一言も声を掛けることはできなかつた。

見ることさえ、許されないとthought。

声だけが聞こえてくる。

「大丈夫だよ！ 心配かけちゃってゴメンね。なんだか睡眠不足だ
つたみたいで」

そう言ひつ未来の声がすると、女性徒の笑い声が聞こえてきた。

みんなを不安にさせないために、無理にでも笑顔を作つてゐるのだ
と思う。

そんな声だ。

この数日間、俺に何も無かつたわけではない。

未来が倒れた次の日の放課後、恭平さんに呼ばれた俺は、帰宅する
龍之介について行つた。

門の前で人が立つてゐる。よくよく見ると、それは驚くことに果歩
だつた。

「果歩さん？」

「え、あ…」

俺の姿を見ると、罰の悪そうな顔をした。

「じつじて、ここにいる？」

「恭平に言われたから」

俺のほうを見ようとはしない果歩。じつと屋敷の中を覗き込んでいる。それもそうだよな、なんたって親友を裏切った男なのだから。

「きょ、恭平？」

門の奥を見ていた果歩が、ある存在に気付いた。

「遅れてしまい申し訳ございません。龍之介様、大将様、…果歩様
いらっしゃりへどぞ」

すっと近寄ってきたのは、仕事モードの恭平さんだった。

「え、え？ 恭平じつこいつ」と？

戸惑っている果歩を見て、恭平は一ヶコリ笑い俺達を案内するかのように先頭を歩き出した。龍之介は何も言わず、恭平の後ろを歩いている。俺と果歩はそれに遅れを取らないよう歩き始めた。

三人は龍之介の部屋へと案内された。案内役の恭平さんは、一旦部

屋を出でた。

龍之介の部屋に取り残された果歩は、大嫌いな俺に質問を投げかけてきた。

「どう、どうのこと？　どうして…恭平が？」

未知の世界に取り残されて、心配なのだろう。果歩は泣きそうな顔になつている。

「そ、それは…」

俺が執事だと言おうとしたとき、龍之介に名前を呼ばれた。

多分それは、言わないほうがいいということなのだろう。

そうだ、恭平さんはなぜ黒歩をここに連れてきたのか？　果歩に打ち明けるためじゃないのか？

龍之介の言葉が最後に、この部屋の中には沈黙がのしかかってきた。

何か話さうと思つたが、言葉が出てこない。

数分経つたと思つたとき、恭平さんが部屋へと入ってきた。

もひりん、執事姿で。

「お待たせしました」

そういうて持つて持つてきたのは、お茶だった。四つあるところひとつは、

恭平さんはもうじりで話をすらつむつなのだけれど。

真ん中に置いてある机にお茶を置くと、恭平さんはゆっくりと腰を下ろした。

「果歩」

「な、何！？」

果歩は驚いて、声が裏返っていた。

「すまん、本部せうじで執事をしていたんや」

いつもとは違つた恭平さんの雰囲気。ふざけた言葉は一切使っていかつた。

「執事…なんてこと言えへんくて。この仕事、あまり自由がきかないねん。果歩に言つたら心配されるやううし、その…軽蔑されると、なんかちょっと嫌やつたん」

恭平さんはやうやく頭を下げた。

「すまん… 驕すつもつはなかつたんや」

床まで頭を上げている恭平さんに、果歩は少し近寄った。

「大丈夫なのに。私、そんなこと全然気にしないよ~」

一ヶ口りと笑つて、果歩は恭平さんに頭を上げるよひと言つた。

しかし、恭平さんは上げようとしてない。

「それだけやないんや……」

わざわざよつも声が低くなつた。

“ それだけじゃない……？”

もしかして…恭平さんは、

「さあ、恭平さん…」

俺はその言葉をとめよつと恭平さんの名前を呟んだが、言ひのをやめよつとせしなかつた。

「俺、大将のこと知つてたねん。悠つて知つてたんや」

「え？」

「ほんますまん」

恭平さんのその声は、少し震えていた。

「裏切つてもつた。俺も…お前達を」

「昨日、何も言つてなかつたじやない！ 嘘でしょ？ 嘘だよね？ 病院で悠さんが『恭平は知らない』って言つていたじやない！ 助けなくともいいんだよ？ 悠さんに同情して嘘なんていわないで

よ」

果歩は眞実を受け止めていなかつた。

「すまん…」

その光景が、全てを物語ついていた。さすがの果歩もそこまで行くと信じたのか、その場に泣き崩れた。

「恭平さん…」

「大将、これが俺なりのけじめのつけ方なんや」

果歩は泣いたまま、その場で座つて、龍之介はその光景を少し悲しそうな目で見つめている。

俺は啞然としていた。

なんで？ 俺が嘘までついて恭平さんは知らなかつたと嘘を言つたのに。

「……」で告白するなら、執事のことだけでよかつたじゃないか。

なのに、何で知つていたことまで話す？

何で…。

俺には理解できなかつた。

それは、俺の知らない世界。今まで人と深く関わつていなかつた俺が入ることのできない場所だつた。

数分経つたそのとき、そつと恭平さんは言葉を放つ。

「最悪なことをしたのは分かつてゐる。取り返しがつかないことを俺達はしてしまった。未来ちゃんを騙して、果歩たちまで俺達は騙し続けた。謝つて許してもらえるなら、俺は謝り続ける。死ぬまで、謝り続ける。でも、これだけは言つておきたい。俺も大将・悠も、本気だつたんや。俺は果歩、大将は未来ちゃんにベタ惚れだつたのは、近くに居た果歩にも分かつてゐやろ？　果歩たちがものすごく傷ついているのは知つてゐるけど、こいつだつて夜な夜な泣いているんや。未来ちゃんのことを思つて、泣いている。傷ついてる。傷つけたこと後悔してゐんや。俺達に比べてまだ若い。これ以上苦しませるのは酷すぎると思わんか？　どうか、こいつだけでも許してくれ。罰は俺が受ける。果歩が嫌なら、俺はもう近づかへんし、一生果歩たちの視界にはいらへん。だけど…悠、いや大将は未来ちゃんのこと諦められるほど心も、体もできてないんや」

恭平さんはそこまで言つて、もう一度頼むと呟んだ。

「そんなの…あんた達の勝手でしたことでしょ！？　それを許せ？　無理に決まつていいじゃない！　私は恭平のこと好きなのに、大好きなのに、これは何なのよ！？」

泣き叫びながらそう言つた果歩の瞳からは涙が零れ落ちていた。

「俺も果歩のこと大好きや。結婚まで考えていた。俺達もいい年やし。だから…今日言つたんや。後悔はしたくないから」

すつと恭平さんは下げていた頭を上げると、果歩へと一歩近づく。

「なあ果歩、もう一度だけ大将にチャンスをあげてくれないか…？」

「だ、駄目よ、駄目よ！　未来が今、どれだけ不安定なのか、恭平も知っているでしょ！？　昨日、悠さんが帰った後の未来の取り乱し方…」

そこまで言つと、果歩の言葉が止まつた。

「昨日、私あんなこと聞かなきゃよかつた」

そこまで言つと、果歩は俯いた。

「大将君」

いきなり“悠”ではなく“大将”と果歩に呼ばれた俺は反応が遅れた。

「大将君」

「は、はい」

「今度の土曜日、私達いつものデパートに買い物に行くの」

「え」

「それだけ」

そう言つて、果歩はその場を立つた。

「恭平、また一人で話がしたい。明日、時間とつてくれない？」

恭平さんが肯定の返事をすると、果歩は部屋から出て行った。それに付いて恭平さん。

取り残された俺と龍之介は会話を交わすことは無かった。

土曜日。果歩から貰ったチャンス。

チャイムが鳴る。

俺の意識は、現在へと戻ってきた。

「はい、教科書開いて」

未来の無理やり出している元気な声が俺の耳へと届く。

今日は金曜日だ。明日がチャンスの日。

俺はいまだに、何一つ計画を立てることまでもできなかつた。

#43 けじめのつけ方（後書き）

読んでください、ありがとうございます。
最終話まで、残り3話になりました。
あとほんの少し、最後までお付き合このほどよろしくおねがいしま
す。

#44 大将の馬鹿

金曜日、学校が終わり家に着くと、珍しく親父が庭でのんびりお茶を飲んでいた。

門を通りた俺は、親父と会話をしないよう、一切そつたら見ずに歩いていたのだが、案の定親父に捕まってしまった。

「大将」

名前を呼ばれたら最後、俺はもう一歩も前に進むことは出来ない。

「なんですか？」

意を決して親父のほうを向くと、こつものように余裕の笑みで俺を見ていた。

憎たらしい。

「どうだ、これ以上未来という女の近くに居るのは辛くないか？」

親父の放ったその言葉。

たつた一言なのに、俺が挫けてしまには十分だった。

「……」

「お前がここにいる以上、未来という女が苦しむとは思わないのか

？」

決定的な一言だった。

「な、んで…そんなこと言つんだよー。」

一度くじけた心は、立て直すのが難しい。それは、昔に一度経験していたからよく分かっていたことだつた。

「お前のためだ」

やつれて、親父はお茶へと口を運ぶ。

その行動が、どうしても許せなかつた。俺がこんなに苦しんでいるのに、あの男はなんでそんなにも余裕でいられるのかと。

しかし、親父に言われたことは的確であつた。

そのことが余計に俺の心の音を狂わせる。ソレに屈たいといつ気持ちが揺りぐ。

「アメリカに行かつてことか」

ハツと笑つてそういうと、親父はそうだと呟いた。

考えていたことだ。「のまま、ソレに屈たところで俺のアメリカ行きは防ぐことは出来ないだらつ。

しかも、現状では未来を苦しめるだけだった。

「もつ準備は済ませてある

その親父の言葉に俺は反応する。

「え？」

「部屋に行つても、ベッドしかないぞ？ 明日、出発するからな

何をいきなり。

心でその言葉は言い飽きた。

親父のすることは、何でも唐突なのだ。家族に何も言わず引越しを始めたり、家庭教師を雇つたり、部屋の模様替えをしたり。

だけど、今回の唐突振りには俺の心は付いていけなかつた。

「明日…？」

明日は果歩がくれたチャンスの口だつたから。

「やうだ。キヨ爺も一緒だから安心しろ」

「こじで反抗できれば、俺の人生が少しは変わっていたのかもしれない。

繩。

俺の縛る繩は、どこまで行つても解けることはなかつた。

「何時……？」

聞き返した言葉は、行くことを示すものだった。

「15時出発だ」

それは日本に居られる期限。

今の時間は17時。あと24時間で、日本に居ることを許されない。

「全て手続きをしているから安心しろ。俺は仕事だから送つてやることは出来ないけどな」

「…はい」

未来。

残り24時間もないと聞いて、俺の頭に浮かんできたのはその名前を顔だった。

「失礼します」

俺はそうつ言い、家の中へと入つていいく。玄関で俺を待っていたのか、キヨ爺が立つていた。

「承諾、されたよつですね」

「ああ」

キヨ爺は全て分かっている。俺なんかより、俺のことをよく知っている。

「明日、14時には家を出ます、よろしいですか？」

「…ああ

俺はそういうと、キヨ爺の横を通り抜け部屋へと足を進めた。

親友の龍之介には伝えたほうがいいだろう。

世話になつた恭平さんにも。

…未来には、伝えられない。伝えることは許されない。

部屋に荷物を置くと、俺はキヨ爺に声をかけて車で龍之介宅へと乗せてもらつた。

インターフォンを鳴らすと、俺の知つてゐる声が聞こえてくる。

「あ、恭平さん？ ちょっと今いですか？」

「あ、大将様ですか。今、門を開けますのでお待ちください」

その言葉の通り、門が自動的に開く。

「どうぞ」

俺の知らない執事の人気が、案内してくれようつだ。

玄関では恭平さんが俺を待つてくれた。

「恭平さん、ちょっと龍之介と二人で話したいんですけど」

申し訳ない気持ちでいっぱいだった。仕事中であいつ恭平さんを連れ出すことになるのだから。

「分かりました。少々お待ちください」

そう言って、恭平さんは胸元にあるマイクで何か話している。多分、許可をとっているのだろう。

「では、いらっしゃい」

話し終えると、恭平さんは龍之介の部屋へと俺を案内する。ドアの前まで行くと、恭平さんは一回ノックをした。

「龍之介様、大将様がいらっしゃいました」

「入って」

俺達はドアを開け、部屋の中へと入っていく。そこに居たのは、いつもどおり無表情で本を読んでいた龍之介だった。

龍之介と面会されるのも、もうこの時間だけだろう。

「で、どうしたんや？」

やつぱり恭平さんか、ドアが閉じると素に戻る。

「龍之介、恭平さん、えつと…その…」

「いや、一いつものこ定着したことの無かつた俺は自分の気持ちに戸惑つた。

親友になつた龍之介との別れ。

お世話になつた、お兄さん的存在の恭平さんとの別れ。

今までにあまり体験したことの無い現実。

それに戸惑つていた。

「だい…すけ？」

異変に気付いたのか、龍之介はパタンと本を閉める。

「じめん、じめん…俺、もうここに居れない。アメリカに行く」とになつた

その言葉に驚きを隠せていなかつたのは恭平さんだけではなかつた。あの表情を変えない龍之介でさえ、驚いていた。

「…」

恭平さんの問いに俺は答える。

「明日、14時こまちつこの町に居ない」

「なんの、冗談やねん。大将は逃げるんか！？」

「にげ… わけじゃないです」

逃げてはるのかもしれない。

「未来ちゃんは、このこと知っているんか？」

「知らない」と思いました

親父が手を回していくなかつたら。

「つい、ちょっと待て。明日は果歩から貰ったチャンスの日やろ。せつかくのチャンスを棒に振つていいいんか？」

「……」

その問い合わせには答えられなかつた。

未来ともう顔を合わせることは無い。

親父が決めたあの言葉。そのとき既に俺は、心に決めていた。

「未来ちゃん、お前のこと待ってるかもしれへんで？」

それは無い。…無い。

「なあ、大将。お前は逃げるんや、この現状から逃げるんや！ 時間が全て解決してくれると思つとんなよー。甘つたれてんなや！ おい、大将きいとんのか！」

「恭平！……」

恭平を遮ったその言葉は、龍之介のものだった。

「恭平、もういい」

「だけどなー！」

「いいんだ」

龍之介の鋭い目が、恭平さんに突き刺さる。

「大将、それでいいの？」

「…ああ。俺がここに居ても、未来を悲しませるだけだから」

「本当に決めたんだね？」

いつもと口調の違う龍之介。そういうとき、龍之介は怒っているのだ。

「これは最近気付いたことなど。

「もう、決めたことなんだ」

「大将の馬鹿」

龍之介のその言葉を聞いた直後、俺の左の頬には大きな衝撃が来た。

「それで許す」

龍之介の悲しそうな声、俺に手をあげたのは初めてだった。

「龍之介、『めんな……』

分かっている。これぐらいのことはされて当たり前だつた。

「何時の飛行機？」

「15時」

「見送る」

それだけ言つと、龍之介は本に目を通した。

「なあ、大将……いや、なんでもない。俺も向かいに行くから待つと
けや」

「ありがとう……」

夜になると、キ田爺が俺を迎えて家へと帰る。

日本、最後の夜をその日涙を流しながら過ごした。

次の日の土曜日。

俺はキラ鷲と一緒に空港へと向かう。

日本にありがとうとい、心の中で呟いて。

未来に「めざね」と、叫んで出していく。

#44 大将の馬鹿（後書き）

残り一話となりました。

最後までお付き合いのほどお願いします。

#45 恋愛完全マスター

未来。

あの時、俺は未来と出会って救われたと思った。

こんな偶然…いや、奇跡があるのかと思った。

もしかしたら、“悠”と“未来”が初めて会った時から恋をしていたのかもしれない。

その後、未来の笑顔を全て俺のものにしたいとまで考えたんだ。

なあ、未来。

俺は今日、ここを離れるよ？

それを未来は感じ取ってくれているのかな。

未来に好きだといわれて、心が跳ねた瞬間を俺は忘れる事はないだろう。

あのときの幸福感は俺の人生で多分、ぶつちぎりの一位を守りきるに違いない。

「お坊ちゃん

過去を振り返っていた俺を、現実世界に戻したのはキヨ爺の声だった。

「どうした?」

後部座席で、俺は窓の外を見ている。

「少し、トイレに行きますが、どうしますか?」

そこは見慣れた風景。

俺が何度も行つたことのある、場所だった。

「キヨ爺…?」

キヨ爺は何も言わず車を出る。それは多分、キヨ爺が最後にくれたチャンス。

そこは今日行くはずだった、果歩がくれたチャンスの場所。

デパートだった。

何を言ひつ?

会いたい気持ちが、一段と膨らんだ。

さつきまで未来との出会いを思い返していたからだろうか。無性に未来が恋しくなっていた。

何も考えずに。

キ田爺、ありがとう。

そう呟いて俺は車を飛び出した。

このチャンスに何を言おうか？

そんなものは今、関係なかつた。

昨日までは人目だけでも、未来の姿が見られればいいと思った。

日本で最後の思い出。

あの時、未来に出会わなかつたら、俺はもしかしたら日本に居続けられたのかも知れない。

だけど後悔なんてしてない。

未来と出会つたことに関しては。

好きになつてしまつたのが、間違いだつた。

大好きになつてしまつたせいで、俺はどんどん闇へと嵌つていつてしまつた。

離れることの恐怖感。

心が痛むことへの恐怖感。

未来を好きにならなければ。

そう考えた時もあつた。だけどそれはもう後の祭り。

今更何を言つても無駄だ。

俺は今走っている。

それが答えるだろ？

何を迷っていたんだ俺は。

未来が好き。

それは変わることの無い事実だろ？ 未来が苦しんでいるかも知れない、俺のせいで苦しんでいるのかも知れない。

時間が経てば、もしかすると傷が癒えていくかも知れない。けど、完全に拭える事はないんじゃないか？

それを治せるのは、原因になつた俺だろ？

未来を助けられるのは、俺しか居ないってことだろ！

未来に信じていいんだよね？ って言われたとき、俺はどう思つた？

信じて欲しいって思つたんじゃないのか。

俺が裏切つたことは変わらない。もし過去が変えられるのなら、全てを打ち明けてもう一度未来と出会いなおしたい。

学生と先生だからなんだつていうんだ？ そんなものが恋愛の壁になるのならば、俺がぶち壊してやる。

俺は未来と一緒に居たい。未来だつて、一瞬でもそう思つた時期があつたはずだ。

悠も大将も俺は俺だ。

どつひも俺なんだ。

未来を悲しませたのは俺なんだ。

受け止めて欲しい、俺のこの気持ちを。

勝手かも知れない、だけどそれは純粹に俺の願う気持ち。

未来はどう思っている？

ただ、俺に会いたくないと思っているだけ？ それとも他に何がある？

もう一度だけ、俺の顔が見たいとか。…そんな図々しいこと考えちゃ駄目だよな。

もし、俺を許してくれるといひながら、俺はきっとなんだつてする。

未来のために全てをやさぶる。

この気持ちが全てなんだ。

今の俺の全てなんだ。

分かつてくれないかもしない、もしかしたら拒絶されるかもしないといつのに俺は…

どうしても未来に会いたい。

今、未来に会つて言葉を交わしたい。

未来と出合つて買った本。

恋愛完全マスター。

俺はあれに助けられてきたと思っていた。だけど、違う。結局は俺が決めたことだったんだ。

俺がしたことだったんだ。

恋愛を完全にマスターできる奴なんて居るわけがない。

恋愛つてものは不安定で、何が起きるか分からぬ。

結局は一人が何をするか、二人がどう思うか。

恋も愛も、全て共通するのはそのこと。

相手のことをどれだけ尊重できるかって事だ。

俺は未来を尊重できなかつた、だから失敗した。

本なんて関係ない、もう今からは俺がぶつかる、そのままの俺が。

受け止めてくれ、お願ひだから。

未来。

笑ってほしい、もう一度。

俺の前で、お前の笑みを見たい。一緒に語り合いたい。

なんたつて俺は…

「未来…」

なんたつて俺は未来のことが…

「未来…」

なんたつて俺は未来のことをこの世で一番…

「未来……」

愛しているんだから。

「ゅ、、、うっ」

「未来、大好きだーーー！」

離れることはもう逃れられないのかもしねえ。

「俺、お前を裏切ったこと後悔してるー 本当に後悔してるー。」

それでも俺は未来を愛し続ける。

「許して欲しい…」

「え、な…んでこ…こ…？」

「考えた、色々考えた。未来と出会つてからのこと、これまでのこと。だけど、もう後ろは振り向かない。後悔はするだけした」

「ゅ…う」

「大好きだから、それは変わらない！ 未来のこともう裏切らない、こんな辛い思いさせない」

「悠」

「好きだから！ 大好きだからー！」

「悠！」

「だから、みく…」

言葉を遮ったのは、未来の温もりだった。未来が俺に抱きついてきたのだ。

「もう一度会いに来る、今度は大将として」

俺の手はそっと未来を包んだ。

「お前を幸せにしてみせる」

涙を流している未来の声が、俺の耳に届いた。

「大好きだよ」

俺はそっと未来にキスをした。

#45 恋愛完全マスター（後編）

次回が最終話となります。
ここまでお付き合いくださり、あつがいがござります。
感謝の気持ちでいっぱいです。

#46 じゃあな（前書き）

これが最終話となつております。
最後は、大将視点ではありません。
どうか楽しんでもらえたら嬉しいです。

#46 じゃあな

じゃあな。

最後にその一言を残して、彼は去っていったてしまった。

彼が日本から居なくなつたと知つたのは、月曜日のこと。

それは職員会議で、学年担任が放つた言葉で知つた。

「紺野大将君は、家庭の事情によりアメリカの医師学校へ転校されました。担任は…えつと、諸戸先生でしたよね。変更した出席簿を渡しますので、取りに来てもらえますか?」

私は拒絕した。

彼がこの日本にいなくなつたという事実を。

土曜日、彼は私を大好きだと、もう裏切らないと叫んでくれた。

本当は彼に会うまで私は、絶対に裏切つたことを許さないと決めていたんだけど、顔を見てしまつたら一発でひっくり返つてしまつた。

気持ちが、全てが。

やつぱり愛おしい、あの生活は嘘だと思いたくない。

その気持ちが勝ってしまった。

そう決めた直後の出来事。

こんな事態は考えられなかつた。

「諸戸先生…？」

いつの間にか涙を流していた私は、学年主任の先生に心配されてしまつた。

「「」、「めんなさい！」

私は職員室の先生に頭を下げる、新しい出席簿を取りに向かつた。

中を覗くと、やつぱり彼の名前は見つからない。

「だ、いすけ…」

そう呟いたのは、初めてだつた。

今まで、私の中での彼は“悠”だつたから。

「大丈夫よ」

職員会議が終わつて、机の前で座りしている私に話しかけてくれたのは、保健の先生である日向 沙羅だつた。

沙羅は学校生活に慣れられなかつた私を支えてくれた人物でもある。何より、恋の相談相手だつた。

大親友とはいっても、果歩や美智子にはあまり彼のことを相談することはできなかつた。

美智子は、彼のことが大好きだつたから。

「彼ならきっと戻つてくる。だつて貴のことあんなに愛していたもの」

にこつと笑つて、肩をポンポンしてくれただけで、私はどれだけ救われただろうか。

だけど、その言葉さえ全ての不安を拭つことは出来なかつた。

朝のHRが始まるまで残り5分。

いつものように、私は職員室を教室に向かつて出て歩き出した。

「はーい、みんな席について!」

この学校の生徒達は、最近の子では珍しい優等生の集まりだ。どんな学校でも、先生の言つことを聞かない生徒が、数人は出でくるといふ話を聞くのに、この学校に限つては、そんな生徒を見かけたことがない。

私の声で、みんなは静かに席へ着いた。

ただ一つ…田の前の空白を残して。

「えつと…」

今日、一番に言わなければいけないことは決まっていた。

もちろん、目の前の空席についてだ。

彼はいつも学校に来ていた。どんなに辛くたって、学校に来ていたから、私は彼が休んだところを見たことが無い。

「紺野大将君ですが…」

説明するのは辛かった。

「家庭の事情で、アメリカの学校へ転校されました。いきなりだつたので、お別れを言つ」とを…」

生徒達の前では涙は流さない。そう決めていたのに…。

「お別れをね、言つことができなくて…」

一粒、また一粒…涙があふれ出てきた。

「う、ごめんなさい」

そう言って私は生徒達に背を向ける。泣き顔は見られたくないかった。

涙を拭うと、私は根性で涙を止め、生徒達に笑みを送る。

「お別れを言つことができませんでした。何か伝えることがあるなら、私が親御さんに伝えてもらつよつ頼みますけど、何かある人は居ますか?」「

その質問に手を上げるものはいなかつた。

彼はクラスの中では孤立している存在だつた。あの容姿を隠してまで学校に通つていたのだ。それは、彼が望んだことなのだろう。

しかし数日前、沙羅から聞いた話ではあの容姿が全校生徒へと広まつたらしい。私が倒れたときに取り乱したせいだと言つていた。

あの彼が取り乱すというのを想像しづらいが、私のために取り乱してくれたことは素直に嬉しいと感じた。

「では、出席を取りますね」

名前を呼ぶ。

いつものように、一席の子から。

ただ、いつもと違つたのはやつぱり、彼の名前を呼ぶことがなかつたことだらう。

「先生」

私はその日、彼のことを忘れようと、必死に仕事していた。全ての授業が終わり、教室を出ようとき、後ろからある人が話しかけてきた。

「な、何？」

私に話しかけてきたのは、あまりにも意外な人物。

「いいですか？」

「うん。じゃあ職員室に…」

「……」

「…保健室でいいかしら?」

私の言葉に田の前にいる龍之介君は頷いた。

「先生」

「何?」

「これ…」

私は沙羅に頭を下げて、放課後の保健室を借りたいと頼み込んだ。沙羅はあっさりOKの返事をくれた。

そして今、龍之介君は私に一通の封筒に入った手紙を差し出してい る。

「これ、何?」

「手紙」

それは見れば分かる。

そつと貰った封筒を裏返すと、そこには紺野 大将と書かれていた。

「だ…」

名前を口に出そうとしたが、私の理性があと一步のところ引き止めてくれた。目の前には龍之介君。あまり醜態を晒すことはできない。

なんたって、彼の名前を出してしまえば、たちまち私は涙を流してしまうからだ。

「どうしてこれを?」

私の問いに無表情で龍之介君は『頼まれた』と一言返した。

「先生」

手紙をじっと見ていた私は、龍之介君に名前を呼ばれて顔を上げる。

「本当にごめんなさい。大将のためとは言え、先生を騙していたのは俺も同じです。だけど、大将は先生のことが本当に大好きでした。これだけは分かってもらつて欲しいんです。彼は途中から、自分の気持ちが分からなくなっているみたいでした。それを止められなかつたのも、俺のせいだと思います。先生、どうか大将を見捨てないであげてください」

いつも単調な口ぶりを見せている龍之介君が、こんな長文を、しかも…彼のために。

「ありがとうございます、龍之介君。私はもう大丈夫だよ。龍之介君は本当に友達想いなんだね」

私がニツコリ笑うと、龍之介君も少し安心したのか、少し笑顔になつた気がした。

「じゃあ」

そう言って、龍之介君は立ち上がりつて保健室を出て行つた。

取り残された私は、右手に掴んでいる封筒に目を向ける。

「いじでなら泣いても…」

沙羅と龍之介君から頂いた、一人の時間。

「大将…」

私はそつと、愛しい彼の名前を呟いた。

数分間泣いた後、私は封筒へと手をかける。

手紙をその中から取り出すと、見覚えのある字で長々と私宛にメッセージが書かれていた。

突然手紙を出したじめん。

今、この手紙は空港で書いているんだ。俺の執事に頼んで、龍之介の下へ届くようにしたから、多分未来の手に行っていると思つ。

手紙とか初めてで、何を書けばいいか分からぬけど、自分の思ったことを書くよ。

まず、ごめんと言いたい。

何も言わず日本を出て行ってしまった。だけど、それは俺のけじめだと思つてもらいたい。

勘違ひしないでくれ、未来を捨てるとかそういう意味じゃない。もつと立派な男になつて、未来を迎えに行くけじめだ。

無責任なのは分かつてゐる。

だけど分かつて欲しい。俺のこの我慢を。

なぁ、未来。

俺、立派になつて戻つてくるから、それまで待つていて欲しい。

俺の居ない間に、未来がいい男を見つけて、そいつの所に行つてしまつたら、俺はそこまでの人間だつたつてことだ。

こんなこと、俺が言つていゝのか分からぬけど、俺は未来を信じ

てこるから。

未来は俺をもう一度信じて欲しい。

滞在期間の予定は三年。そのときには俺はもう二十歳。未来は…もう、おばさんかな?

…「冗談だよ。

アメリカでは、未来のことを思つて頑張る。

心中で応援していくから嬉しい。それだけで俺の励みになるから。

俺が立派になって、未来を迎えていく日がくるまで。

未来の事を世界で一番愛している 大将 より

そう書かれた手紙は、私の涙腺を崩壊させるのには十分すぎた。

私の泣き声は、保健室の外にまで漏れているだらつ。

それでもいい、この幸せを表現できるのは涙しかないのだ。

「だい…すけ」

愛おしかった。

誰よりも彼のことが愛おしかった。

あの裏切りが、とてもなく小さなことに思える。それほどまでも、私の心中は幸せで満たされていた。

「大将」

今度ははつきりと発音できた、私の大好きで、大好きで仕方の無い彼の名前。

世界でただ一人、私を幸せに出来る人の名前。

初めて貰つた彼からの手紙は、私の幸せの涙で濡れて行つた。

今日、にやけていると指摘されたのは、初めてではなかった。

「え、分かる?」

いつもお昼ご飯と一緒に食べている、女生徒が私の顔を見てそう言った。

「先生、今日はなんか嬉しそうだね?」

時は経ち、桜の花びらが舞い散る季節。

「なんかいい事でもあつたの？」

不思議そうな目で私の顔を覗く彼女を、私は興奮のあまり頭を撫でてあげた。

「今日はね、私の大好きな人が帰つてくるの」

あれから三年が経つた今日。

彼が帰つてくるのだ。

「えへへ！　学校のマドンナ的存在の未来先生に彼氏がいたなんて…」

「えへへ…」

私のにやけた顔は、変わることは無いだらう。

待ちに待つた日だから。

その日、学校が終わると、私は急いで駐車場に向かった。

もちろん、彼を迎えて行くため。

一秒でも早く、彼に会いたい。

その気持ちが、私を急がせた。

未来。

聞き覚えのある声が、私の耳を捉える。

「迎えに来たよ」

その言葉を聞いた私は、笑顔をその声の持ち主に向かた。

「待つてたよ！」

私は走る。彼のもとへ。

大好きな彼に一生私を離さないと、約束させよう。

「大将！－！」

そして私は彼の胸元へ飛び込んだ。

F
i
n

#46 じゅあな(後書き)

このあと、あとがきとなつてあります。
よしければ、見て行ってもらつてください。

あとがき

まず最初に、この小説を読んでくださった皆様。

本当にありがとうございました。

恋愛完全マスター

全48話…完結いたしました。

途中、一ヶ月ぐらし更新を怠ってしまった申し訳ございません。

とりあえず、完結させたことが目標だったので、何か心に安心感が沸いてきています。

今回の話のテーマは”裏切り”についてでした。

大将は未来や美智子を裏切り、恭平は果歩を

間接的には龍之介も未来を裏切っていました。

最終話の龍之介の長台詞。

人は裏切りをいつかはしてしまつものです。

それは大切な人であつたり、見知らぬ人であつたり。

とにかくその間には深い傷が出来てしまいます。

今回はそれを愛という形で拭いました。

皆様はそれをどういう形で、拭つたり切り捨てたりしますか？

裏話ですが、恋愛完全マスターには色々なタイトル候補が小説が始まつた後に出できました。

まあ、始まつてしまつたものはしょうがないと思つて、このままタイトルを突き通したんですが、今よく考えてみたら…

完全に成し遂げることをマスターつて言つのは…？

…。

とつあえず、恋愛完全マスターを読んで下せつた皆様、本当にありがとうございました。

これからも『』の向くままで小説を書くつもりです。

文章の構成をよくし、誤字脱字をなくせたらな…と思いつつ

小説の勉強をしてみよつかな、なんて考えています。

本当に最後までお付き合いくださつた方々、心から感謝しています。

ご感想など、お待ちしております。

作者でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5438e/>

恋愛完全マスター

2010年10月22日00時23分発行